

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第3集

勝ち 川 遺 跡

1988

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

勝川遺跡の大規模な発掘調査が始まって今年で8年になります。本財団及びその前身の財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部による環状2号線用地内の事前調査によって、勝川廃寺ばかりでなく、弥生時代から現代にいたる勝川の歴史が次第に明らかになってきました。

今回の調査では、弥生時代の墓域がさらに北東へ広がること、刻書埴輪の出土により古墳時代後期には文字が当地へ伝播していたこと、勝川廃寺の西と北を区画する大溝を検出したことにより寺の規模が推定できたことなど重要な成果を得ました。

発掘調査の実施にあたり、各方面の方々に御配慮を賜わり、関係機関及び関係者の御指導と御協力をいただいたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

この報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いと存じます。

昭和63年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 中根 昭二

例 言

1. 本書は、昭和59年度に財愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が、昭和61年度に財愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会の委託を受けて、春日井市勝川町5丁目において実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査は瀬戸線建設工事の事前調査として実施した。調査期間は昭和59年4月～6月、昭和61年7月～9月（ただし瀬戸線側道部分の調査期間を含む）で、調査面積は合計1,680㎡である。調査終了後、瀬戸線工事が進められ遺構は滅失した。
3. 昭和59年度は財愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、上部肇・赤塚次郎が調査を担当し、補助員として後藤浩一が協力した。昭和61年度は財愛知県埋蔵文化財センター、清水雷太郎・赤塚次郎・松原隆治が調査を担当し、補助員として加藤とよ江が協力した。なお調査区の設定、実測図は国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
4. 調査にあたっては、愛知県教育委員会の指導をうけた。また春日井市教育委員会の協力を得た。
5. 本書の執筆は、松原隆治・後藤浩一・加藤とよ江が担当した。なお執筆分担は目次に記した。
6. 遺物の実測・整理は調査員・補助員で実施したが、以下の方々の協力があった。伊藤禎樹・大江茂子・加藤敏子・河瀬豊子・植田恵子
7. 製図は加藤とよ江を中心に河瀬豊子・植田恵子が担当した。遺物の写真撮影は加藤とよ江の協力を得て、松原隆治が担当した。
8. 編集は松原隆治が担当した。
9. 調査記録・出土遺物は財愛知県埋蔵文化財センターに保管する。

目 次

I. 調査概要	松原	1
1. 調査に至る経緯		1
2. 遺跡の立地と歴史的環境		1
3. 調査経過		3
II. 層位と遺構		4
1. 層位	松原	4
2. 遺構	加藤	5
III. 遺 物		12
1. 弥生土器	加藤	12
2. 土師器	加藤	15
3. 須恵器	加藤	15
4. 埴輪	加藤	17
5. 刻書埴輪	松原	18
6. 瓦類	後藤	18
7. 古瀬戸	松原	20
8. 陶磁器	松原	21
9. 石製品	後藤	46
IV. 考 察		47
1. 遺構	松原	47
2. 遺物 —— 勝川遺跡における近世陶磁器について ——	松原	49
V. ま と め	松原	59
注		60
遺物計測値一覧表		61

図版 目 次

- | | | | |
|------|------------|------|---------------|
| 図版 1 | 遺構写真撮影方向 | 図版14 | 遺構, 遺物出土状況(1) |
| 図版 2 | 遺構図(1) | 図版15 | 遺構, 遺物出土状況(2) |
| 図版 3 | 遺構図(2) | 図版16 | 遺構, 遺物出土状況(3) |
| 図版 4 | 遺構図(3) | 図版17 | 遺物(1) |
| 図版 5 | 遺構図(4) | 図版18 | 遺物(2) |
| 図版 6 | 遺構図(5) | 図版19 | 遺物(3) |
| 図版 7 | 遺構図(6) | 図版20 | 遺物(4) |
| 図版 8 | 遺構図(7) | 図版21 | 遺物(5) |
| 図版 9 | 遺構図(8) | 図版22 | 遺物(6) |
| 図版10 | 遺構図(9) | 図版23 | 遺物(7) |
| 図版11 | 調査区全景 59A区 | 図版24 | 遺物(8) |
| 図版12 | 調査区全景 61A区 | 図版25 | 遺物(9) |
| 図版13 | 調査区全景 59B区 | 図版26 | 遺物(10) |

挿 図 目 次

- | | | | |
|-----|---------------------------------|-------------|--------------------------------------|
| 図 1 | 勝川遺跡と周辺の遺跡…………… 2 | 土須恵器……………16 | |
| 図 2 | 発掘区の位置…………… 3 | 図15 | 円筒埴輪……………17 |
| 図 3 | 59B区北壁土層図…………… 4 | 図16 | 刻書埴輪(S E 12出土)1/1 ……18 |
| 図 4 | 勝川 I・II期の遺構…………… 6 | 図17 | 瓦類……………19 |
| 図 5 | 勝川III期の遺構…………… 7 | 図18 | 井戸 S E 12(59B区)出土遺物…………22 |
| 図 6 | 西大溝 S D 33の土層断面図………… 8 | 図19 | 水回り施設 S X 22(59B区)出土
遺物(1)……………24 |
| 図 7 | 勝川IV期の遺構…………… 9 | 図20 | 水回り施設 S X 22(59B区)出土
遺物(2)……………25 |
| 図 8 | 水回り施設 S X 21平面図及び断
面図……………10 | 図21 | 水回り施設 S X 22(59B区)出土
遺物(3)……………26 |
| 図 9 | 方形周溝墓 S Z 24出土弥生土器…13 | 図22 | 水回り施設 S X 22(59B区)出土
遺物(4)……………27 |
| 図10 | 弥生土器出土位置……………14 | 図23 | 土坑 S K 57(59A区)出土遺物…………28 |
| 図11 | 方形周溝墓 S Z 25出土弥生土器…14 | 図24 | 土坑 S K 100(59B区)下層出土 |
| 図12 | 住居跡 S B 46出土遺物(59A)……15 | | |
| 図13 | 土坑 S K 52出土須恵器(61A)……15 | | |
| 図14 | 西大溝 S D 33, 北大溝 S D 79出 | | |

遺物(1).....30	図31 S X 21(59B区)出土遺物.....38
図25 土坑 S K 100(59B区)下層出土	図32 土坑 S K 61(59A区)出土遺物(1)…41
遺物(2).....31	図33 土坑 S K 61(59A区)出土遺物(2)…42
図26 土坑 S K 100(59B区)下層出土	図34 土坑 S K 61(59A区)出土遺物(3)…43
遺物(3).....32	図35 土坑 S K 61(59A区)出土遺物(4)…44
図27 土坑 S K 100(59B区)上層出土	図36 土坑 S K 61(59A区)出土遺物(5)…45
遺物(1).....34	図37 石製品.....46
図28 土坑 S K 100(59B区)上層出土	図38 59B区遺構切り合い関係模式図…50
遺物(2).....35	図39 碗の形状による分類.....50
図29 土坑 S K 99(59B区)出土遺物(1)…36	図40 碗の形状変化.....50
図30 土坑 S K 99(59B区)出土遺物(2)…37	

表 目 次

表 1 遺構の時期区分..... 5	表 7 皿の分類.....52
表 2 遺物の分量.....50	表 8 鉢の分類.....52
表 3 碗の形状別数量.....52	表 9 灯火関連道具の分類.....52
表 4 装飾技法による碗の分類.....52	表10 陶磁器の年代.....55
表 5 形状と装飾技法による分類.....52	表11 遺構の年代.....58
表 6 皿の分量.....52	

〈調査協力者〉

東 征 江	伊 藤 芳 子	上田外志美	吉 川 総 子	小 松 豊 子
浜 田 高 子	藤 井 洋 子	松井かねよ	養島久仁恵	水野アイ子
山 田 益 江	安 達 た み	足 立 利 子	足 立 洋 子	大野たかゑ
梶 藤 良 子	加 藤 政 子	加藤美智子	川 島 鈴 子	河 端 春 美
桜 田 恵 子	佐竹富士子	神野みどり	杉浦あつ子	外 妙 子
土屋登美子	野 村 明 美	野 村 弘 子	橋本由紀子	長谷川和子
長谷川隆子	藤 井 絹 代	福 田 光 子	前 川 禮 子	杉浦八重子
松 田 郁 代	山 津 久 子	山 中 和 子	吉 田 純 子 (以上発掘作業)	
植 田 恵 子	加 藤 敏 子	河 瀬 豊 子	大 江 茂 子	杉山美智子
戸 川 真 理 (以上整理作業)				

勝川遺跡関係参考文献

- 春日井市教育委員会1981～1984『勝川廃寺範囲確認調査概報』第1次～第4次
 勸愛知県教育サービスセンター1982『環状2号線関係発掘調査中間概報Ⅰ』
 勸愛知県教育サービスセンター1983『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
 勸愛知県教育サービスセンター1984『勝川』
 勸愛知県教育サービスセンター1985『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』
 勸愛知県埋蔵文化財センター1986『年報 昭和60年度』
 勸愛知県埋蔵文化財センター1987『年報 昭和61年度』

I. 調 査 概 要

1. 調査に至る経緯

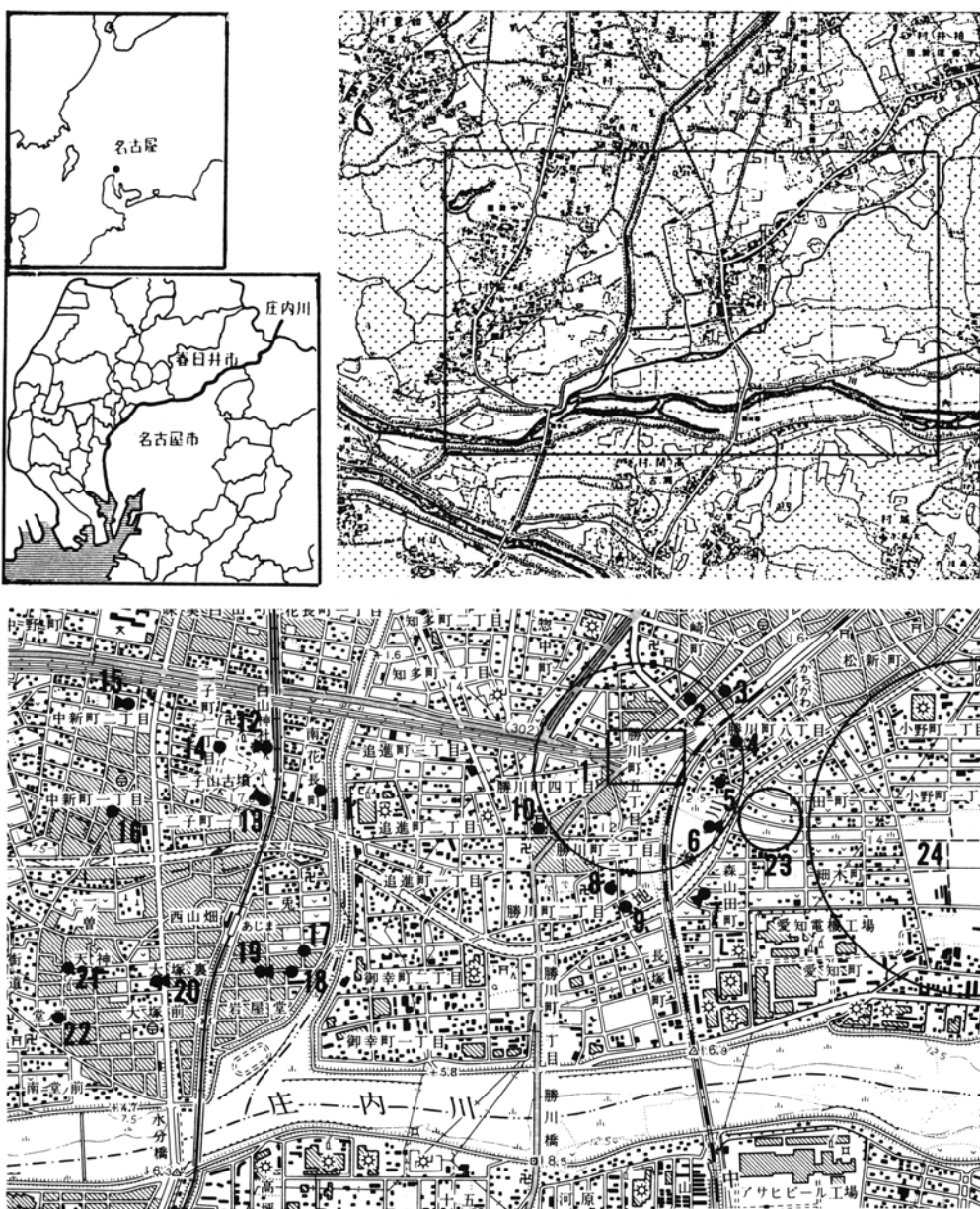
勝川遺跡⁽¹⁾（遺跡番号04127）が所在する愛知県春日井市勝川町4丁目・5丁目周辺は、古くから古瓦散布地として知られ「勝川廃寺」の存在が推定されていた。しかし、当地に名古屋環状2号線（一般国道302号線）や瀬戸線が通ることになり、それに伴い土地区画整理事業も実施されることになった。そのため昭和55年から春日井市教育委員会による勝川廃寺範囲確認調査、昭和56年から財愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部による環状2号線用地内の調査も実施され多くの成果をあげた。昭和59年からはさらに瀬戸線・土地区画整理事業に伴う調査も実施され、昭和60年には財愛知県埋蔵文化財センターが調査主体となり、現在に至っている。

なお財愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部は、西春日井郡清洲町から名古屋市西区にかけて所在する朝日遺跡を始めとする環状2号線用地内の遺跡の発掘調査を主目的として昭和56年4月に設立されたが、さらに増加する公共事業に伴う発掘調査や遺物の保存活用・保護思想の普及啓蒙をはかるために、財愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部のすべての業務を継承し、人員増加をはかって昭和60年4月に財愛知県埋蔵文化財センターが設立された。したがって昭和60年度以降の発掘調査も報告書の作成も財愛知県埋蔵文化財センターが行うことになった。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

春日井市は庄内川を挟んで名古屋市守山区の北に接している。勝川遺跡は春日井市の南西端近くに位置し、鳥居松段丘面縁辺部及びその南の庄内川沖積面に立地する。段丘上で標高13m、段丘下で標高11mを測る。

周辺の遺跡としては、4km北東にある小牧段丘面縁辺部に旧石器時代の梅ヶ坪遺跡、鳥居松段丘面縁辺部に沿って東4.5kmには縄文時代後期の篠木遺跡がある。東2kmの沖積面にはかつて王子製紙工場建設に際し弥生土器が見つかった王子遺跡がある。また勝川遺跡の南東山地区では弥生時代から古墳時代にかけての南東山遺跡・南東山古墳が知られる。古墳時代の遺跡としては、勝川遺跡周辺に6世紀を中心とする多くの古墳がある。大塚古墳、オシメンド古墳等のある勝川古墳群、西1～1.5kmに位置する白山神社古墳、二子山古墳、春日山古墳等の味美古墳群、またその南には名古屋市域になるが、白山藪古墳、長塚古墳、大塚古墳等の属する味鋤古墳群がある。



1	勝川遺跡, 勝川廃寺	9	東白塚古墳	17	シギ塚古墳
2	笹原古墳	10	愛宕神社古墳	18	岩屋堂古墳
3	山神古墳	11	ドンドン塚古墳	19	長塚古墳
4	狐塚古墳	12	白山神社古墳	20	大塚古墳
5	南東山古墳	13	二子山古墳	21	天神簀古墳
6	大塚古墳	14	御旅所古墳	22	白山簀古墳
7	森（オシメンド）古墳	15	春日山古墳	23	町田遺跡
8	兜塚古墳	16	伊勢山古墳	24	松河戸遺跡

図1 勝川遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

3. 調査経過

〈昭和59年度調査〉

調査地点 春日井市勝川町5丁目2239～41, 2167他

調査期間 A区 4月12日～5月25日, B区 5月14日～7月3日

調査面積 A区 950㎡, B区 400㎡

近世の整地作業や廃材投棄坑による攪乱のためA区の検出作業は1回で終了したが, B区は江戸末と弥生～平安の2回の検出作業を実施した。遺構平面図はA区最終遺構面平面図と北壁断面図を $\frac{1}{50}$ で記録した。B区は遺構平面図と北壁断面図を $\frac{1}{50}$ で記録した。

〈昭和61年度調査〉

調査地点 春日井市勝川町5丁目2207, 2236他

調査期間 7月11日～10月3日

調査面積 280㎡ (実際には隣接地と合わせ1313㎡を同時に調査)

重機による表土剥ぎ作業後, 検出作業は1回で完了した。航空測量により遺構平面図を $\frac{1}{50}$ で作成した。断面図は手測により, 発掘区北壁を $\frac{1}{20}$ で記録した。

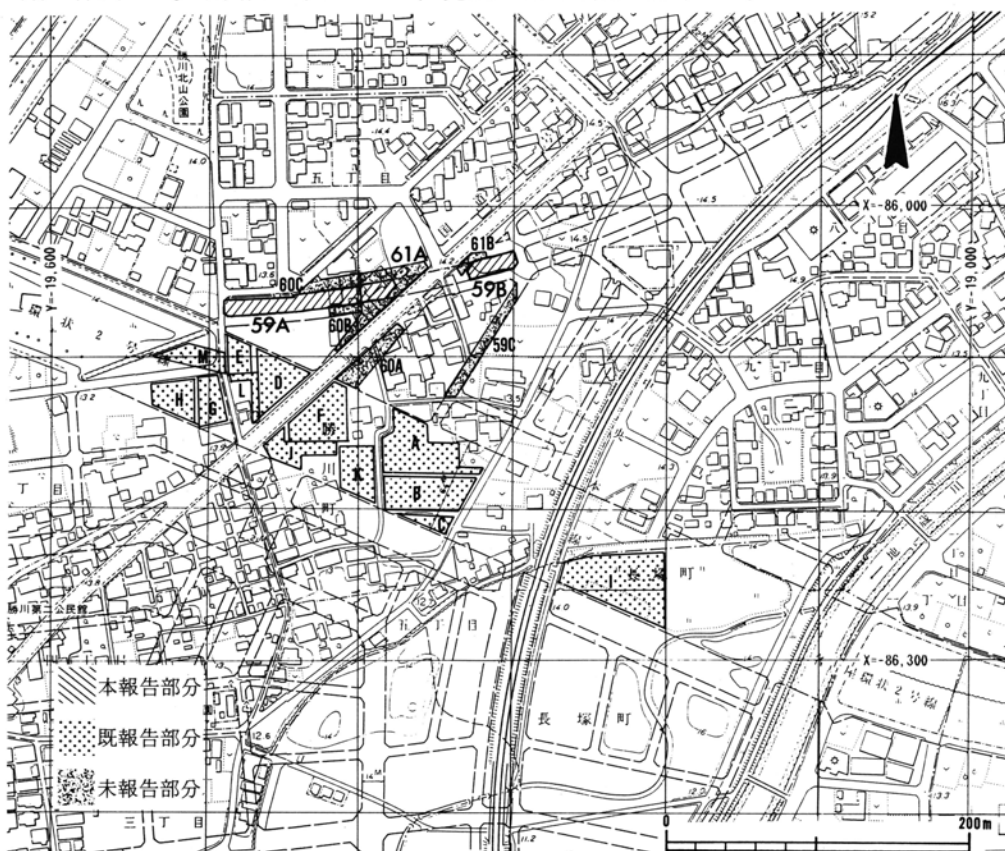


図2 発掘区の位置

II. 層位と遺構

1. 層位

調査地の旧地表は59A区西端で標高約13.7m、59B区の東端で標高約13.9mである。層位は、基本的には上から上部整地層（厚さ30～40cm）、下部整地層（厚さ50cm）、赤色粘質土（厚さ20～30cm）、黄色砂質土（厚さ10～20cm）、洪積世砂礫層（鳥居松層）である。上部整地層と下部整地層との境界は必ずしも明瞭ではないが、前者は現代を中心とする礫混合土で、後者は明治以降の整地層である。赤色粘質土以下は地山と考えられ、赤色粘質土上面が遺構検出面であり、I～IV期を同一面で検出した。ただし、調査地ではかつて下街道、後に国道19号線沿いの町並みが形成されていたために土取り、整地が著しく、59A区と61A区の西半は赤色粘質土層、黄色砂質土層が削られ、洪積世砂礫層上面が検出面となった。59B区では下部整地層の下位に江戸時代末期の井戸を江戸時代末～明治初期の陶器を含む褐色土で整地し、その西側では奈良時代の遺物が出土する溝を奈良時代の須恵器を包含する淡褐色土で整地した状況を確認した(図3)。なお弥生時代後期の土器をもつ方形周溝墓の周溝も奈良時代の整地層下で検出した。

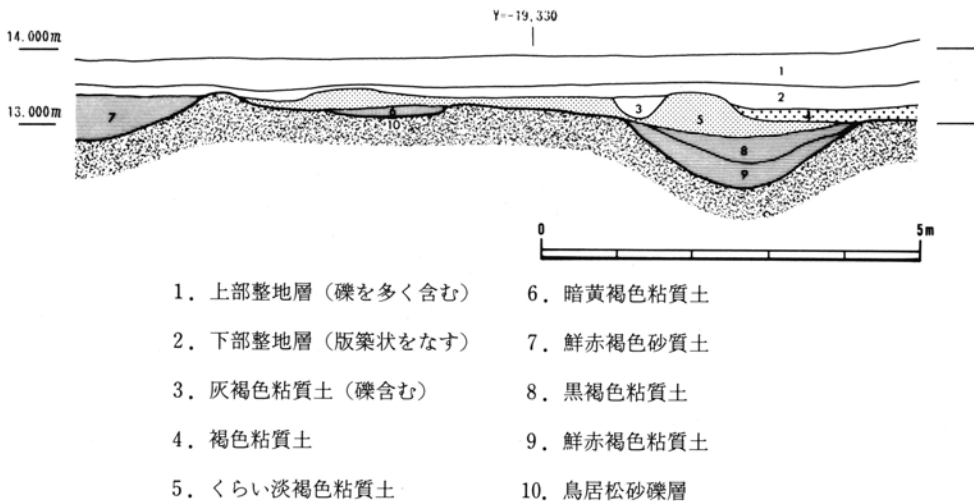


図3 59B区北壁土層図

2. 遺構

検出した主な遺構は、方形周溝墓3基、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物1棟、溝11条、土坑7基、井戸4基である。このほかに多数の小溝や小穴があるが時期不明、現代と考えられるものは図示、記述とも省略した。また大規模な土坑が多数認められたが、いずれも瀬戸線工事、土地区画整理事業に伴う家屋転居時の廃材投棄坑であることが明らかであるが、遺構がこれらに切られており、遺構の相関関係が理解しにくくなることを避けるため、廃材投棄坑の上端線のみ図示した。

検出した遺構はⅠ期（弥生時代中期）、Ⅱa期（弥生時代後期）、Ⅱb期（古墳時代）、Ⅲa期（7世紀後半～8世紀前半）、Ⅲb期（8世紀後半）、Ⅳ期（18～19世紀）に大別されるので、その順序にしたがって記述する。なお遺構は方形周溝墓S Z、建物S B、溝S D、土坑S Kなどの遺構の種類を示す記号のあとに既刊の報告書（財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部 1984『勝川』）から通しの一連番号を付した。

		既報告分（上屋敷地区のみ）	今回報告分
Ⅰ	（弥生中期）	S Z 14, S K 04, 41, S D 10	S Z 23
Ⅱ	a （弥生後期）	S Z 15, 16, 17, 18, 19, 20, 22	S Z 24, 25
	b （古墳時代）	S Z 03, 05, 09, 10, 11, 13	S K 52
Ⅲ	a （7 c 末～8 c 前）	S B 08, 09, 20, 21, 22, 23 S D 33, 34, 37	S B 46, 47 S D 33, 63～65, 79, 81, 82, 84 S K 53
	b （8 c 後半～）	S K 31 S X 03	
Ⅳ	（18, 19 c）	S A 04, 08, 10 S B 04 S D 20 S K 13, 16, 38, 39, 40 S X 05～09, 12, 16, 19 S E 01～03, 05, 07	S D 74, 75, 77 S K 99～101, 105 S X 21, 22 S E 09～12

表1 遺構の時期区分

1) 勝川Ⅰ期(弥生時代中期)の遺構(図4)

S Z 23 59B区中央南寄りで検出した方形周溝墓。主軸はN-52°-Wを示す。墓の規模は8.4×7m, 溝幅は0.35~0.5m, 溝の深さは検出面より0.63mを計る。埋土は, 上層が暗褐色粘質土, 下層が明赤褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが, 四隈に陸橋を持つこと, 主軸方向が真北から45°以上ふれていることからⅠ期と考えられる。

2) 勝川Ⅱ期(弥生時代後期~古墳時代)の遺構(図4)

S Z 24 59B区中央北側の方形周溝墓。南溝と東, 西溝の一部を検出。主軸はN-17°-Wを示す。墓の規模は東西14mで, 勝川遺跡の方形周溝墓としては大型。溝幅は0.6~1.2m, 溝の深さは検出面より0.65m。埋土は上層が黒褐色粘質土, 下層が赤褐色粘質土である。遺物は南溝上層より広口壺, 短頸壺, 壺底部, 西溝下層より短頸壺が出土(図9)。

S Z 25 59B区西端で東溝のみ検出した方形周溝墓。主軸はN-21°-Wを示し, 規模は一辺7.5m前後であろう。溝の幅は0.8m, 深さは0.85mを計る。埋土は赤褐色粘質土である。遺物は台付盆, 短頸壺が出土した(図11)。

S K 52 61A区中央で検出した2.4m×1.0m, 深さ0.26mの楕円形の土坑である。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器の高坏が4点出土した(図13)。

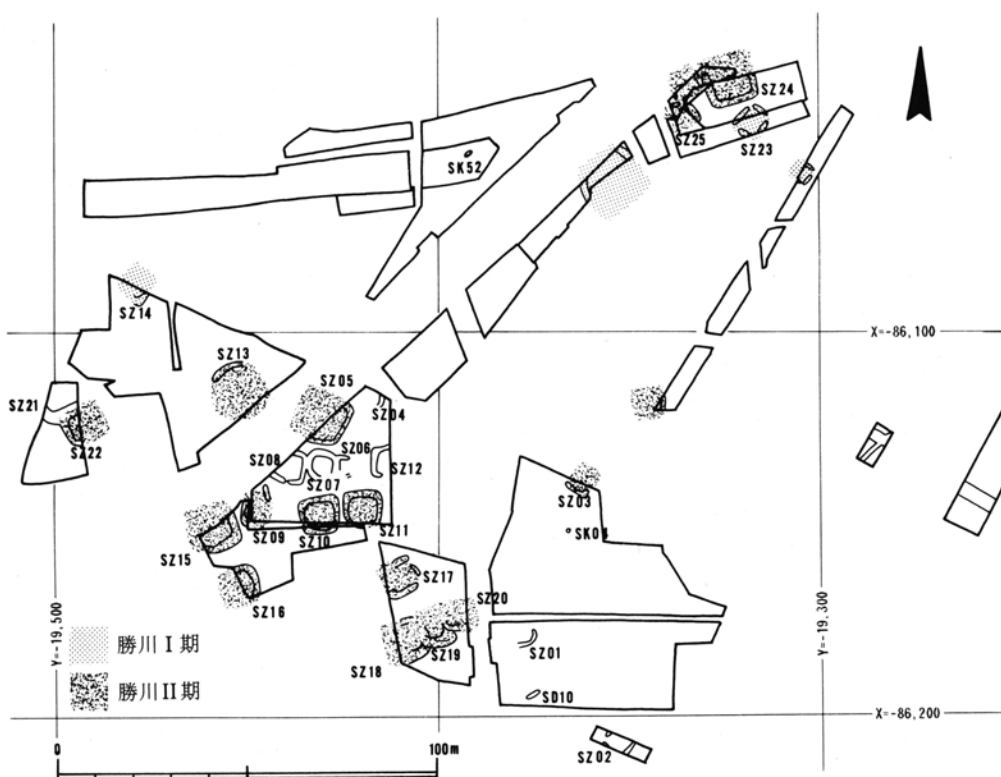


図4 勝川Ⅰ・Ⅱ期の遺構

3) 勝川Ⅲ期（奈良・平安時代）の遺構（図5）

「寺」と付随する溝，土坑，建物群である。

SD33（図版14-5，6） 59A区西端で検出した南北方向の溝。幅4.6m，深さ0.6mを測る。埋土は上層が明褐色土，中層が褐色粘質土，下層が褐色砂質土である（図6）。遺物は須恵器蓋，壺，高坏（図14）等や瓦の破片が出土した。この溝は昭和56年の発掘調査（E，M区）で検出した溝の続きで，勝川廃寺の寺域西大溝と考えられる。

SD63 59A区中央付近の南北方向の溝。幅0.8m，深さ0.2mを測る。埋土は褐色粘質土で，遺物は須恵器，布目瓦の細片が出土した。

SD64（図版14-3，4） 61A区中央付近の南北方向の溝。幅1.6m，深さ0.3mを測る。埋土は明褐色粘質土で，遺物は須恵器，布目瓦の細片が出土した。

SD65 61A区中央付近の南北方向の溝。幅0.5m，深さ0.28mを測る。埋土は明褐色粘質土で，遺物は須恵器，布目瓦の細片が出土した。

SD79 59B区西端から中央にかけて検出した東西方向の溝。幅0.5m，深さ0.2mを測る。埋土は暗黄褐色粘質土で，遺物は須恵器の坏身4点，坏蓋，壺2点，高坏脚部，灰釉壺が

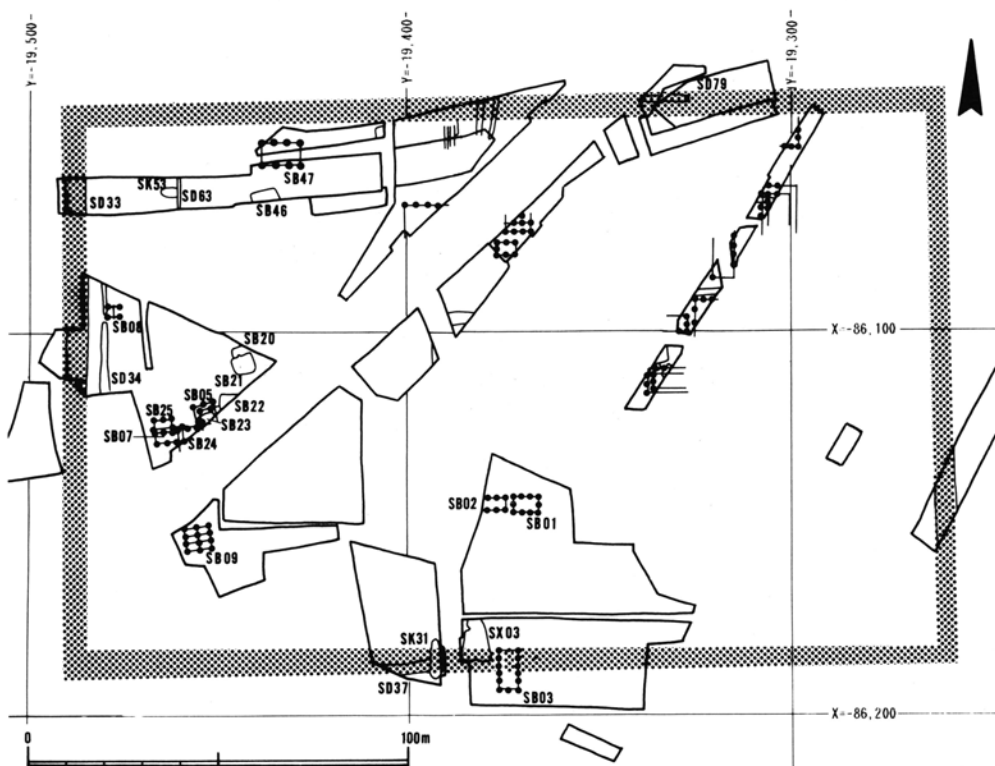


図5 勝川Ⅲ期の遺構

出土した(図14)。この溝は勝川廃寺の寺域北大溝と推定される。

S D81 61A区東端付近の南北方向の溝。幅0.38m、深さ0.3mを測る。埋土は明褐色粘質土で、遺物は須恵器、布目瓦の細片が出土した。

S D82 61A区東端、S D81の東3mで検出した南北方向の溝、幅0.6m、深さ0.2mを測る。南の方は後世の削平により滅失する。埋土は明黄褐色粘質土である。遺物は須恵器、土師器、布目瓦の細片が出土した。

S B46(図版14-1, 2) 59A区中央、発掘区の南端で $\frac{1}{2}$ ほど検出。東西6.6m、床面は検出面より0.13mを測る竪穴住居跡。遺物は、北東ビット中より須恵器坏蓋、土師器甕、製塩土器が出土した(図12)。なおこの住居跡は春日井市教育委員会によって昭和57年に北西 $\frac{1}{4}$ が検出され須恵器坏蓋が出土した住居跡に同一である。

S B47 59A区中央、発掘区の北端で検出。桁行4間、東西棟の掘立柱建物。柱間2.6m。遺物は須恵器、布目瓦の細片が出土した。

S K53 59A区中央やや西寄りで検出した土坑。長径5m×短径2.2m、深さ0.32mを測る楕円形の土坑である。東側はS D63に切られている。遺物は須恵器坏蓋、壺、その他土師器、布目瓦の細片が出土した。

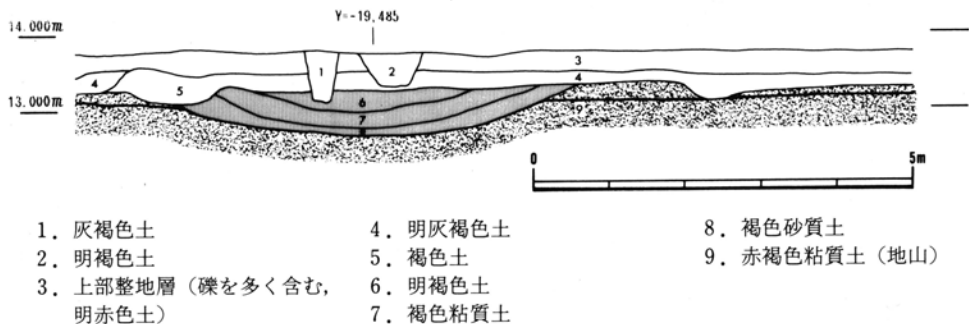


図6 西大溝S D33の土層断面図

4) IV期（江戸時代末～明治時代）の遺構（図7）

発掘区は下街道勝川宿東端付近と推定され、主な遺構には溝、井戸、それらに伴う用排水施設がある。

S X 21（図8，図版15—3，4） 59B区の東端近くで検出。東側は後世の削平により破壊されているが、規模は、 $2.6 \times 3.5\text{m}$ 、深さは最深部で検出面より、 -0.75m を測る方形土坑で、その中に木組、杭、石組を組み合わせ、暗赤褐色粘質土でうらごめをした施設である。埋土は、上から暗褐色粘質土、暗灰色粘質土、黒褐色砂質土が堆積し、最下層は常時湿った状態にあったことを示す青灰色粘質土がたまっていた（図8）。遺物は陶磁器が出土した（図31）。この遺構は北接するS E 11とセット関係にあり、既報告のS X 16—S E 07と同様の施設で、洗い場と推定される。

S X 22（図版15—5，6） 59B区南西端近くで検出した。直径 1.8m 、深さ 0.4m を測る不整円形の土坑である。埋土中から大量の陶磁器が出土した（図19～22）。この土坑はS E 12廃絶後掘りくぼめられており、S D 74とセットをなし、排水をためた施設と考えられる。

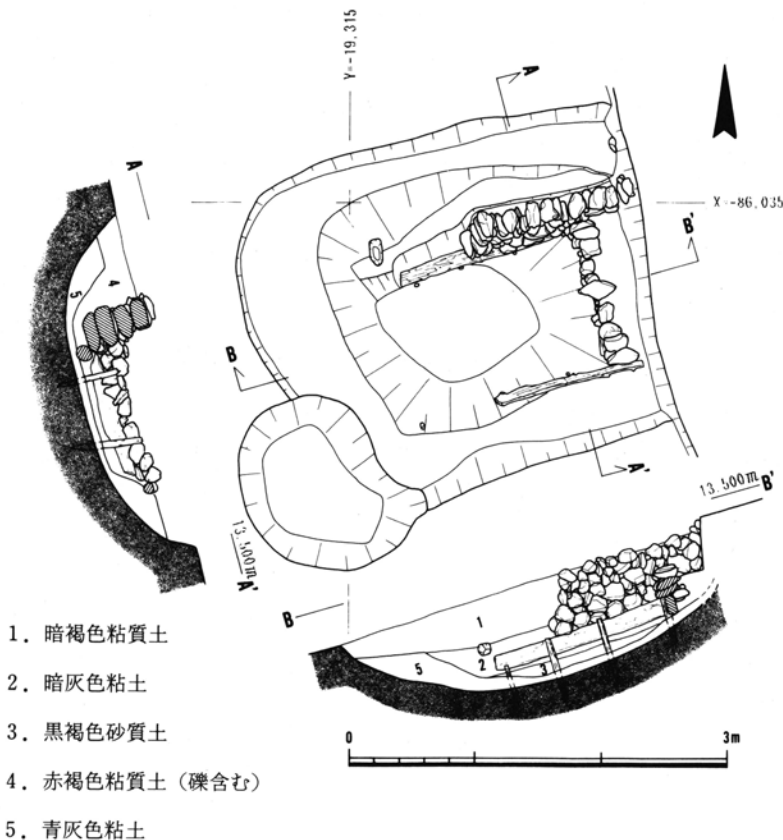


図8 水回り施設S X 21平面図及び断面図

S E 10 59B区南西端近くで検出。径2.2mを測る円形の石組み井戸である。この井戸はS E 12が廃絶後掘られた井戸で、S X 22と同時存在していたと考えられる。

S E 11 59B区北東端近くで検出。径3×2.7mを測る不整円形の石組み井戸である。

S D 74 59B区西部で検出。幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は礫を含む灰黒色粘質土である。遺物は陶磁器が出土した。この溝はS E 10及びS E 12とつながっている。

S D 75 59B区中央付近で検出。幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層が暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。この溝はS K 105とつながっている。

S D 78 59B区中央付近で検出。幅0.8m、深さ0.25mを測る。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層が暗灰褐色粘質土である。この溝はS D 74、75掘削の際の整地により埋没している。

S K 57 59A区西部で検出。西側は廃材投棄坑により破壊されているため完全な形状は分からないが、径1.6m、深さ0.25～0.3mの不整円形の土坑である。遺物は埋土中より陶磁器が出土した（図23）。

S K 61 59A区中央付近、発掘区北端で検出。北側が調査区域外のため全体の形状は分からないが、短径2.1m、深さ0.55～0.8mを測る楕円形土坑である。埋土は暗灰褐色土である。遺物は埋土中より陶磁器が大量に出土した（図32～図36）。

S K 99 59B区中央付近で検出。径2.1×1.6m、深さ0.5mを測る楕円形の土坑である。S K 100の南側を掘削している。遺物は埋土中より陶磁器が出土した（図29、30）。

S K 100 59B区中央付近で検出。3.4×1.6m、深さ0.9mを測る隅丸方形の土坑である。埋土は円礫層をはさんで上下2層に分かれる。遺物は上、下層共に陶磁器が大量に出土した（図24～図29）。

S K 101 59B区東端付近で検出。径0.8m、深さ0.04mを測る円形土坑で、常滑産の大甕が埋置されている。この土坑はS X 21の南東端を掘削している。

S K 104 59B区中央付近で検出。径1.0×0.9m、深さ0.35mを測る楕円形の土坑である。遺物は埋土中より内耳鍋3点、灰釉皿が出土した。

III. 遺 物

出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦、陶磁器、石製品等がある。瓦は近世の整地層からの出土量が多く遺構に伴うものはほとんどないが、陶磁器は遺構に伴うものが多い。遺構出土遺物を中心に時期別に記述するが、弥生土器と瓦の分類は『勝川』に、また陶磁器の分類は次章の考察に従うものとする。

1. 弥生土器 (図9～11)

今回報告分の弥生土器は全て方形周溝墓周溝内より出土しており、すべて供献土器といえる。時期は勝川弥生IV期(山中期)及びV期(欠山期)に属する。

〈勝川弥生IV期〉

S Z 24 短頸壺 2点, 広口壺 1点, 壺底部 1点が出土。

短頸壺(1) 西溝下層より出土。口径7.4cm, 底径3.0cm, 器高10.3cm, 体部最大径11.0cmを測る。器表面は内外面共に磨滅。胎土は砂粒含み, 焼成はやや甘く褐色を呈す。

短頸壺(3) 南溝より出土。下胴部, 底部欠損。口径10.2cmを測る。器表は内外面とも磨滅。胎土は細石粒含み, 焼成はやや甘く褐色を呈す。

広口壺(5) 南溝中層より倒置した状態で出土。口径15.2cm, 底径4.0cm, 器高27cm, 体部最大径23.8cmを測る。器表面は磨滅が著しく, 外面は体部上位にかすかに櫛による凹線文がみえる。内面は指による整形, そののち体部下位にハケ目を施す。また下胴部には焼成後穿孔を施す。胎土は砂粒多く含み, 焼成良好で淡褐色を呈す。

壺底部(6) 南溝より出土。底径6.5cmを測る。土器の表面は内外面共に磨滅。胎土は砂粒含み, 焼成はやや甘く淡褐色を呈す。

〈勝川弥生V期〉

S Z 25 短頸壺 1点, 台付盃 1点が出土。

短頸壺(9) 東溝下層より出土。口径8.8cm, 底径3.0cm, 器高15.0cm, 体部最大径17.2cmを測る。土器の表面は磨滅が著しく, 内面の指による整形のみが認められる。口縁部は横ナデにより仕上げている。下胴部には焼成後穿孔を施す。胎土は0.5cm位の礫を含み, 焼成良好, 褐色を呈す。

台付盃(8) 東溝下層より横位で出土。口径9.6cm, 底径9.1cm, 器高12.2cm, 坏部最大径10.6cmを測り, 坏と脚の比は3:2である。坏部外面はタテヘラミガキにより仕上げる。内面は磨滅。脚部はヨコナデにより仕上げ, 上位に凹線文を施す。台の3ヶ所に透孔を施す。胎土は砂粒含み, 焼成は良好で褐色を呈す。

この他，昭和61年に勝川土地区画整理事業に伴う事前調査で今回報告地点の北隣部分の調査を行い，同一周溝墓と考えられる周溝埋土中から出土した弥生土器についても参考のため実測図を呈示した（図9－2，4，図11－7，10，11）。

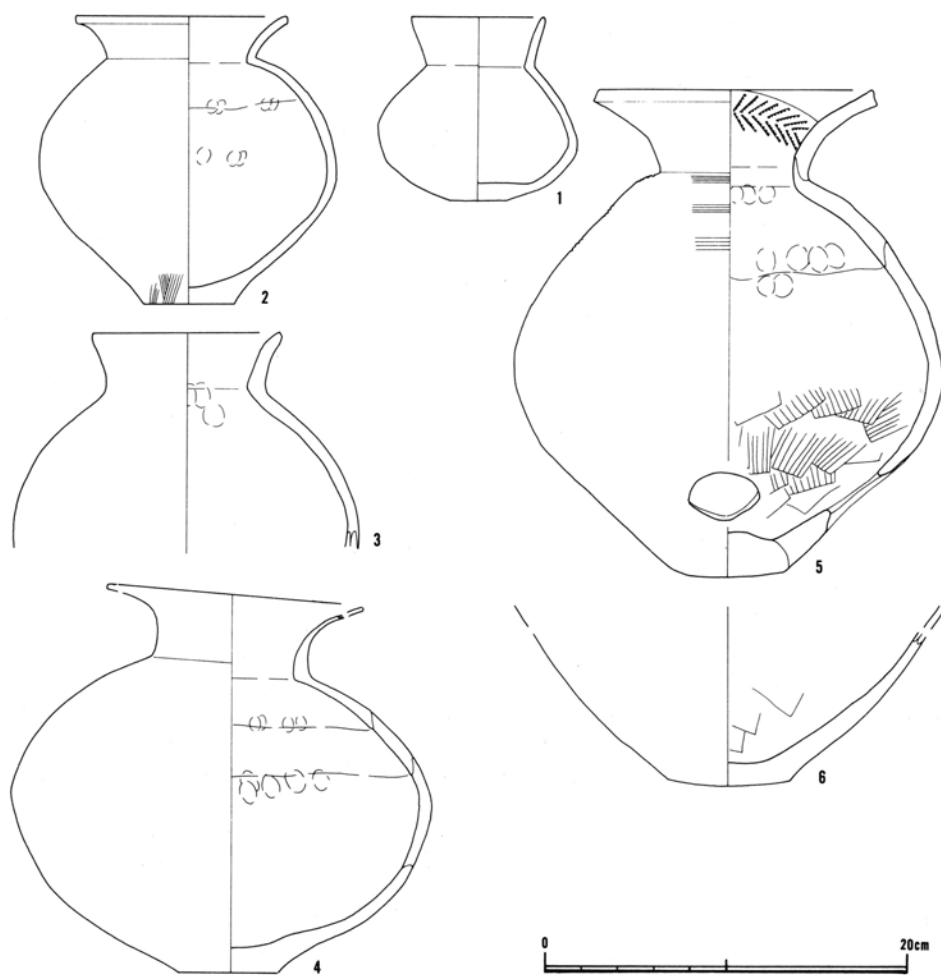


図9 方形周溝墓S Z24出土弥生土器

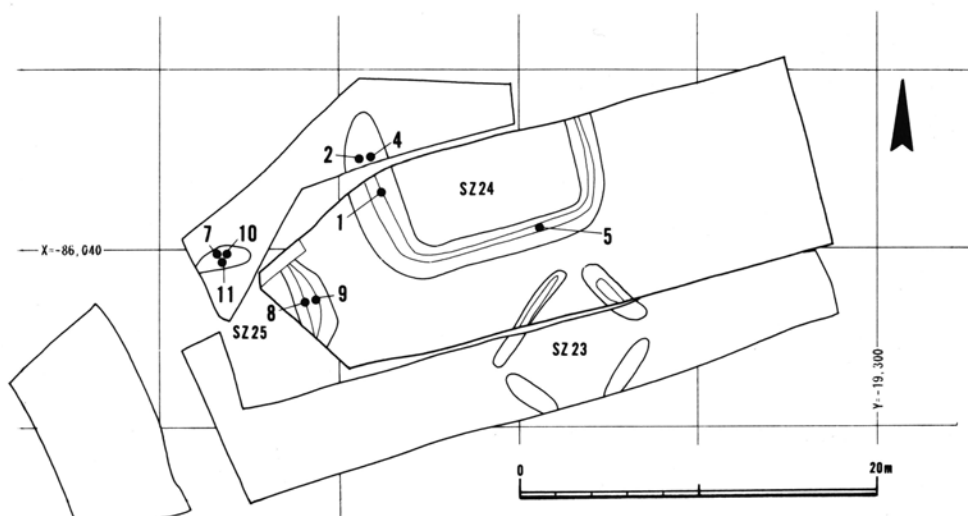


图10 弥生土器出土位置

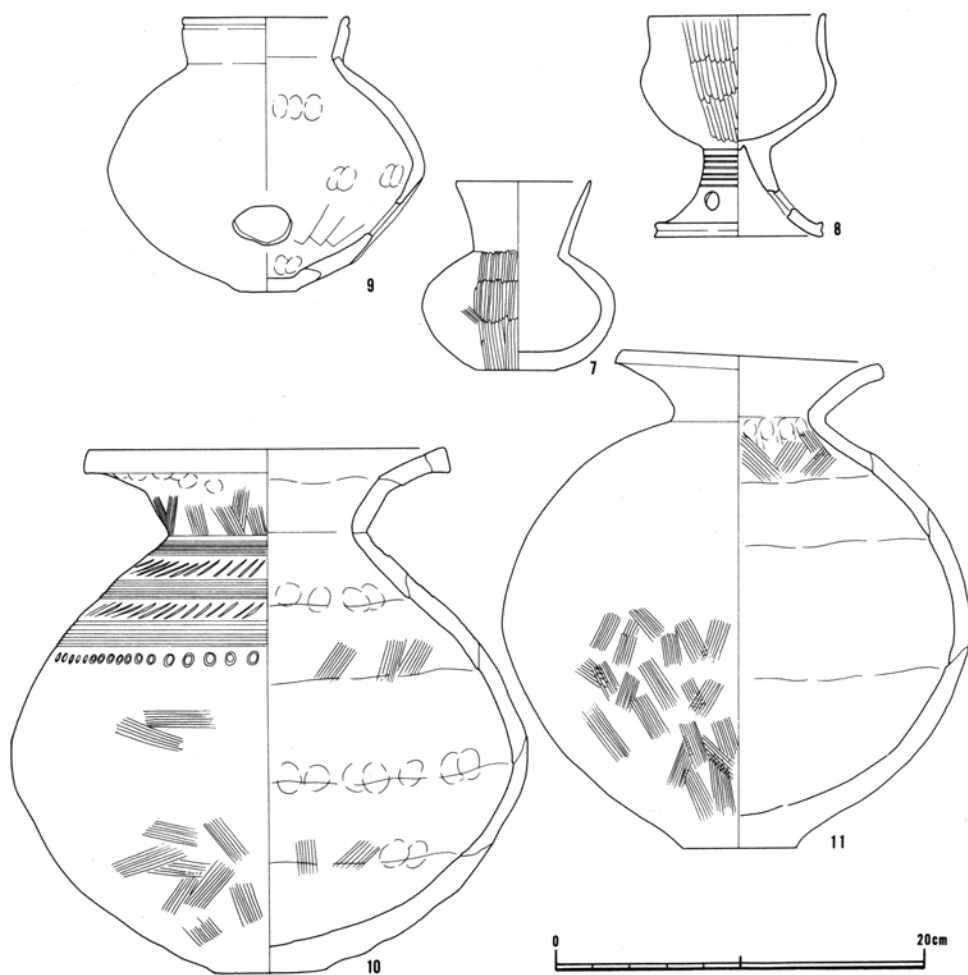


图11 方形周溝墓 S Z 25出土弥生土器

2. 土師器 (図12)

ほとんど出土していないが、59A区の住居跡S B 46からわずかにまとまって出土した。

製塩土器(12) S B 46北東ビット中より出土。口径8.5cmを測る。坏の一部と推定できる。胎土砂粒を含み、軟質で褐色を呈す。

甕(13) S B 46北東ビット中より出土。底径6.4cmを測る。外面はタテ方向の刷毛目を施し、内面は横方向の板ナデにより仕上げる。外面には煤が付着する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈す。

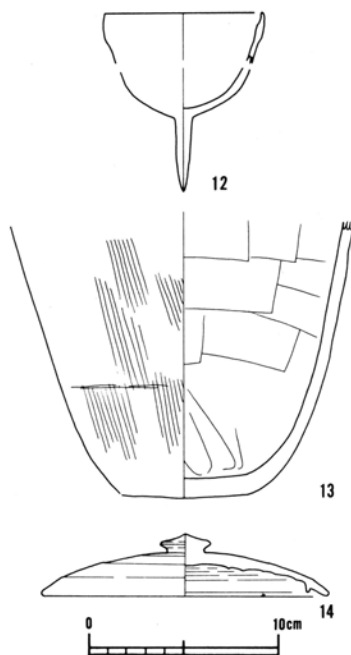


図12 S B 46出土遺物 (59A)

3. 須恵器 (図13)

S K 52 (図13—15~18) 高坏が4点出土した。いずれも坏部下半のみヘラ削り未調整。脚は18が残存しないが、4点とも同型式で、やや高い脚に3方向の一段透孔がある。東海地方須恵器編年のIIに属し、6世紀前半のものであろう。

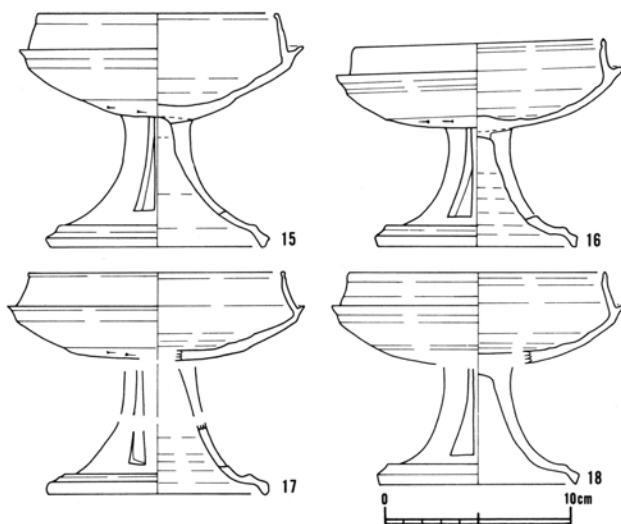


図13 S K 52出土須恵器 (61A)

S B 46 (図12-14) 土師器に伴出して、須恵器の蓋が1点出土した。この住居跡はかつて1/4は春日井市教育委員会が調査し、やはり須恵器蓋を1点発見している。東海地方須恵器編年のⅢの後半(7世紀後半)と考えられる。勝川Ⅲ期の遺構・遺物である。

S D 33 (図14-28~30) 寺域を画する西大溝と考えられ、須恵器蓋(28)、高盤(29)、短頸壺(30)が出土。東海地方須恵器編年のⅢ期後半~Ⅳ期前半と考えられる。

S D 79 (図14-19~27) 寺域を画する北大溝と考えられる。かえりのない坏身(19, 20)や付高台のある坏身(21~23), 高台のない坏身(24), 長頸壺(25), 甕(26), 平瓶(27)が出土した。

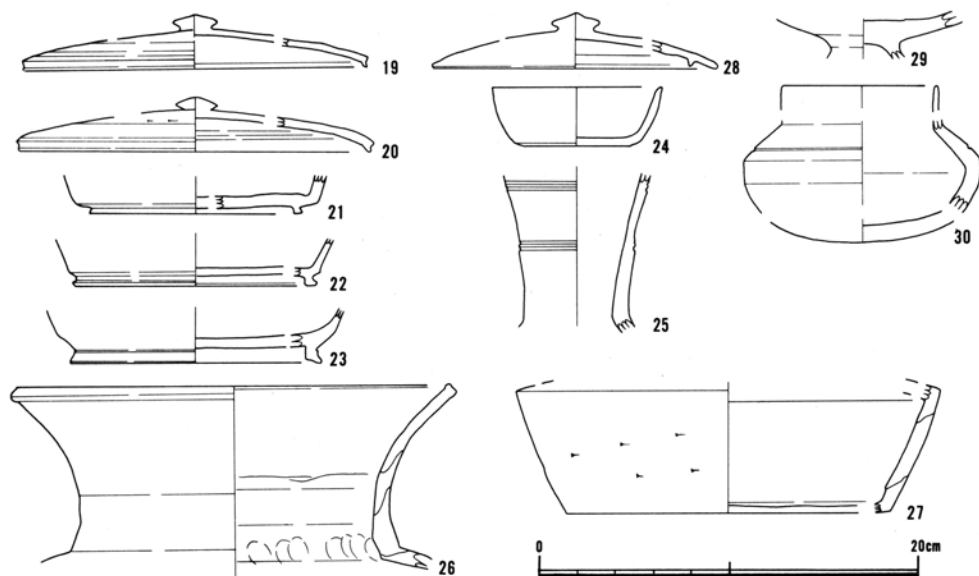


図14 S D 79 (19~27), S D 33 (28~30) 出土須恵器

4. 埴輪 (図15)

明瞭な遺構に伴うものは出土しなかったが、59B区の江戸時代後期の整地層から円筒埴輪の破片が数個体分出土した。すべて二次堆積によるもので、遺構とは無関係であるが、破片数の多さから近くに古墳が存在したであろうことが考えられる。

出土した円筒埴輪片は、すべて須恵質のものであり、外面調整技法によって次の2種類に分類ができる。

1. 断続的なナナメハケないしはタテハケで二次調整のみられないもの (1, 5, 9)
2. タテハケのち埴輪を回転させながらヨコハケを施したもの (2, 4, 6, 8, 10)

この様な特色を示す埴輪は、5世紀末から6世紀に多く見られるものであり、勝川遺跡出土の埴輪もこの時期に比定できよう。

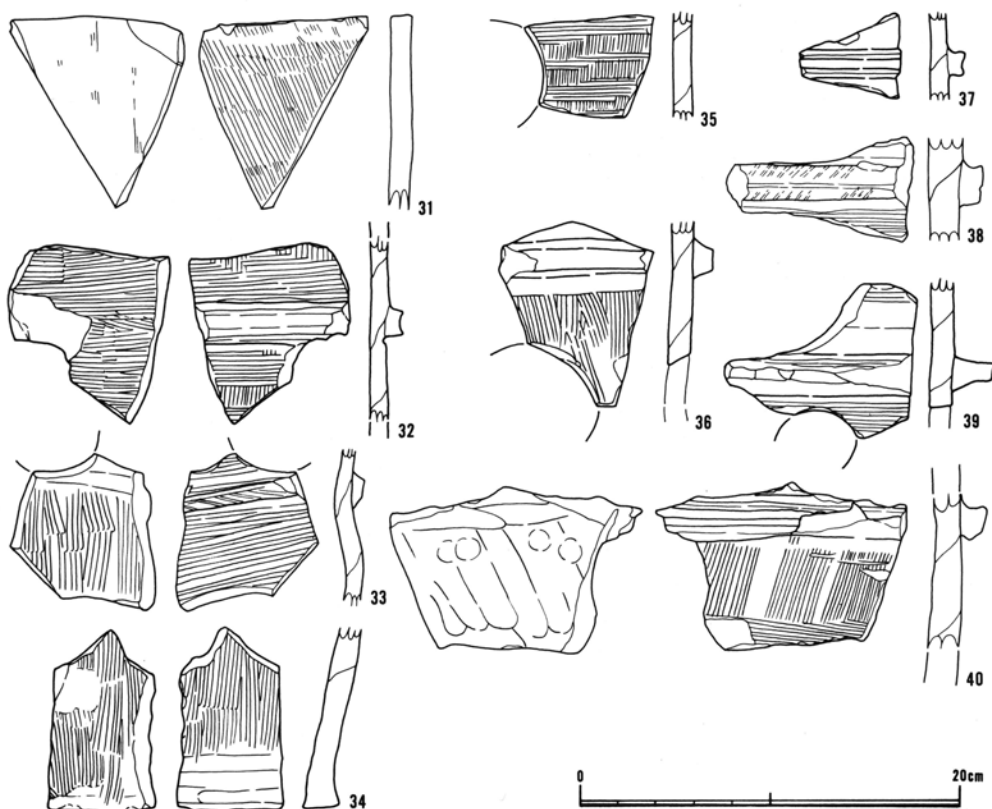


図15 円筒埴輪

5. 刻書埴輪 (図16)

1点出土した。円筒埴輪凸帯部に相当する。焼成はやや軟質，窖窯焼成で，淡青灰色を呈する。胎土には白色砂粒が若干含まれる。外面調整はヨコハケ後ヨコナデで，タガの脇にわずかにヨコハケの痕跡が認められる。内面はナデ調整。文字は半乾燥時に，円筒埴輪を正置した場合上下逆方向に，ヘラガキされている。現状では3文字確認でき，文字間3mmをはかる。第1文字は縦方向に一画のみ，第2文字は「子」ないし「于」字，第3文字は「日」もしくは「目」の可能性が高い。なお円筒埴輪は5世紀末～6世紀前半と考えられる。

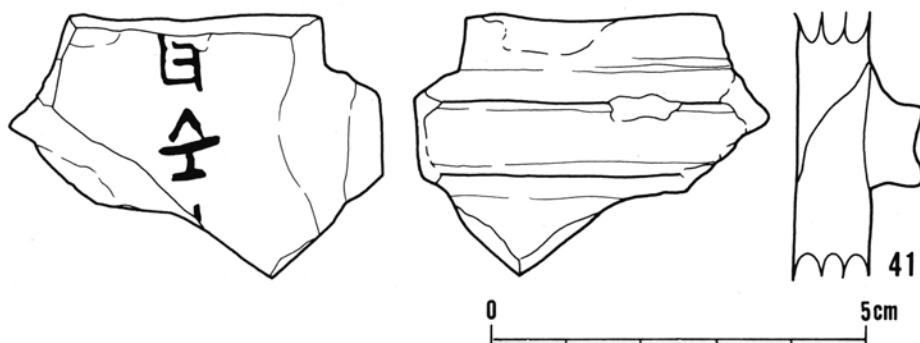


図16 刻書埴輪 (SE12出土)

6. 瓦 (図17)

59A区，59B区，61A区いずれからも多量の瓦片が出土したが，全体の形状を窺える資料はなく，またⅢ期の遺構に伴う資料は極めて少なかった。二次的な堆積ながら，SK100，SX21でややまとまった資料がみられた程度である。なお，瓦の記述は『勝川』の分類に準拠する。

軒瓦 軒丸瓦は，KC I (3点)，KC II (4点)，軒平瓦は，KD I (1点)，KD II (2点)，KD III (3点) が出土している。いずれもⅢ期の遺構に伴ったものではない。

KC I (図17-42) 素文縁複弁8葉軒丸瓦，蓮子を1+4+10に配する。中房および花卉にかけて範傷が認められ，aに細分されるものである。瓦当裏面の調整は，板ナデ，指ナデ，指頭による押圧を施す。瓦当裏面および花卉に自然釉が認められる。焼成は良好で堅緻，淡黄灰色。

KC II (図17-43，44) 珠文縁8葉軒丸瓦，蓮子を1+4+8に配し，1+4の蓮子は線によってつながる。藤原宮 6233Ac と同範。44は瓦当裏面に布目が認められている。焼成軟質，淡黄白色。

KD I (図17-45) 三重弧文軒平瓦。直線顎。凸面に粘土を貼り付け，瓦当を肥厚させ

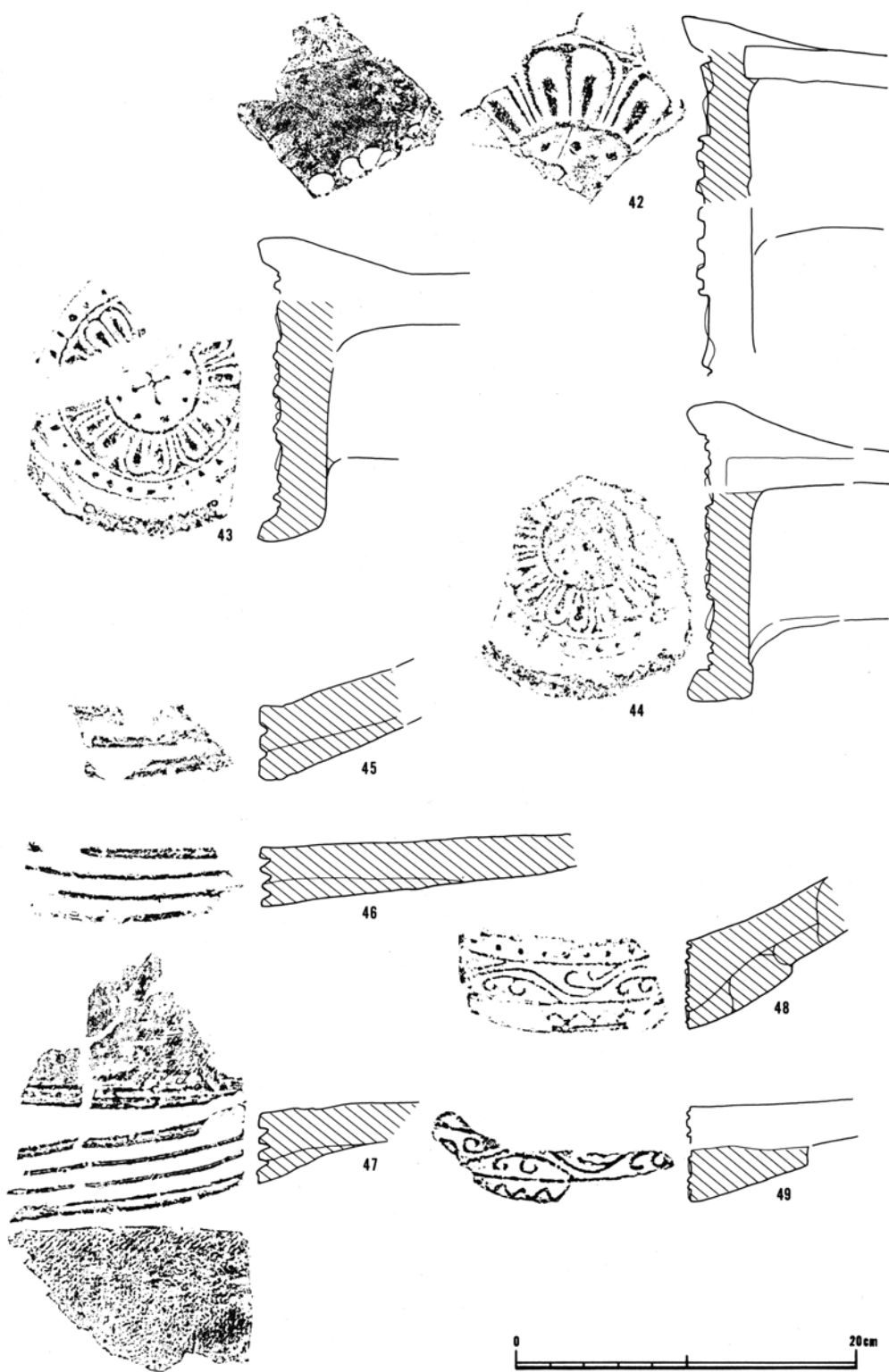


图17 瓦 類

るa類である。粘土板桶巻き作り。胎土砂粒多く堅緻、淡黄褐色。

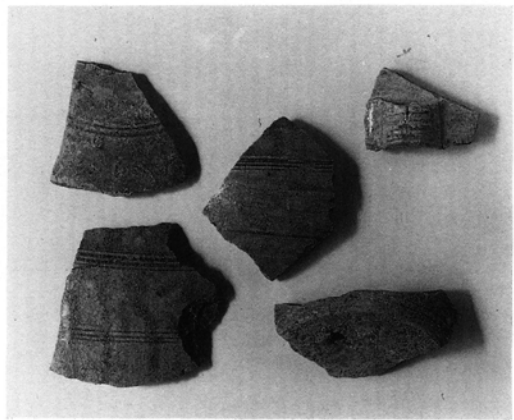
K D II (図17-46, 47) 四重弧文軒平瓦, 直線頸。46は瓦当幅35mmで, 胎土砂粒多く軟質。淡褐色。47は瓦当幅40mmで, 石英粒多く焼成堅緻。青灰色。

K D III (図17-48, 49) 偏行唐草文軒平瓦段頸。上外区に珠文, 下外区に鋸歯文を配する。胎土緻密, 焼成軟質。淡黄白色。

丸瓦, 平瓦 丸瓦では粘土紐成形の玉縁付丸瓦(K A I), 粘土板成形の行基葺丸瓦(K A II)が主体となし, 平瓦では粘土紐桶巻き作りの平瓦(K B I), 粘土板桶巻き作りの平瓦(K B II)が主体をなす。III期の遺構に伴う瓦は, K A I, II, K B I, II以外出土していない。なお, S K 100で凸面格子タタキの平瓦(K B IV)が1点出土している。

7. 古瀬戸

遺構に伴うものは1点もなく, 整地層内から, 97点出土した。いずれも灰釉三筋壺と考えられる。実測図を示しうるほどに大きな破片はなく細片化している。従来勝川ではIII期とIV期との間に大きな時間のギャップがあり, 古瀬戸はこのギャップを埋めるものと考えられる。春日井市教育委員会の発掘調査(春日井市教委, 1982)においても出土しているので, それらが蔵骨器として利用され, 中世墳墓が存在した可能性がある。



古 瀬 戸

8 陶磁器

整地層や各遺構から整理箱約250杯分の陶磁器が出土した。これらは上街道と下街道の分岐点という交通の要地に立地した勝川宿が、19世紀代に下街道沿いに東方へ拡大した過程を示すものである。大部分が瀬戸・美濃系陶磁器で、わずかに常滑系陶器を含む。本節では、これらを遺構・層位ごとに分け、説明を加える。なお碗の分類については、次章で述べる遺物の考察に従うものとする。

井戸SE12(59B区)出土遺物(図18, 図版18)

碗・皿・猪口・徳利・播鉢・急須・仏餉具が出土した。碗には大・中・小がある。大(599・60)は口径11cmをこえる。59は口縁部がやや外反し、腰部で大きく屈曲する。口径に比べ器高がやや低く扁平で、鉛直方向に紺色と褐色の条線を交互に引く。60は厚手で腰部から内側へ強く折れ曲る。口縁部から体部にかけて内・外面とも灰釉を施す。中(53~58)は口径10~11cmで、考察で分類した碗である。

58~57はI_a類。いわゆる広東茶碗で、高台は外側が高くほぼ直立し、内弯気味に立ち上る。文様は、振り文(53)、花文(54・55・57)、渦文(56)を呉須で描く。内面底部には五弁の花文を描くもの(56)もある。58はII_a類で口縁部がやや外反する。高台はI_a類と異なり小さく低い。外面には鉛直方向の条線と波状文を組み合わせ、口縁部内面にも文様を描く。小(50~52)は口径8cmより小さく、ぐい飲み・湯飲みの類である。磁器(50・52)と磁器と陶器の中間のもの(51)がある。50は鉛直方向の条線と斜線、高台外面の横線と雷文、口縁部内面の2条の横線で飾る。51は体部外面四方に円文を描き、対向する円内の文様は同一である。52は外面に花文を描く。皿には灯明皿(62)、鉄釉皿(63)、馬の目皿(71)がある。馬の目皿は鉄絵を描いた後、高台周辺部を除き透明釉を施す。61は猪口で、外面に上絵付として赤で文字を記し、口縁端部も赤く塗る。徳利(66~68)は66が小さく鉄釉、67・68は大きく灰釉を施す。口縁部の形状はやや外反し厚く縁帯がつく67とまっすぐ垂直に延びる68とがある。66・68いずれも体部にくびれがあり、底部はへら削り。69・70は蓋と急須のセットである。胎土の色調は青灰色。蓋上面・急須外面に淡灰緑色の釉を施す。急須の円筒形の体部外面には、下絵付として呉須で斜格子状の摺絵が施されている。なお注口部は摺絵を施した後に接合されている。播鉢はやや外反気味に開くもの(72)と直線的に開くもの(73)がある。いずれも内側の櫛目と口縁との間に段がつく。

水回り施設SX22(59B区)出土遺物(図19~25, 図版18・19)

碗・皿・徳利・灯明具・仏餉具・蓋・鉢・水甕・鍋・手あぶり・播鉢等が出土した。碗には大・中・小がある。117・118が大型の灰釉碗。中(94~105)にはI_a類(94~97)、II_a類(102・103)、III_a類(98~101)、V_a類(104・105)がある。94~97は、呉須で体部に笹

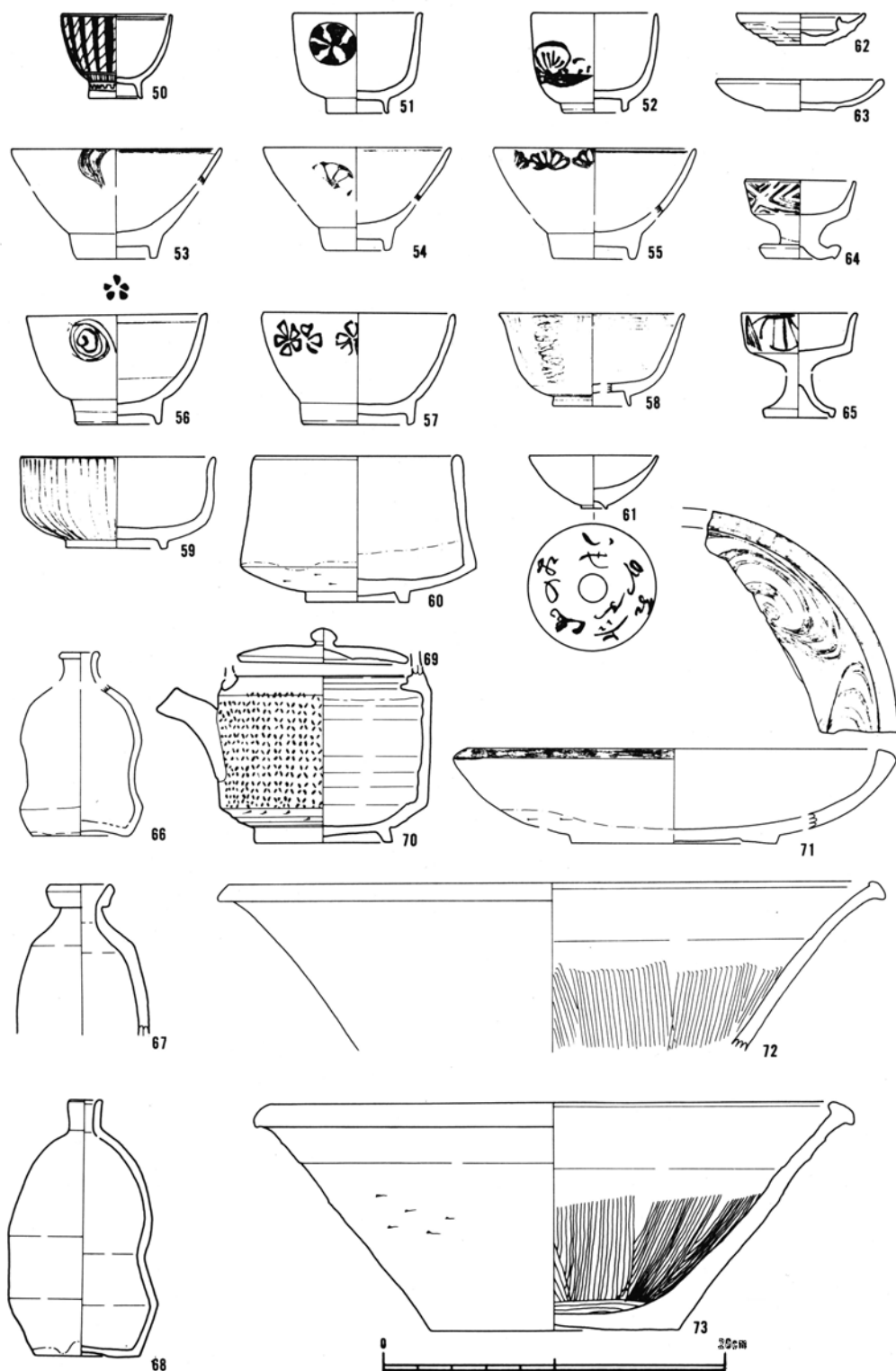


图18 井戸SE12 (59B区) 出土遺物

文・花文、見込みに五弁花を描く。体部内面・高台外面に横線を引く。102・103は腰部で内側へ屈曲し、口縁部は小さく外反する。外面には草花文を描く。98～100は丸い体部で、外面に竜・花・条線を描き、内面底部には宝珠文のほか「寿」、「文化年制」、「成化年制」と記されている。104・105は薄手で、高台は断面方形。体部外面に草花文、内面底部に「明治年製」と小さく手描されている。小(88～93, 116)は器高の低いものと高いものがある。88は白磁小碗、89～93の文様は手描き。90は紺色が鮮かで輸入した呉須⁽²⁾を使用しており、19世紀中頃～明治初期のものであろう。77は紅皿、78は灰釉皿、79は鉄釉皿である。80は削り込み高台で灰釉、81は鉄釉を施す。82は見込みに鉄釉で渦文を、83は呉須で文様を描く。84は型押し皿で、長石釉で花文を配した後、透明釉をかける。85・86はやや大ぶりで、内面に呉須絵を描いた後、透明釉をかける。111と112はいわゆる石皿で、見込みに鉄絵を描いた後に透明釉を施す。113は片口鉢で、織部風に文様を描く。114は内外面に鉄絵を描く。119は丸味の強い体部と外方へ折れ曲った口縁をもつ灰釉鉢である。74は台の無い^{ひょうそく}乗燭で灰釉を施す。75は台のある乗燭で、坏部内・外面に鉄釉を施す。台部底中央には焼き割れ防止用の未貫通孔がある。76は仏餉具で、脚端部がやや上る。坏部外面に呉須絵を描く。87は灰釉徳利。蓋は4種ある。円形のつまみがほぼ水平の笠部につきほぼ垂直のかえり部のもの(106)、笠部外縁を上方へ持ち上げさらに水平に折るもの(107, 108)、環状のつまみを有し、笠部端部が下方へ屈曲するもの(109)、大型で環状のつまみを持ち、かえり部のないもの(110, 125)がある。116は鉄釉を施し、笠部裏に刻印がある。107は灰釉、108は蕾座様のつまみで上面に鉄釉が施されている。109は内・外面に呉須絵が描かれ、有田焼の可能性⁽³⁾がある。110は灰釉を施す。125は上面に鉄釉と緑色釉で織部風の文様を描き透明釉を施す。125のセットとして126がある。二つの把手がつき、体部外面に鉄絵を描き透明釉を施す。127は行平鍋で筒状の握手がつき、樋状の注口がつく。底部近くに小さい形ばかりの三足が貼付される。120は合子で外面に灰釉、121は瓶で鈍釉が施されている。122は直径5cm、厚さ1.1cmの戸車。直径12cmの円孔を穿つ。磁器質で灰釉が施される。123も戸車。ただし、瓦質であること、円周部分が斜めに磨滅していることから用途は異なるかもしれない。124は型押しの水滴、上面と側面を同時に型作りし、後で底を接合。底裏に布目痕がある。図の下側にあたる側面を除き灰釉を施す。128～131はいわゆるアカモノで、常滑系の無釉、厚手の陶器である。128・129が蚕火入れ、130・131が大いぶし。128の下面と129の内面、130の下面と131の内面に厚くタール状の煤が付着。128は長円形で上面はナデ調整、中心に1孔を穿つ。129は頂部を長円形に抜き、肩部に8つ孔がある。ナデ調整。130は内外面共に指頭圧痕が著しく残り、太い粘土紐の両端を圧着させただけのつまみがつく。

115は水甕。体部上方が外反気味に立ち上がり、口縁端部は下がり気味に張り出す。体部

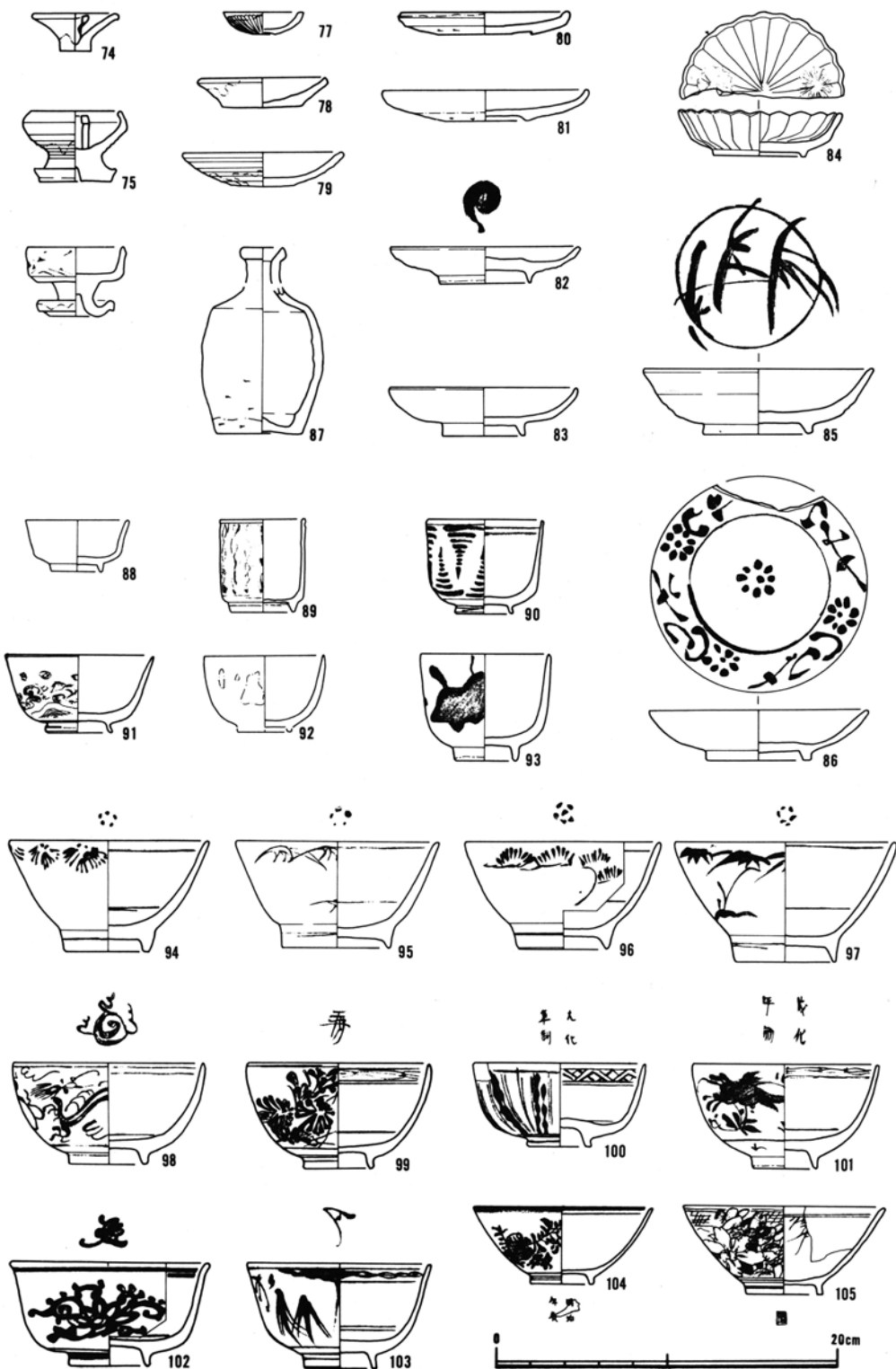


図19 水回り施設 S X 22 (59B区) 出土遺物(1)

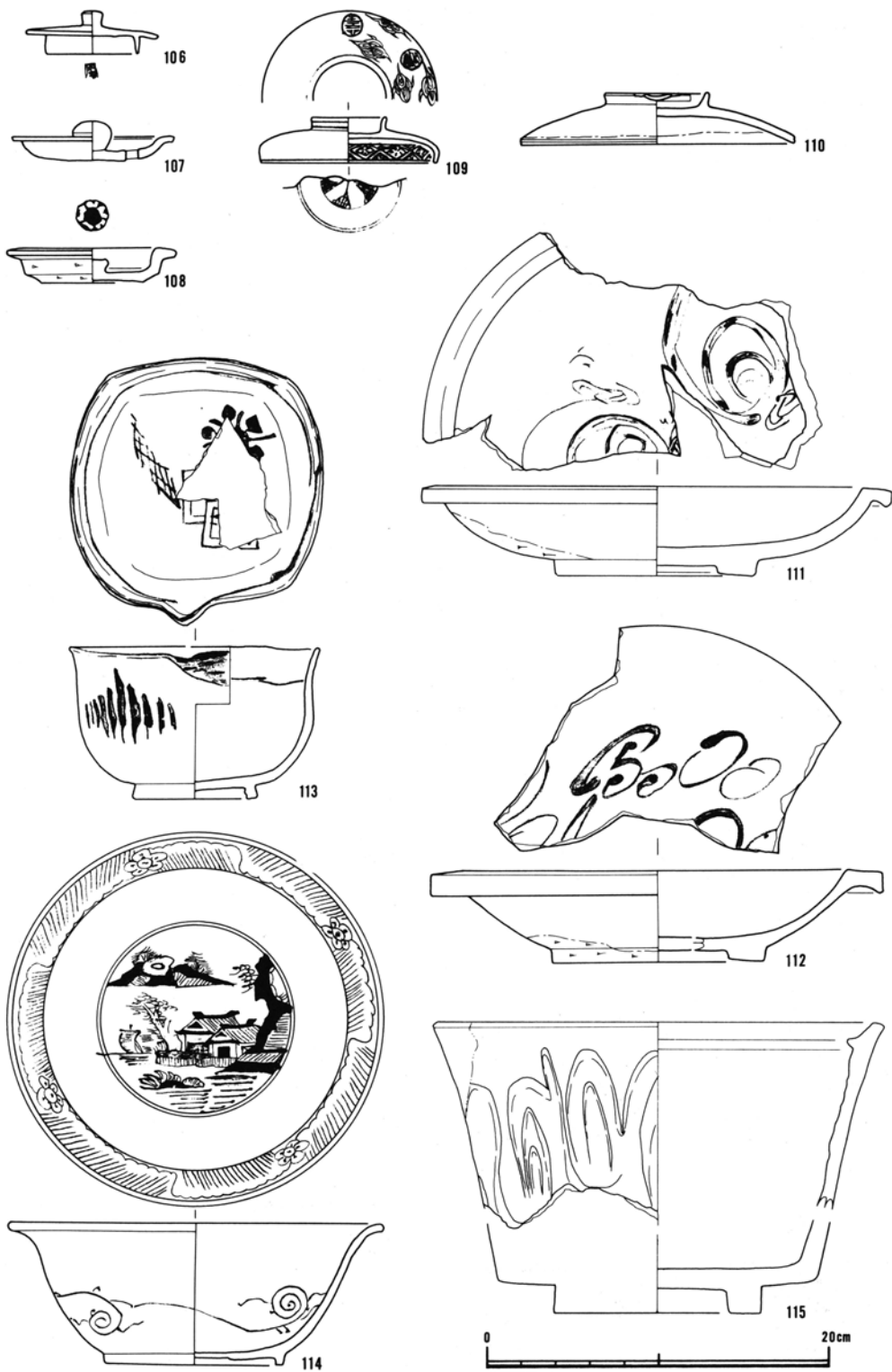


図20 水回り施設 S X 22 (59B区) 出土遺物(2)

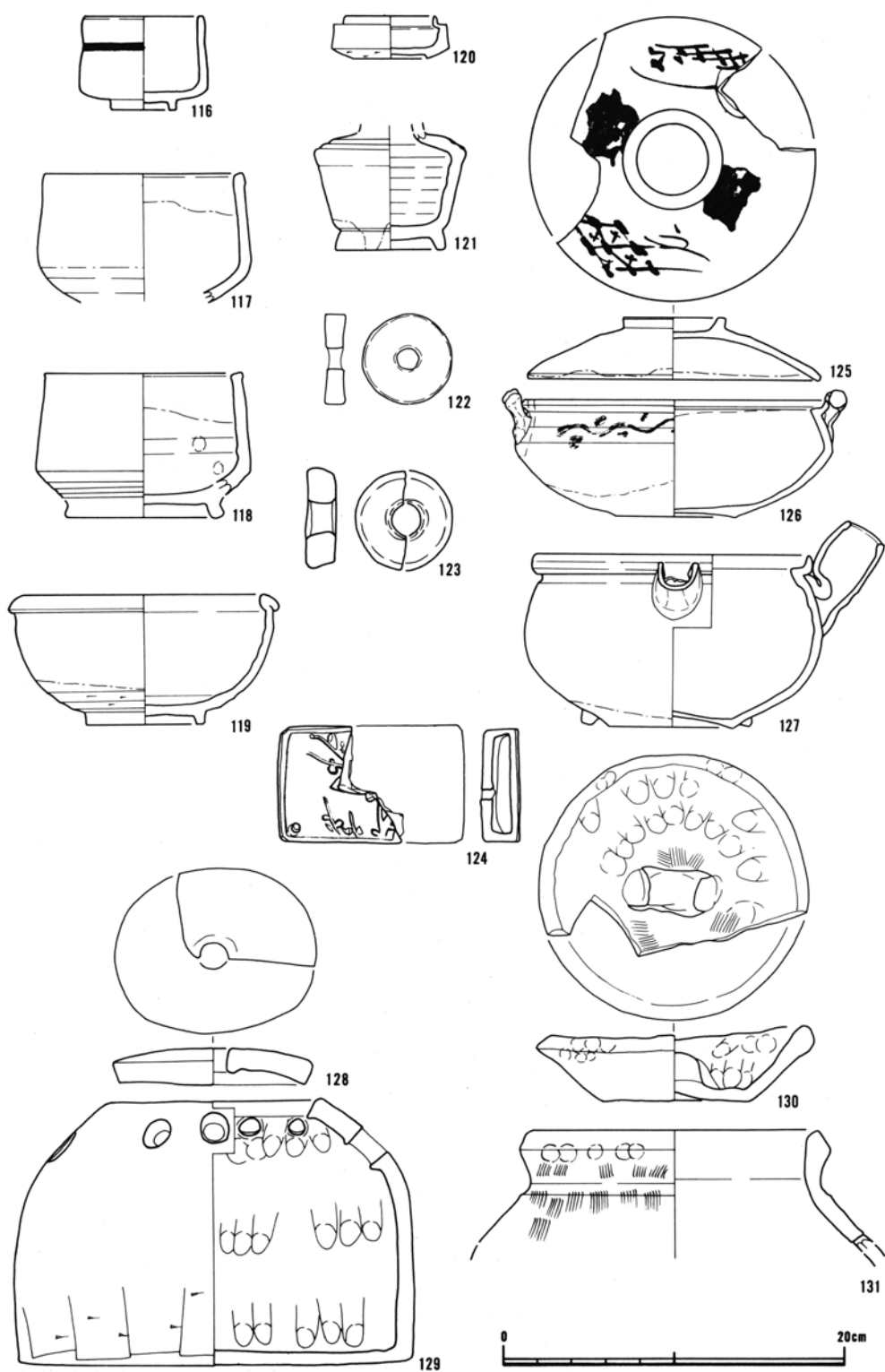


図21 水回り施設 S X 22 (59B区) 出土遺物(3)

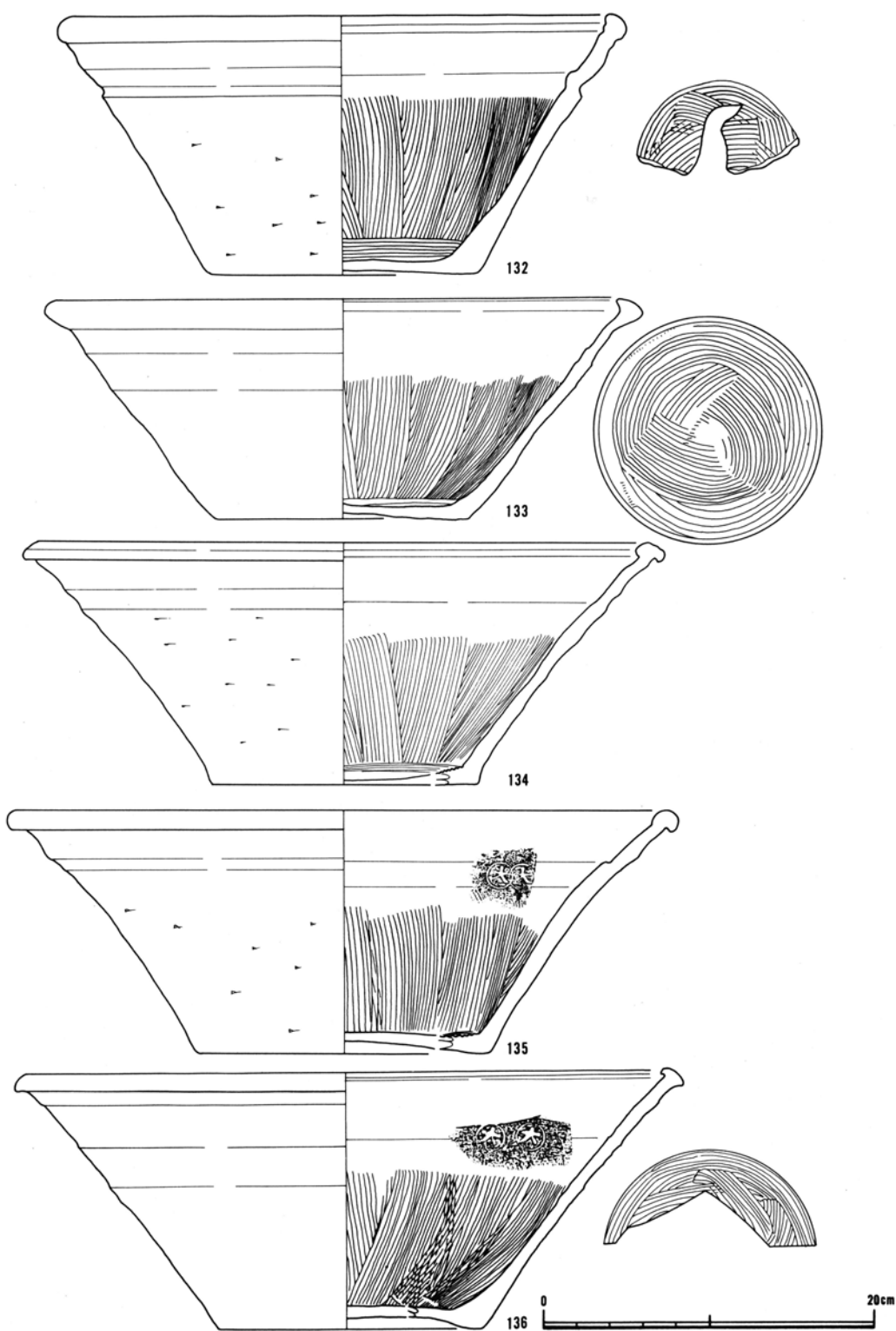


図22 水回り施設S X 22 (59B区) 出土遺物(4)

外面に流水文が彫られ、鉄釉と緑釉が流し掛けされている。播鉢は口縁部の形状が多様である。縁帯が外側にめぐるもの（133, 134）、内側へ突出するもの（133, 135）、端部を丸めるもの（132）がある。内面櫛目上方に著しい突帯のあるもの（132）や、稜のあるもの（134, 135）がある。134, 135は内面に⊕のスタンプが2個ずつ施され、大高焼との指摘もある(4)。

土坑S K 57（59A区）出土遺物（図23，図版20）

碗・皿・鉢・蓋・蚕火入れ等が出土した。碗はIII_a類（138～140）、II_a類（141～144）、IV_a類（137, 145）がある。ほぼ共通な物徴として、外面に手描きで草花文、笹文、条線文を

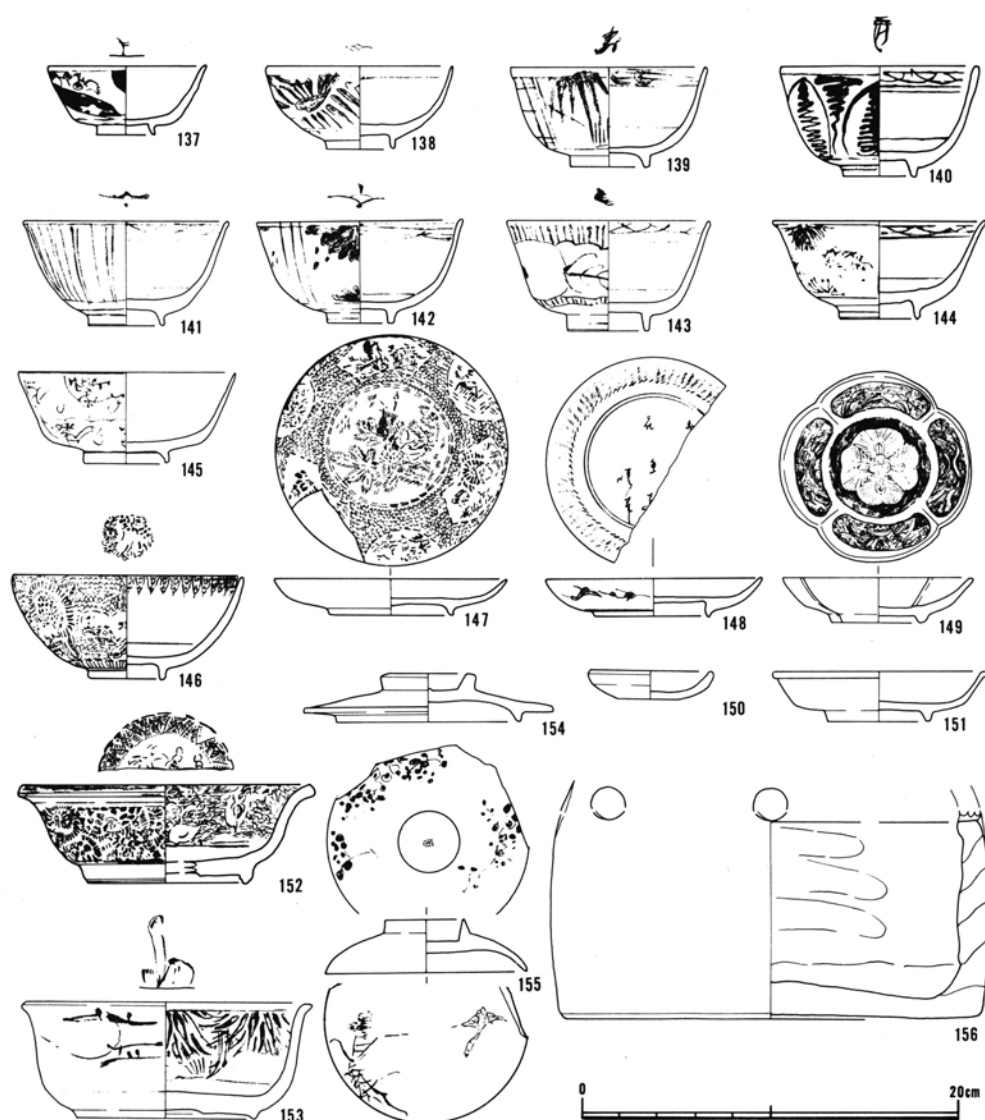


図23 土坑S K 57（59A区）出土遺物

描き、口縁部内面に横線と連続した円弧文を配す。見込みには「寿」字等を描く。III_b類の碗は内・外面に摺絵を施す。外面の草花文の間隙を埋める半円弧文は皿にも共通する。皿には手描き(148)と摺絵(147)と型押し(149)がある。158は見込みに歌を記し、体部内面に櫛状施文具で刻目を入れ呉須を塗る。体部外面には鶴を呉須で描く。147は摺絵皿。149は輪花皿で、内面に呉須を使内。

150は鉄釉皿。151はクロムの緑による青磁皿。152は体部内外面に摺絵を施した鉢、153は手描きで草花文を描いた鉢。いずれも口縁部外反、厚手の陶器。蓋は環状で断面方形のつまみをもちかえりのあるもの(154)と環状で断面三角形のつまみをもち、かえりのないもの(155)がある。154は陶器、155はクローム青磁で内外面に緑・茶・白色釉を用いて草花文・花鳥文を描く。156はアカモノで蚕火入れ、あるいは手あぶり。

土坑S K 100(59B区)下層出土遺物(図24~26, 図版20・21)

碗・皿・鉢・播鉢・蓋・急須・水滴・德利・秉燭・仏飴具等が出土した。

碗はI_a類(157), II_a類(163~166), III_a類(158~162), III_b類(167~177), III_c類(178~183), III_e(184~188), V_e類(189~193)がある。

157はいわゆる広東茶碗で陶胎。呉須が流れ文様がにじむ。見込みには五弁花を描く。II_a類・III_a類の碗は、外面に条線と笹文、内面に横線・連弧文、見込みに「寿」字が描かれる。162は例外的に「福」字が摺絵技法で記される。III_b, IV_b類に外面に花・蝶・扇等を描き、内面には大きく桜花を描くものと見込みに花文を描くものがある。口縁部両面には花房状の文様を施す。177の外面をC字形文様で埋め、内面は花文を描く。C類の碗は文様を全面に施すことが少なく2~4単位で外面の文様を構成する。文様としては、草花文のほかに馬・龍・鶴・魚文等がある。銅版転写だけでなく、筆で塗るものもある。また文様が内・外面にわたって連続するもの(179, 193)もある。摺絵と異なり見込みには文様なく、底裏に落款(「纂寶園」—184,「陶生軒」—185,「盛来園」—187)が散見される。これらの他に体部下半に6面のカットをするもの(200)がある。小碗には器高が高く筒形の湯飲み、猪口のほか赤絵を施したもの(201)がある。196~198は銅版転写。断面八角形の白磁の湯飲み。皿は内面に摺絵を施したもの(208, 209)と下絵銅版転写(210~212)を施したもののがある。210は口縁端部のみ鉄釉、他の文様は緑色釉、212は全体がクロームの淡緑色で、文様は濃緑色で美人画を題材とする。213と214は白磁皿。鉢には薄手で高台から体部にかけて大きく屈曲するもの(215), 厚手で口縁部が外反する陶器(216~218), 口縁部が大きく外へ屈曲するもの(221), 波状口縁のもの(219, 220), 型押しのもの(222)がある。215は外面の文様は銅版転写にダミを併用、見込みは吹き絵、底裏には「東〇軒〇」と記される。216は見込みに亀、底裏に「庄」と手描きされ、見込みに透明釉を施す。219は内・

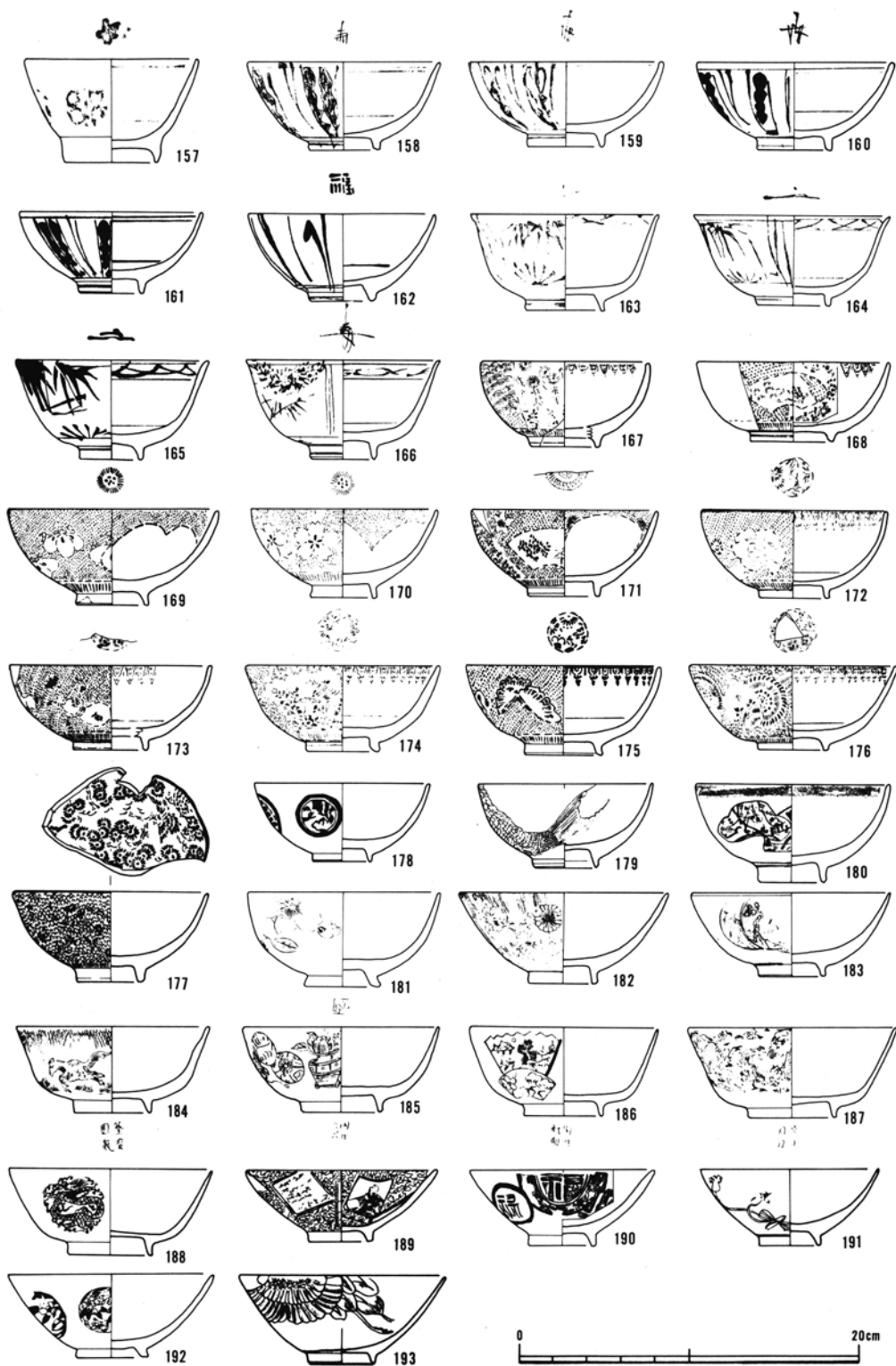


图24 土坑S K100 (59B区) 下層出土遺物(1)

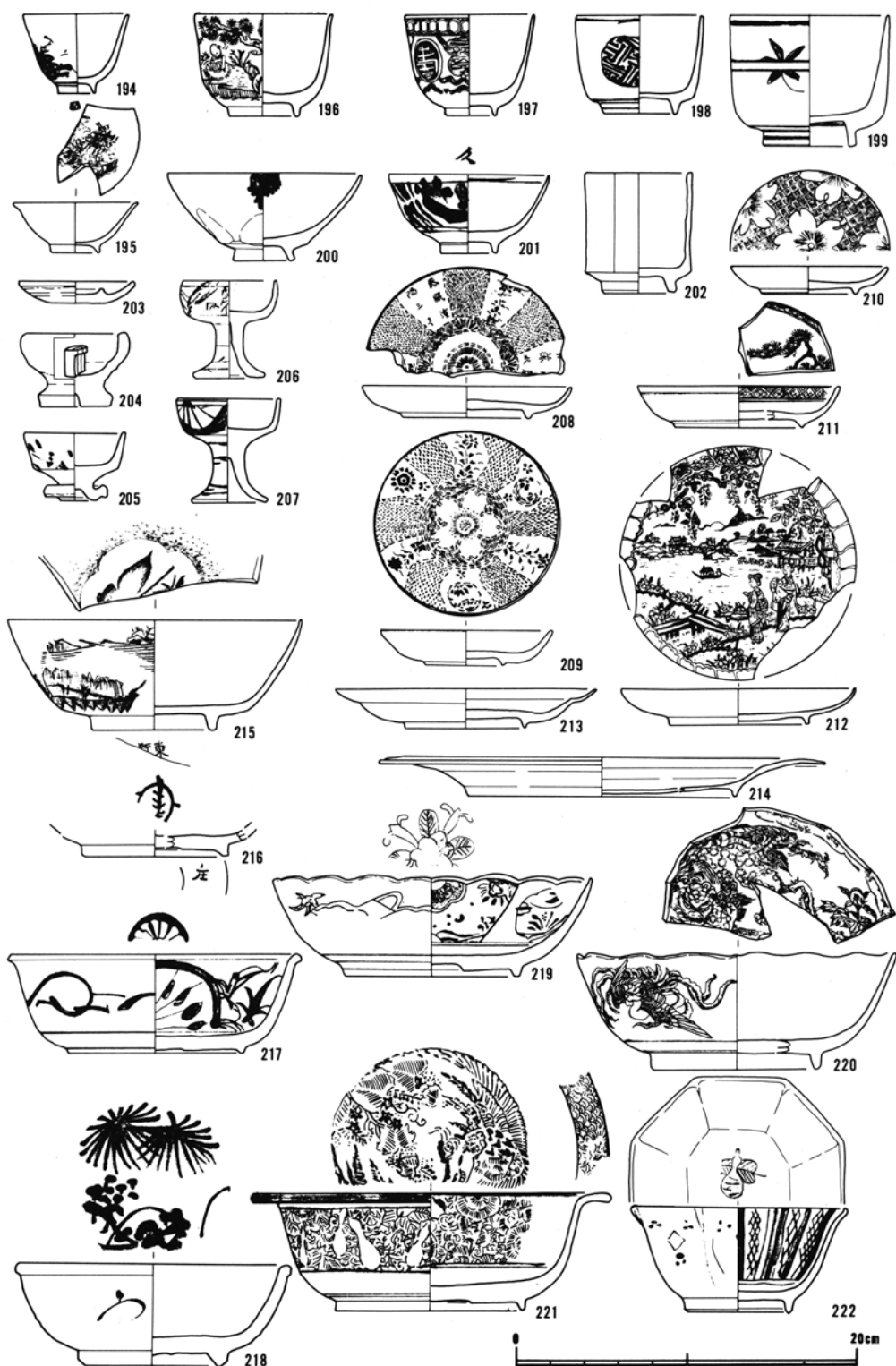


图25 土坑S K100 (59B区) 下層出土遺物(2)

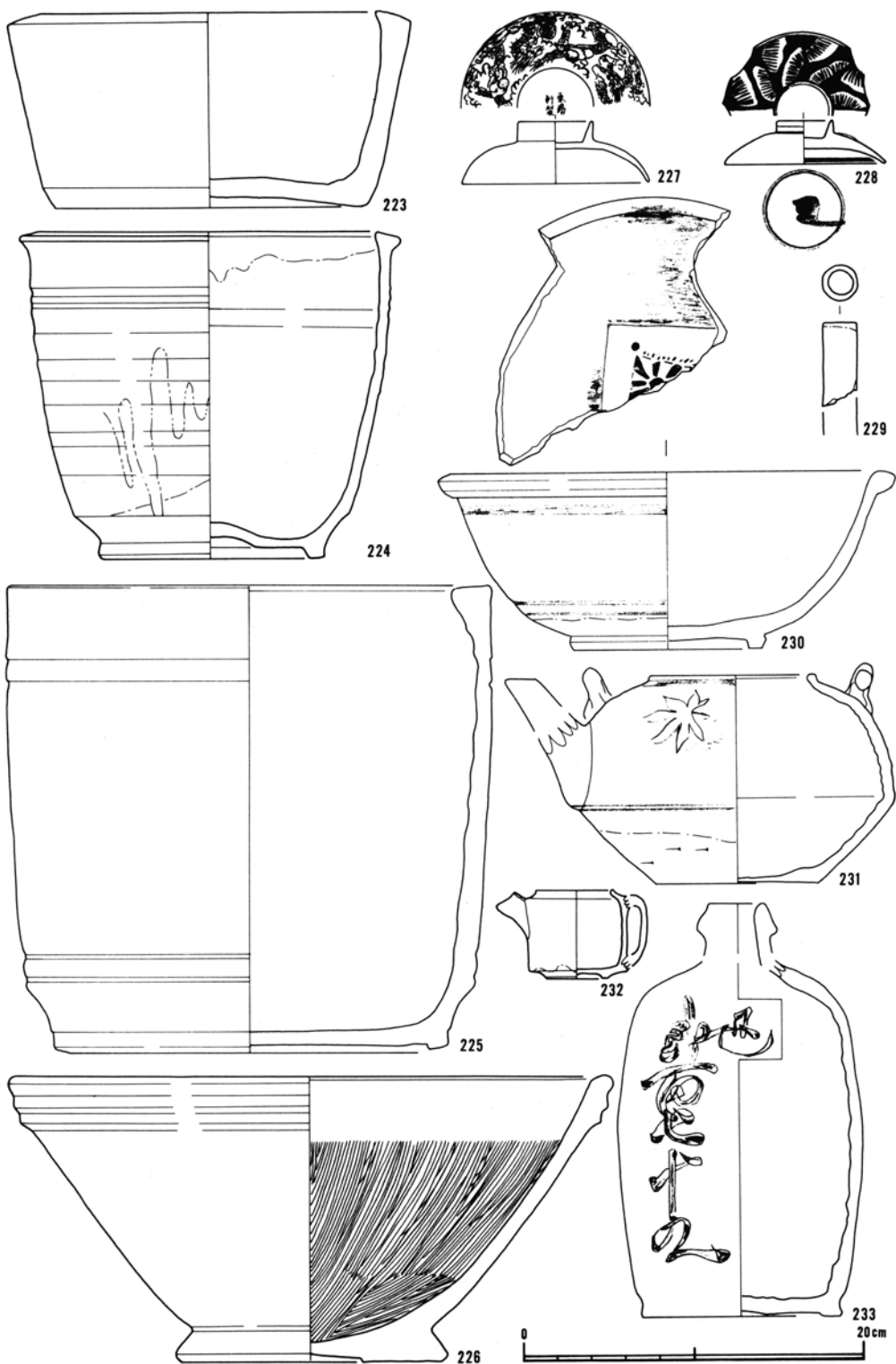


图26 土坑 S K100 (59B区) 下層出土遺物(3)

外面に手描き、ただし赤色加わる。220は外面に鳥、見込みに獅子を呉須の銅版転写で描く。221は内・外面共に摺絵で草花・鳥を描く。222は内・外面に手描きで文様を描く。体部外面の稜の部分に条線、間に菱形と三ツ星を配し、内面は屈曲部に条線、間に斜格子、見込みに瓢箪と芭蕉扇を描く。223はアカモノの鉢。224・225は鉄釉がかかる甕。230は外側に横線を施し、見込みに摺絵技法で海軍旗を描き、旗の周囲を吹き絵抜法で飾る。226は播鉢で高台がつき、内面の櫛目は隙間なく引かれる。227は笠部上面に竜文が銅版で描かれ、つまみ中央には「東陽軒製」と落款が記される蓋。228は型押しで蓋、笠部上面に呉須絵がある。229は円筒形の低圧電流用碍子⁽⁵⁾。磁器で、端部と内面に施釉。231は急須。体部上面に葉が2ヶ所吹き絵で表現される。232は鉄釉が施され、注口部上面に切り欠きがあることから灯明具としての用途が考えられる。233は灰釉の徳利で「□□店 丑 式百七十九」と墨書されている。他に8個体出土し、いずれも地名、店名、年、番号の順で記されている。

土坑 S K 100 (59B区) 上層出土遺物 (図27・29, 図版22)

碗・皿・合子・徳利等が出土した。碗はIII_a類(251)、II_b類(234)、III_b類(235、III_c類(238、249)、IV_c類(240~244)、V_c類(246~253)、V_d類(254)がある。237は軍旗を交差させ上下に「萬歳」と摺る。日露戦争の戦勝記念のものか。245は外面に銅版、内面に摺絵を施す珍しいもの。技法Cには文様の単純化、多色化傾向が強く認められる。253は単純化した鶴に紺色でダミを施し、254は類似した文様の背景に吹き絵で富士を描く。なお銅版のものは底裏に製造所名を記す例が多く「□栄□造」(240)、「陶明堂製」(243)、「陶昇園製」(244)、「貴玉(園製)」(248、253)、「陶茂軒製」(250)等の銘が認められる。なお254のみ「旭」と墨書される。皿は摺絵(2⁵25、256)、下絵銅版(258)、上絵銅版(251、257)、上絵手描き(260、261)、型押し(262)等の装飾技法が認められる。257は金魚を多色を用いて表現している。259は輸出向けに頻繁に用いられた美人画を描く上絵付を施す。260、261は緑色地に茶・白で草花文を描く。なお264は全面に厚く淡青色の釉がかかる。266と267は鉄釉がかかり、灯明皿と受皿である。268は灰釉の蓋。269はつまみがなく合子の蓋、270は環状のつまみのある白磁の蓋。271~273は合子で、口縁端部は内側へ小さく曲が突出する。鉢には薄手、銅版転写の274(244と同一文様)厚手で器高が低く内外面に摺絵を施す275、厚手で口縁部やや外反、2ヶ所に手描きの文様を施す276がある。徳利には「勝□」と記す通い徳利(277)と小型・薄手で細い筆で描いた銚子(278)ある。279はアカモノで口縁部は内側へ強く曲がる。外面体部下部に指頭圧痕、内面に指ナデ痕が明瞭に残る。

土坑 S K 99 (59B区) 出土遺物 (図29, 図版23)

皿・碗・蓋・鉢等が出土した。碗はIV_c類(286~288)が出土。286はS K 100上層の243に文様同じ。287は同じく244に同一。ただし製作所が異なり「陶明堂製」。288はS K 100下層

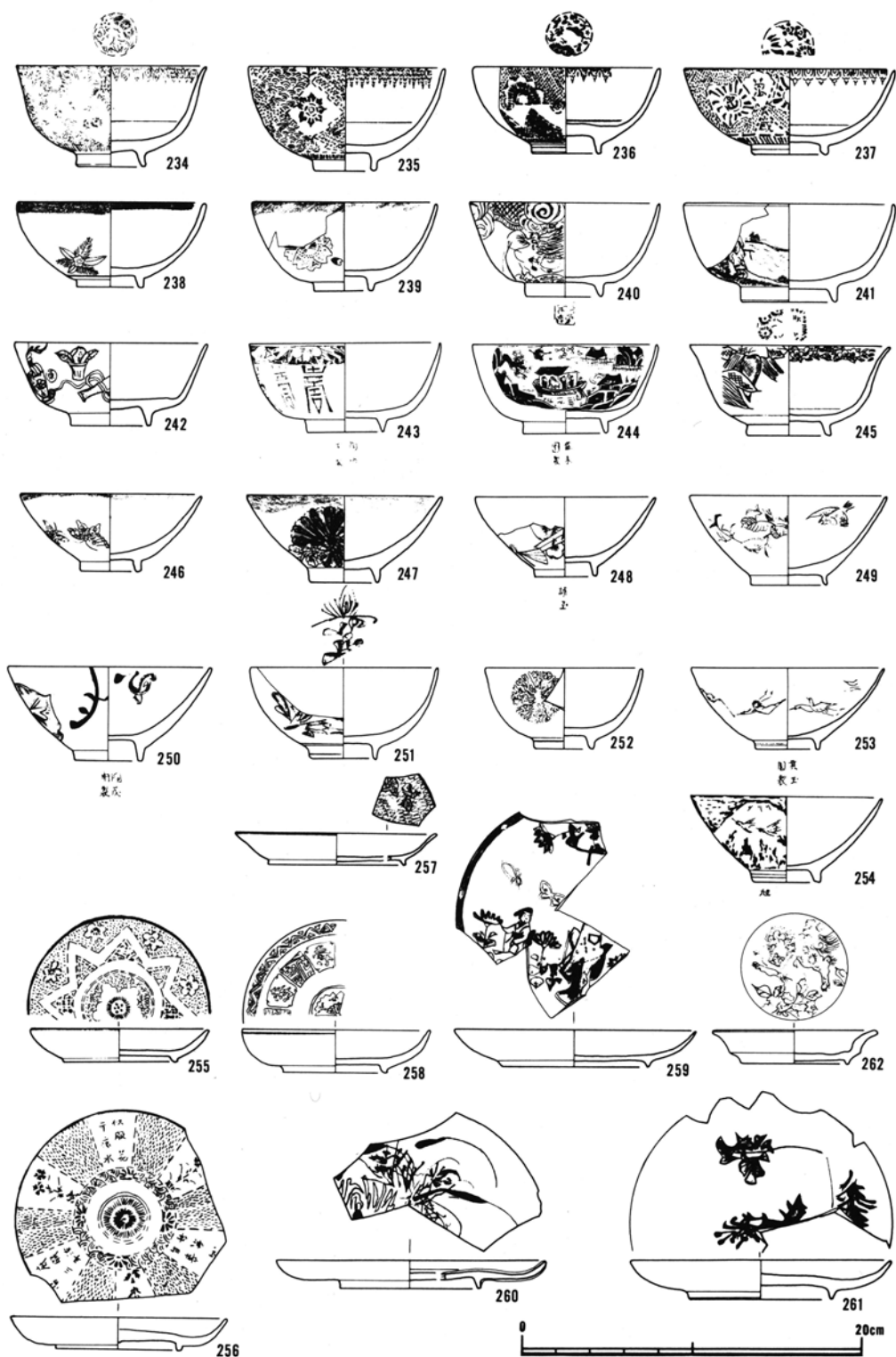


图27 土坑 S K100 (59B区) 上層出土遺物(1)

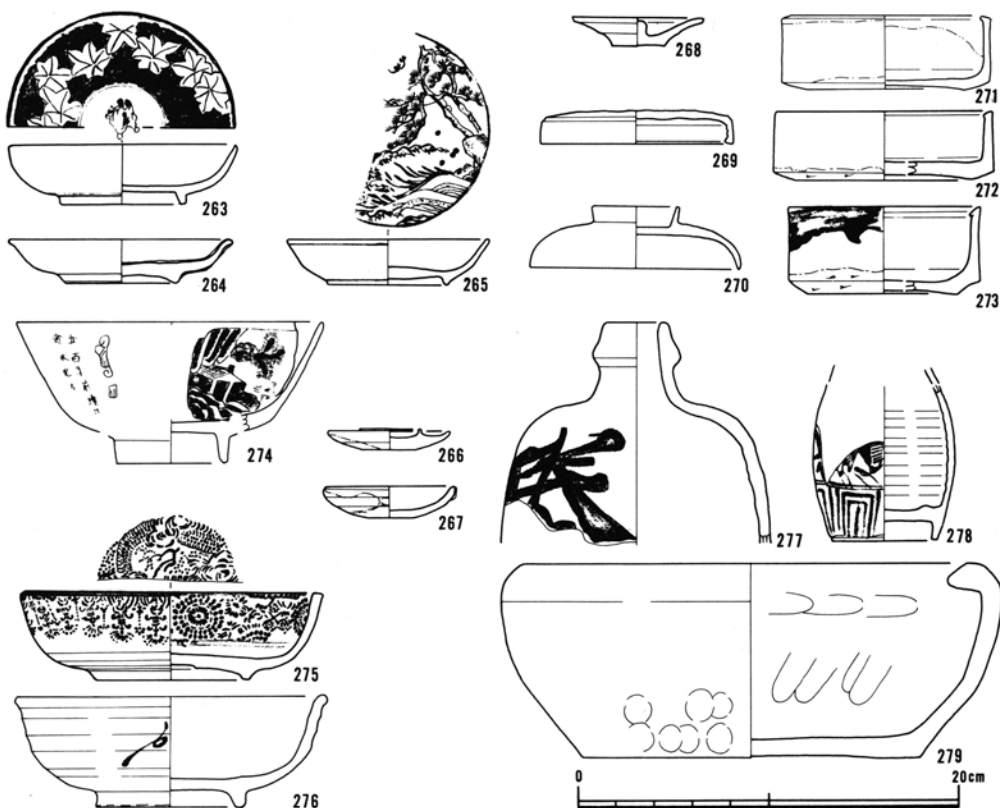


図28 土坑S K100 (59B区) 出土遺物

の188に同一の竜文。282は小碗で手描きの呉須絵を内面に描く。285はS K100下層出土例と同種で、八角形の白磁湯飲み。289は白磁の輪花状の鉢，295は把手付の白磁鉢。280と281はいずれも灰釉が施される。灯明皿と受け皿である。290は型押し of 角皿で見込みに竜文がある。291は鉄釉をかけた蓋。292は蓋で，笠部上面と下面端部に交互に褐色と青色の条線を引く。つまみ内側に印がある。笠部下面には，見込みに「成化年製」と年号を記す。293は下絵銅版で，笠部上面に獅子を描く。つまみ内側に「纂寶園製」と記す。294は白磁の蓋。296は口径3.8cm，器高3.8cmの白磁の小杯でミルクカップか。297は急須で体部外面に手描きの文様がある。298は陶器で，人面文のある帯状把手を有し，やや外方へ開く台には四方に半円形透しがある。底裏には布目痕がある。300は徳利，301は馬の目皿。299は瀬戸・美濃系の陶器の鉢で，鉄釉を施す。簡略化された三足がつく。302は厚手・大型の瀬戸・美濃系鉢で，黄色・緑色の釉で草花文を描き透明釉を施す。303は体部の傾斜が302より緩やかな鉢で，高台周辺に錆釉を施す以外は灰釉を施し，口縁内外にうのふ釉と上野釉を交互に流し掛ける。304は丸味をおび，口縁部が内傾する鉢。火鉢か。305は丸味をおび口縁部は

内傾した後、外に折り曲げられ体部に密着する。高台周辺を除いて灰釉を施す。306は甕で、口縁端部は大きく外へ屈曲、頭部は短かく、胴部は丸みをおびる。全体に褐色の釉を施し、肩部に部分的に灰釉を流し掛けする。

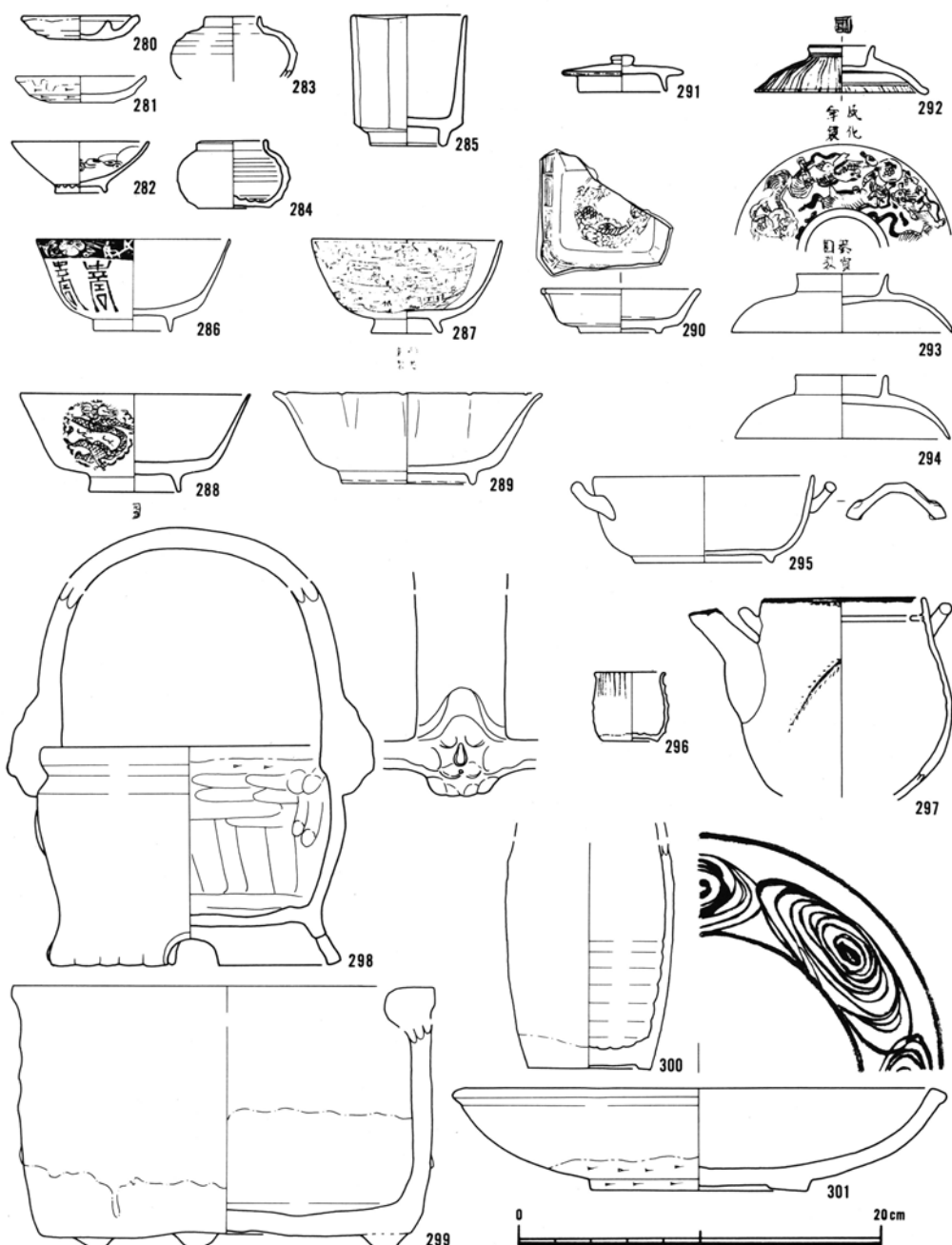


図29 土坑S K99 (59B区) 出土遺物(1)

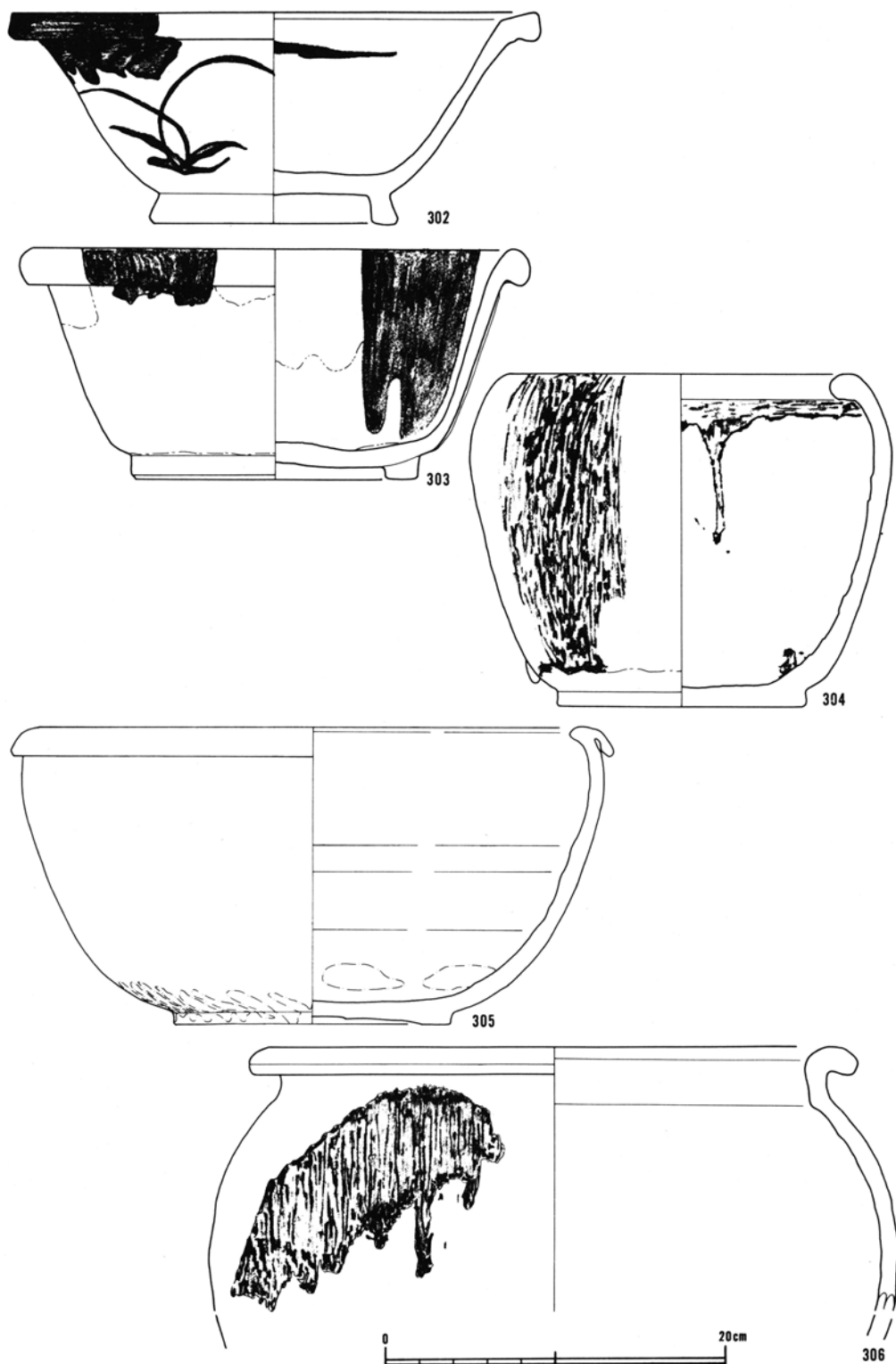


图30 土坑 S K 99 (59B区) 出土遗物(2)

S X21 (59B区) 出土遺物 (図31, 図版24)

碗・皿・蓋・鉢・おろし皿等が出土した。碗はIII_a類, II_c~IV_c類が出土。307・308がIII_a類で, 体部外面は手描きで紺色と淡緑色の条線が交互に引かれる。高台にも横線が引かれる。313はII_c類。口縁はわずかに外反気味。馬が描かれ, 底裏には「伊支店製」と記されている。

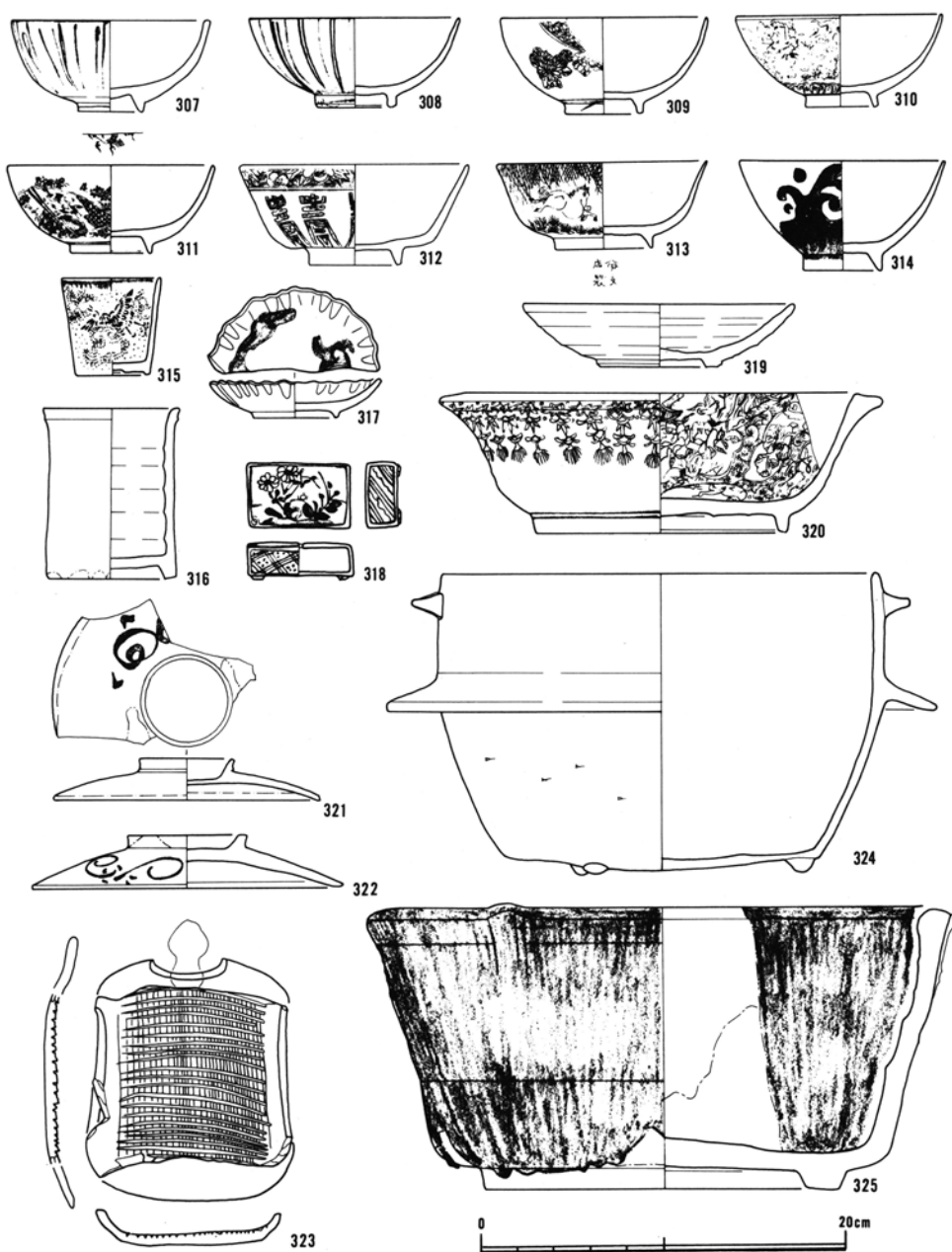


図31 S K21 (59B区) 出土遺物

いる。311・312はIV_c類で、特に312の文様はS K100上層出土243, S K99出土286に同一文様である、314はIII_dで波文を吹き絵で表現。315.猪口で口径6cm, 高5.3cm, 底径4cm, 磁器。体部には鳥文が摺絵で2ヶ所描かれる。316は口径7.3cm, 器高9.5cmで筒形, 内外面に鉄釉を施す。317は皿で陶胎。ひだ皿状の口縁部をもち見込みに呉須絵を描く。319は陶器の大型皿。灰釉がかかる。320には碗の技法bに見られる口縁内部の花房状の文様が外側に認められる。321, 322は陶器の蓋。笠部上面に鉄絵を描いた後, 透明釉をかける。323はおろし皿で, 轆轤成形後, 三方を切り, 短辺の一方に把手をつけ, 見込みにヘラ切りで格子状におろし目をつけている。全面に鉄化粧。324は羽釜。鐔があり, その上方に把手がつく。325は陶器の鉢。

土坑S K 61 (59A区) の出土遺物 (図32~36, 図版25・26)

碗・皿・鉢・蓋・徳利・灯火具・仏餉具等が出土した。

碗はII_a, III_a, V_a, III_b, II_c, III_c, V_c類が出土した。329がII_a類, 326~328がIII_a類, 330~337がV_a類。329は体部外面に笹文と条線, 内面に横線と円弧, 見込みに文様を配す。III_a類はいずれも外面に手描きで草花文を描く。V_a類のうち331のみ文様構成が異なる。体部外面を紺色の条線で6分割し, 梅花文と斜格子文を交互に描き, 口縁部内面は横線と鋸歯文を描く。さらに底裏に「春悠悠」と記す。他のV_a類の碗は単純化された草花・竹・幾何学文様を描き, 見込み・底裏には何も記さない。338~351がIII_b類の碗。いずれも丸味の強い体部をもち, 内・外面に摺絵を施す。外面の文様は草花文の他, 蝶・鳥・巴文等が見られ, 見込みに共通した花文を施す。351のみ見込みの花文が異なり, また口縁部内面の花房状装飾がなく桜花を描く。359がII_c類である。しかしこの形状はIV類の口縁が外反したものとみるべきでIV_c類としたい。体部外面に蘇東坡の「赤壁賦」の一節を記す⁽⁶⁾。352~354がIII_c類。草花・釣人等を写す。355~357がIV_c類。357は体部外面に雲竜文を描き底裏には「東陽軒 SAOAKUNI JAPAN」と記される。360~367がV_d類。やや器高の高いものと低いものがある。いずれも下絵銅版が施され, 紺色の他に緑, 茶色も使用されている。368~370がV_d類。吹き絵技法が用いられ, 部分的にダミが施される。

371は小碗で, 上絵銅版として飛行機に乗った少年を表現する⁽⁷⁾。372は白磁碗に赤色の点を上絵付として施したもの。373~386も小碗。373は高台脇で体部は鋭く屈曲し, 直線的に立ち上がる。内外面体部上半に鉄釉を施す。374~376, 384は丸味をおびた体部をもつ。374・375は口縁部に鉄釉で線を引き, 体部外面は手描きで呉須絵を描く。376・384は銅版。377・378は腰部での屈曲がやや強い。377は手描き呉須絵の文様を描き, 底裏には「本家満喜」のスタンプが認められる。378は銅版。379・380は口縁直下でややくびれ口縁は外反する。379は呉須絵手描き。380は底裏に文字が記されるが判読できず。381は呉須絵で梅文が描か

れ、見込みには「寿」、底裏には「春化」と記す。382・383は丸味をおびた小碗で、内外面に呉須の横線が引かれる。385は高台脇から体部は強く屈曲し直線的にのび、口縁部は輪花状に5ヶ所つまむ。高台畳付以外は全面施釉。口縁部と体部外面下半は濃青色、他は明灰色。386・387は白磁小碗。388は厚手で口縁部外反。一部口縁内外にまたがり鉄釉を施し、ゴム印のスタンプによるものか簡単な呉須の文様が認められる。389～395は環状つまみの蓋、396と397は宝珠つまみの蓋。389、392、394、395が手描きの草花文を笠部上面に施す。なお392のぶどう文様はゴム印のスタンプによるものか。390、391は笠部上面・下面に竜文を配することで共通する。なお390のつまみ内側には「常盤園山松製」とある。393はつまみ内側に、四角の枠内に「貫」と記されている。396は鉄釉で文様を描いた後、透明釉をかける。397は上面に緑色釉をかけた後、長石釉で菊花文を放射状に描く。398・399は灰釉の陶明皿。400は乗燭で全面に鉄釉を施す。401～403は灰釉の皿。403のみ高台あり。404・406は白磁皿、405は緑釉の皿。いずれも洋食器として輸出向にも多量に作られたものか。407～413は銅版転写の皿。407は呉須で山家文、408は黒色と紺色で松竹梅と鶴と月、409は赤絵銅版で美人画に緑・黄・黒・青で彩色。410は黒色で見込みに銅版、体部内面の6つの葵文は印判、茎は手描きである。411は扇文、412は松竹梅に鶴、413は草花文を描く。414はひだ皿で灰釉を施す。高台は厚く「甚予」と墨書されている。415～417は摺絵皿で、高台の形状に特徴がある。また施文方法も体部内面と見込みは異なった型紙を用いる。いずれも体部外面の2ヶ所に花文を摺る。418は花文を転写した皿。419は手描きの文様をあしらった舟形の皿。420～422は大型の碗でいわゆる井である。420・421は外面に花文を描くか422は無文。ただし底裏に「愛知病院」と印刷されている⁽⁸⁾。423～425は白磁碗、426は白磁鉢、427～430も鉢。427は灰釉、428は丸味をおび口縁肥厚、外面に単純な呉須絵を描く。429は厚手で口縁部外反、銅版転写で笹文を描く。底裏に「金堂盛記」と記す。430は口縁部が外へ折れ曲がる鉢で、全面に摺絵を施し、体部内面の見込みから立ち上がる屈曲部に赤色で草花文を描き、立ち上がり部の摺絵の花文を赤色で縁どったり、体部外面の摺絵の上からさらに大きく赤で鋸歯文を描く。431・432は仏餉具。431は赤色も加彩。432は坏部内外面と脚部外面に紺色の釉を施す。433は灰釉小壺。434は無釉・赤焼けの小壺。435～436は徳利。435・436共に多色を用い加色。435は黒色で種蒔く人と鳥、436は草花を描く。底裏に435は「千(子?)楼園」436は「中泉」と記される。437・438は通い徳利で、それぞれ「瀬戸 佐藤商店 □五百〇式」「勝川 水徳 子 六十七」と墨書される。この他に「犬山 中本町 綿繕 辰 七百七十二」と墨書されるものもある。いずれも透明釉をかける。439は双耳壺で外面に花文の転写がある。440、441は白磁の蓋とティーポット。442は瓦質の壺(手あぶり?)。胴部には貼付の雲文が残る。443は四辺に竹文を描いた銅版転写の

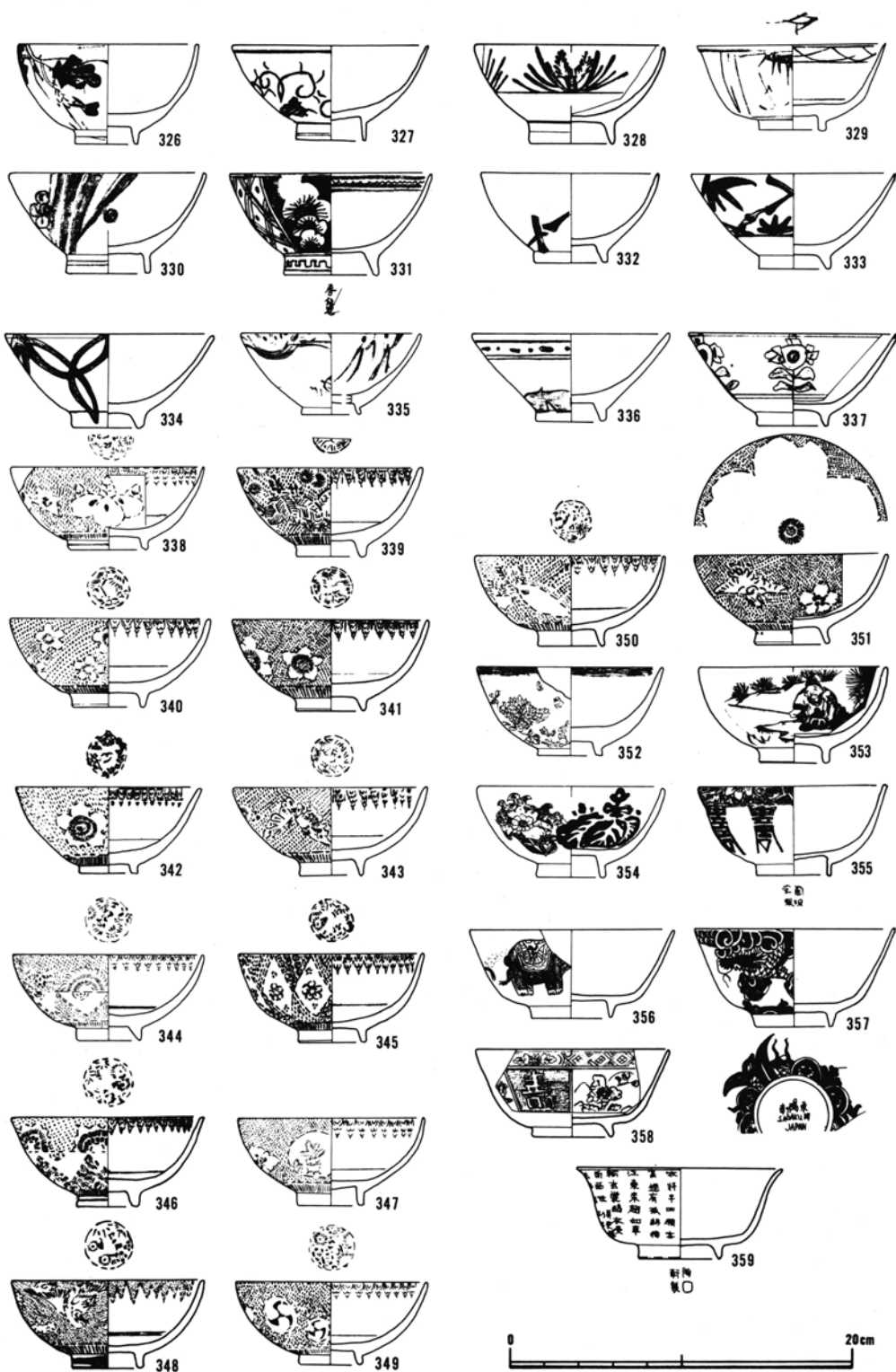


图32 土坑SK61(59A区)出土遗物(1)

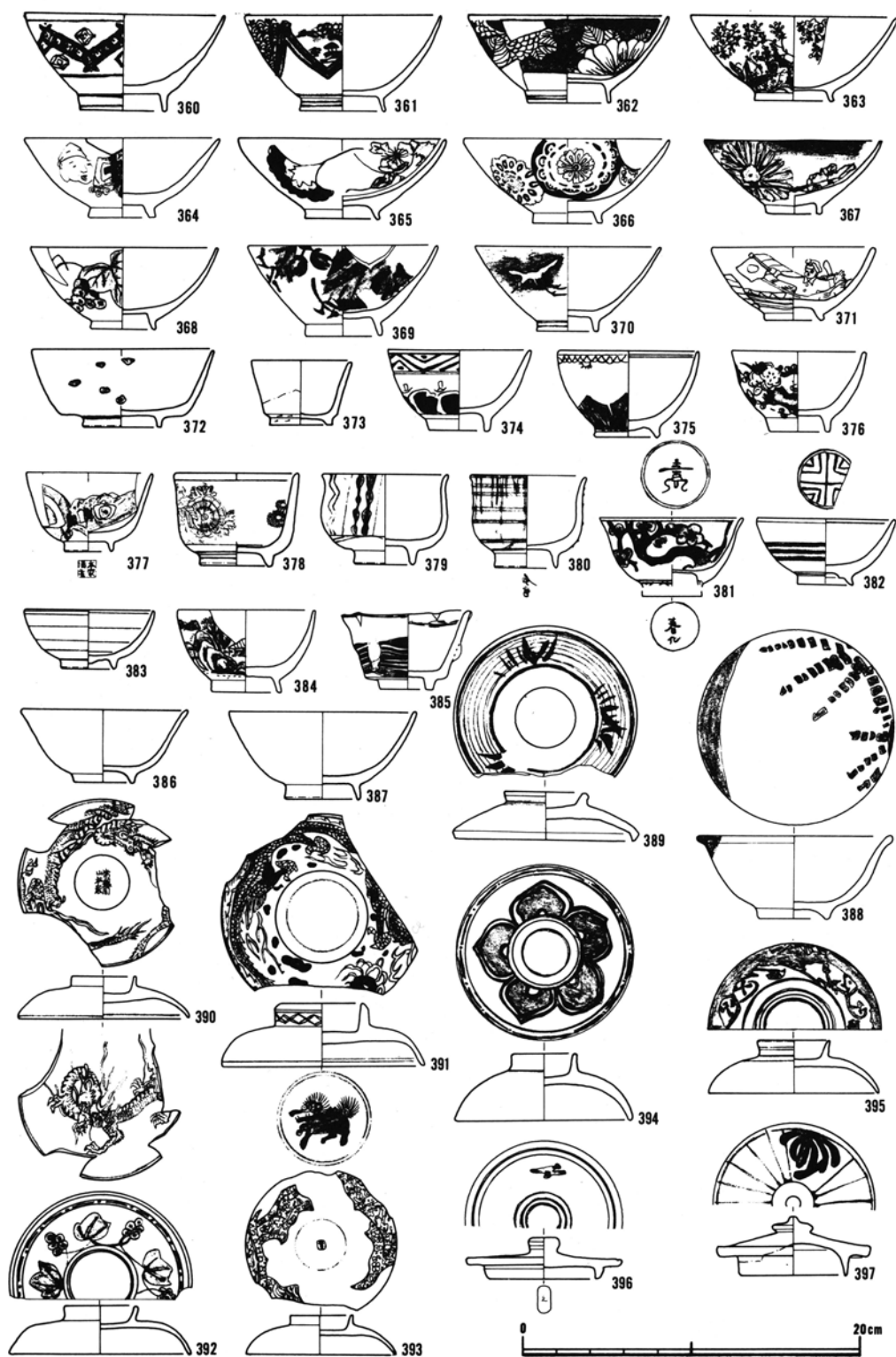


图33 土坑S K61 (59A区) 出土遗物(2)

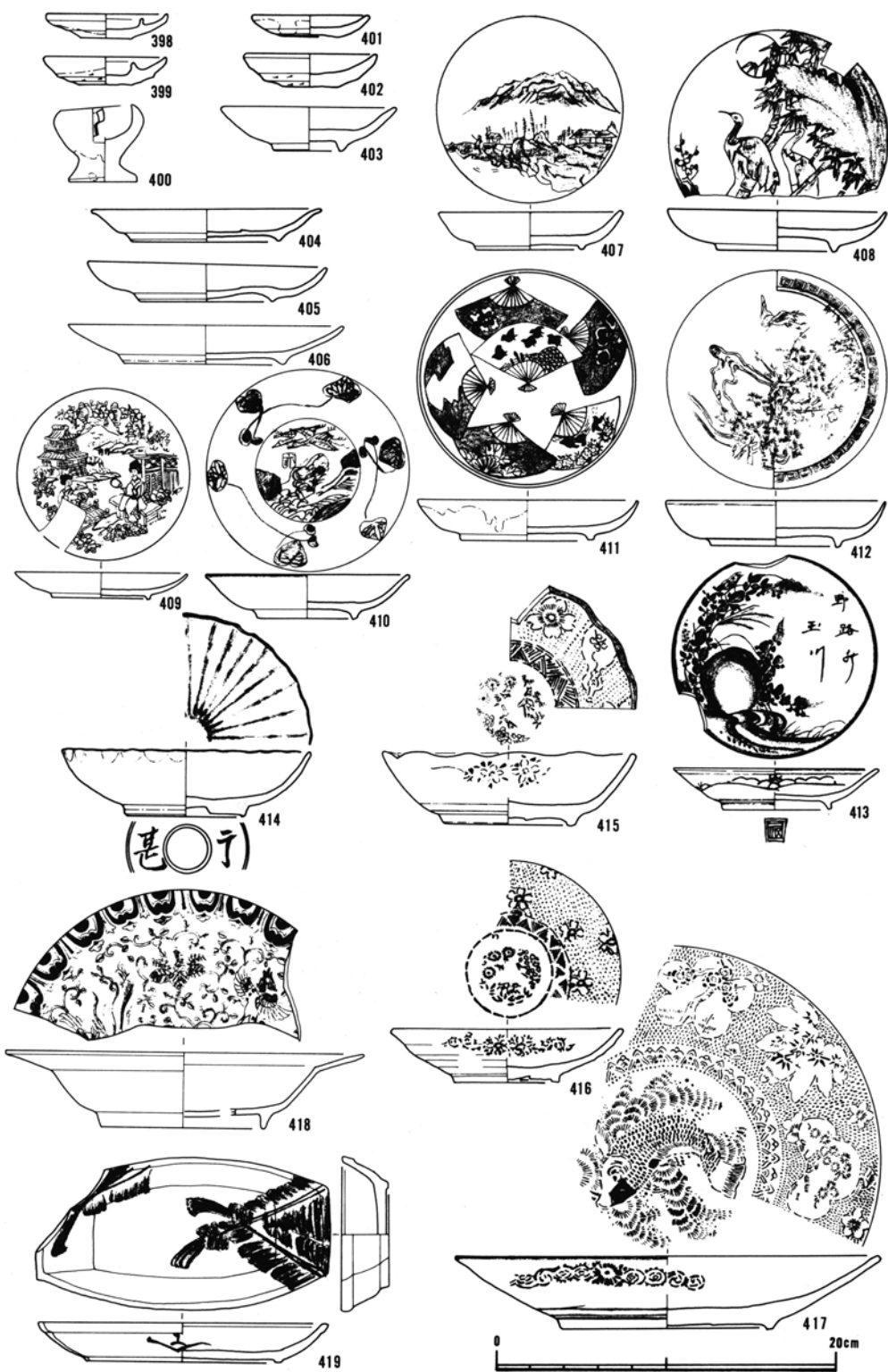


图34 土坑 S K61 (59A区) 出土遗物(3)



图35 土坑 S K 61 (59A区) 出土遺物(4)

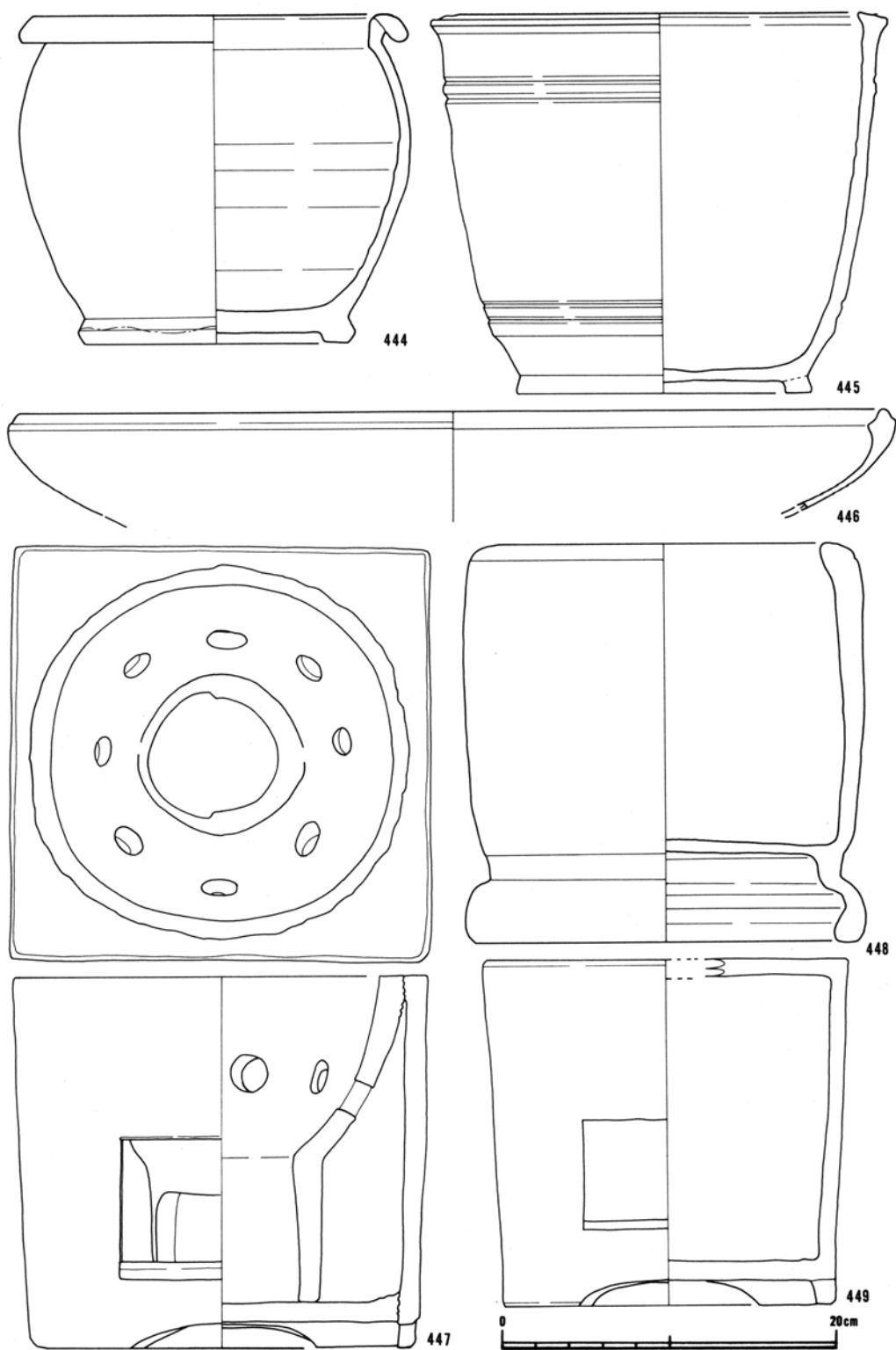


图36 土坑 S K61 (59A区) 出土遗物(5)

植木鉢。444は高台疊付を除いて全面に施釉した甕である。445は口縁部がやや広がる甕で、体部外面2ヶ所に横線がある。446は素焼きの土鍋、447はアカモノで、内・外には8孔がある。内外に煤付着。448・449は鉢とくどである。

9. 石製品 (図37)

砥石と硯が出土している。すべてIV期に属す。

砥石は断面長方形で直方体をなすもの(450)と板状をなすもの(451~453)がある。450は一平面と両側面を研磨面とする。安山岩製。S K100下層出土。451は小型で欠損部分を除きすべての面を研磨面とする。凝灰岩製。S K101出土。452は一平面除き三側面を研磨面とする。砂岩製。S X21出土。453は六面をそれぞれ研磨面とするが、一面顕著な研磨面を有する。凝灰岩製。S X21出土。

硯(454)は頁岩製の長方硯で、長さ13.8cm、幅5.8cmを計る。墨道は大きく凹状に磨り減っている。硯背に浅い彫り込みがあり、墨の付着が認められる。S K100下層出土。

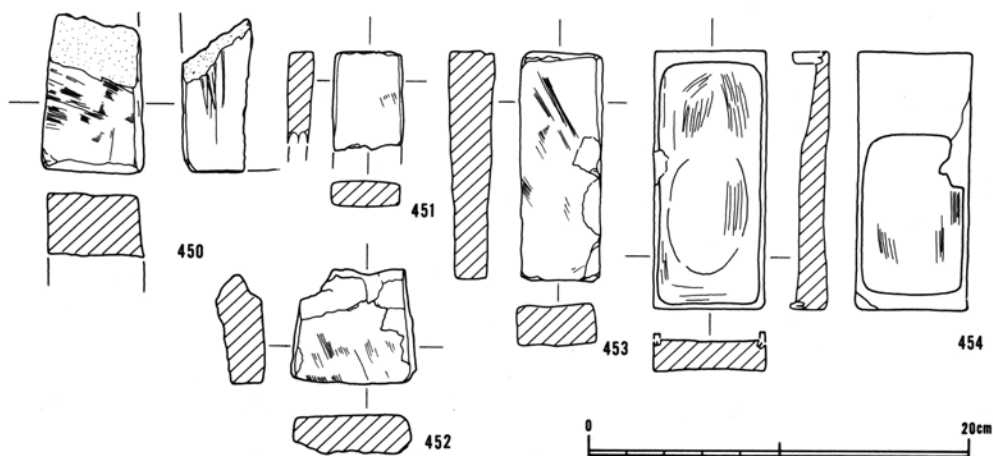


図37 石製品

Ⅳ．考 察

1 遺構

検出した遺構については時期別に既に述べた。ここでは、これらをまとめて遺構の変遷について考える。

昭和56年以来の発掘調査の成果により、勝川遺跡の時期区分は次のようにされている。

I期…南東山地区に人々が住み、稲作を苗田地区で行い、死者を上屋敷地区に葬った。これらの場所が一体となってムラを形成していた時期。弥生時代中期。

II期…ムラが盛え、そして衰退していった時期。弥生時代後期～古墳時代末。

III期…II期までの墓域を全く無視して整地し「寺」を建立した時期。奈良～平安時代。

IV期…下街道沿いの宿場町が形成された時期。江戸時代末～明治時代。

(1) I・II期の遺構について

従来発掘調査は上屋敷地区においても環状2号線用地内に限られていたので、環状2号線と直交する方向への遺構の広がりを知ることができなかった。しかし今回の調査により、59B区において方形周溝墓が検出されたことにより、環状2号線用地内の方形周溝墓群と同一群に属するか定かではないが、59B区周辺、さらに注意して見るならば、墓域が59B区より北へ広がる可能性が大きい。しかもI期の方形周溝墓S Z 23の北～北西にII期の方形周溝墓があることから墓は南から北へ遷地した可能性を指摘できる。

(2) III期の遺構について

勝川廃寺の寺域についてはK区のS D 37、E区のS D 33、その続きである59A区西端のS D 33、59B区のS D 79を結ぶことにより、寺域の南北の範囲が148mとなることはかなり確実性が高いと考えられる。しかし東西の範囲については推定の域を出ず、188mという値が示されていたが、今年度J R中央線側道部分の調査(62J区)により幅5mで南北にのびる溝を発見し、これが寺域の東大溝と推定されるに至った。その結果、寺域は東西227m、南北146mと考えられる。62J区の溝の詳細については別の報告書に譲る。寺域の建物として掘立柱建物と堅穴住居跡がある。堅穴住居跡は従前の調査ではD区東部に集中して検出され、春日井市教委の調査例を含めた5棟以上の例は「全てを『寺』以前の遺構と認めるだけの明確な資料は整っていないので『寺』と時間的にも位置的にも一部重複する」らしいが、59A区中央での検出例S B 46にしても柱穴内出土須恵器は、東海地方須恵器編年III期後年(7世紀後半)と考えられ、瓦から推測する年代(7世紀後半～8C)と重なり、前説に反しない。しかし寺域内に主要伽藍と共に堅穴住居があったとは納得しがたい。春日

井市教育委員会の調査によっても同じS B 46からかえりのある須恵器の蓋が出土している。これらの堅穴住居廃絶後に埋没したものであって、堅穴住居の年代はやや遡るのではないか、つまり堅穴住居跡の年代は、59A区S B 46からは、寺より若干古いとも解釈できる。ただし、寺院建立に際しての仮小屋的な住居だった可能性はある。

掘立柱建物は寺域内南西部で検出したものは主軸が寺と一致しないが、59A区中央で粉出したS B 47は主軸が寺と一致していることから、寺に何らかの関連性のある建物である可能性が高い。なお寺域内北東部において多数の掘立柱建物が集中して検出されたが、これらはその規模・主軸の方向から寺と密接な関連性をもつ建物と考えられるが、詳細は別の報告書に譲る。

61A区では南北方向の溝を、4条調査した。これらは寺の中央やや西へずれるものの、集中して検出されたことにより、道の測溝、地域内を区画する溝と考えられよう。

(3)IV期の遺構について

59A区はやや状況を異にするが、61A区と59B区においてIV期の遺構のあり方は環状2号線用地内の従来調査区D区・E区での遺構のあり方に類似する。とりわけ溝の方向はD・E区の溝とほぼ平行する。しかもこの年代は、59B区の遺物中にはD・Eの調査で見られた18世紀末～19世紀初頭の遺物はほとんど見当たらないことから、町並は、上・下街道分岐点から東へ下街道沿いに拡大、さらに街道脇からやや離れた方向へ広がったらしいことが明らかである。

2. 遺物——勝川遺跡における近世陶磁器について——

(1) はじめに

埋蔵文化財の発掘調査の急増に伴い、最近になってようやく江戸時代以降も考古学の対象として扱われるようになってきた。特に東京都内の発掘調査において「江戸学」が成立するほどに発掘調査の成果があがり、近世陶磁器の編年的研究も著しく進展しつつある⁽⁹⁾。瀬戸・美濃系陶磁器もその例外ではない⁽¹⁰⁾。ただ基本的編年観は呈示されているとはいうものの、江戸時代中・後期の編年はきわめて少ない⁽¹¹⁾。こうした状況にあって、生産地である瀬戸窯の製品の編年が明示された⁽¹²⁾。勝川遺跡は消費地であっておのずから生産地とは遺物の器種、数量等状況が異なるが、幸い、瀬戸・美濃系陶磁器以外では常滑系陶器を除いて皆無であり、勝川遺跡における陶磁器の様相を分析することによって編年観を示すことが可能と考えられる。特に59B区における勝川IV期（19世紀）の遺構の重複関係が、遺構の新旧関係、さらには遺物の編年観を考察する有効な手段となりうる。

遺構の重複関係を明らかにした上で、遺構内出土遺物の比較検討をし、考察を加えて陶磁器の編年観を示すことにしたい。

(2) 遺構の重複関係

まず59B区の遺構の切り合い関係を模式図（図38）で示す。これから導き出すことのできる遺構の新旧関係を列挙する。井戸SE12とそれに伴う排水溝SD75は、SE12の廃絶後に築かれた水回り施設SX22と井戸SE10より古い。またSD75はSD77に切られ、SD77は土坑SK100に切られ、さらにSK100は土坑SK99に切られていることから、SD77→SK100→SK99の順に新しい。SK100、99が掘削された整地層下でSE10とSD74が検出されたことから、SE12・SD75→SE10、SX22・SD74→SK100・SK99という遺構の変遷が明らかである。なおSD75と77、SK100と99の新旧関係は明らかであるが、遺物に時期差を認められず、それぞれはほぼ同時期の遺構と考えられる。

したがって勝川IV期は、59B区の遺構の重複関係からIV-1、IV-2、IV-3という3期に細分が可能である。

(3) 陶磁器の分析

ここでは上述の遺構のうち比較的遺物が多量に出土したSE12、SX22、SK100に伴う陶磁器に限り分析の対象として考察を進める。

①法量・数量による主要器種の選定

SE12、SX22、SK100からの出土遺物の口径と器高をグラフにすると、口径10～11cm

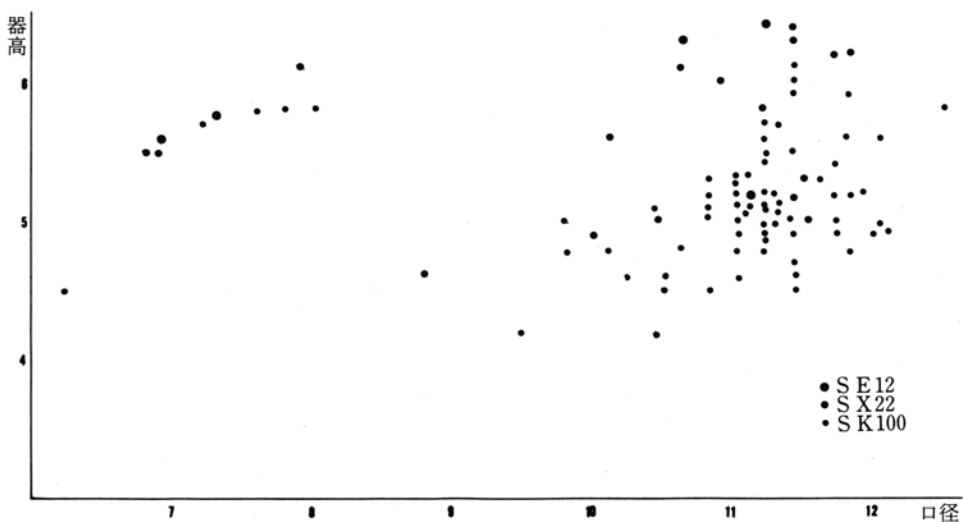


表2 遺物の法量

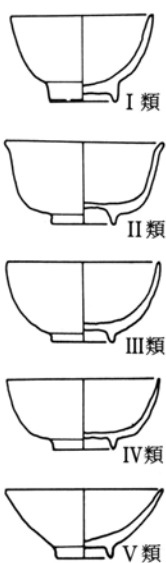


図39 碗の形状

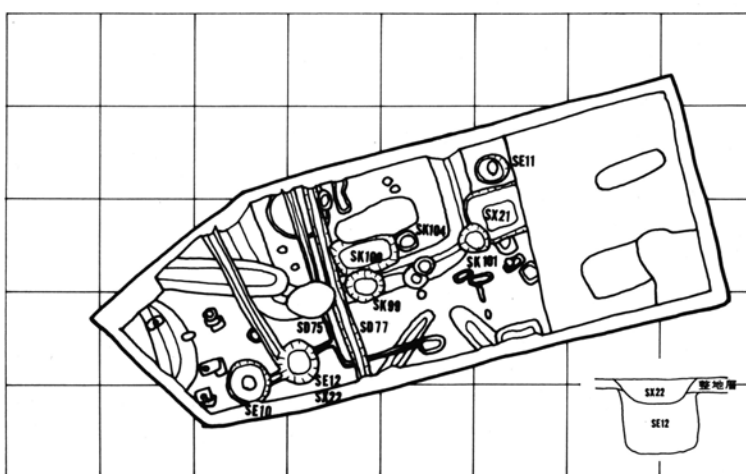


図38 59B区遺構平面図

図40 碗の形状変化
(上の表2を参照のこと)

の碗がかなり集中することが一目瞭然である(表2)。この大きさの碗はいずれの遺構からも多数出土しているので、型式変化を把握できれば編年の指標となるはずである。

②形状による碗の分類

法量はほぼ同じなので、形状について分類を試みる(図39)。

I類…口径に比べ、器高が高く、また高台も高いもの。

II類…口縁部が外反するもの。

III類…体部が丸いもの。

IV類…腰部の屈曲が著しいもの。

V類…体部が直線的に逆八字状に開くもの。

この5種類に従って碗の遺構ごとの数量を調べると次の諸点が明らかである(表3)。

i. I類はSE12, SX22に認められるがSX100には認められない。

ii. II類はいずれの遺構からも出土しているが、SE12からSK100下層にかけては増加傾向にあるが、SK100上層では減少する。

iii. III類はSK100下層以降認められる。

iv. IV類はSE12では認められず、SX22以降に認められ、増加傾向を示す。

v. V類はSX22以降認められる。

したがって、I類→II類→III類→IV・V類という変遷の可能性を指摘できる。わずかではあるが器高の低下傾向もある(図40)。

③装飾技法による碗の分類

碗の特徴を示すものとして、形状のほかに装飾技法もあげられる。すなわち技法a…手描き。筆で文様を描いたもの。

技法b…摺絵⁽¹³⁾。型紙を器壁に当て、上から呉須をハケ塗りしたもの。線が太く、線がつながった円形模様もしくはその変形は型紙の性質状あり得ない。3分割して文様を施すものが多い。

技法c…銅板転写⁽¹⁴⁾。エッチングを器壁に写しとったもの。文様を構成する線が細い。広い面を塗りつぶすことはできず、細い線を密に引くことで面を塗ることの代わりにしている。

技法d…吹き絵。型紙を器壁に当て、霧吹きで顔料を吹きつける。

この4つの装飾技法を施した碗を遺構ごとに分類してみる(表4)。

i. SE12では技法aしか認められない。

ii. SX22でも技法aが大多数を占め、わずかに技法bがある。

iii. SK100下層において突然技法b・cが多くなり、上層になると技法aは減少する。

	S E 12	S X 22	S K 100	
			下	上
I	○	○	○	
II	○	○	○	○
III	○	○	○	○
IV		○	○	○
V		○	○	○

表3 碗の形状別出土状況

	S E 12	S X 22	S K 100	
			下	上
a	○	○	○	○
b		○	○	○
c			○	○
d				○

表4 碗の装飾技法別出土状況

	S E 12	S X 22	S K 100	
			下	上
I	a			
	b			
	c			○
	d			
II	a	○		
	b		○	
	c		○	○
	d			
III	a	○		
	b			
	c			
	d			
馬の目皿	○			
石皿		○		

表7 皿の分類

	S E 12	S X 22	S K 100	
			下	上
I	a	○	○	○
	b		○	○
	c		○	○
	d		○	
	e		○	
II			○	
III	○	○		

表8 鉢の分類

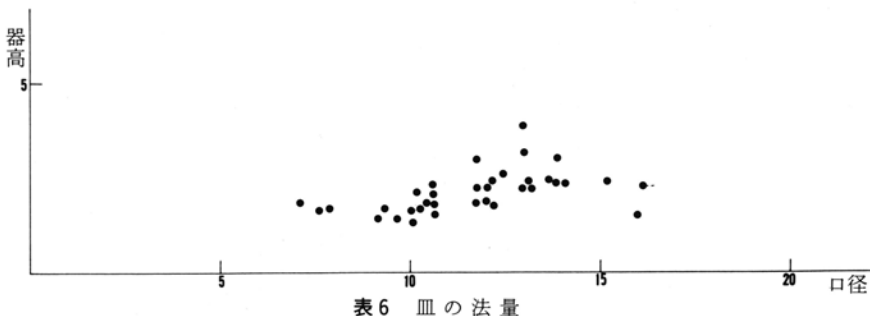


表6 皿の法量

S E 12	①	②	③	%
I _a	44	6	17	85
II _a	1	1	1	5
III _a	6	0	2	10

計20

S X 22	①	②	③	%
I _a	7	4	5	21
II _a	13	6	6	25
III _a	12	5	6	25
IV _a	1	1	1	4
V _a	9	2	4	17
III _b	2	2	2	8

計24

S K 100下層	①	②	③	%
I _a	11	1	7	8
II _a	17	7	10	11
III _a	20	8	11	13
IV _a	0	0	0	0
V _a	0	0	0	0
II _b	1	1	1	1
III _b	43	24	21	24
II _c	0	0	0	0
III _c	7	5	7	8
IV _c	32	12	17	19
V _c	20	11	14	16

計88

S K 100上層	①	②	③	%
I _a	9	1	2	2
II _a	20	3	6	7
III _a	21	5	9	10
IV _a	0	0	0	0
V _a	2	2	2	2
II _b	1	1	1	1
III _b	24	7	10	11
II _c	4	2	2	2
III _c	21	6	10	11
IV _c	54	26	32	35
V _c	31	14	18	19

計92

表5 形状と装飾技法による碗の分類

①：破片総数

②：口縁部 $\frac{1}{2}$ 以上数

③：推定数（文様のちがいから、口縁 $\frac{1}{2}$ 以下でも数える）

なお吹き絵は銅版に併用されているので個体数に入れてない。I_aの碗（広東茶碗、太白碗）の減少が注目される。

	S E 12	S X 22	S K 100	
			下	上
灯明皿	○		○	○
秉燭	I	○		
	II	○	○	
磚子			○	○

表9 灯火関連道具の分類

④形状と装飾技法をあわせた分類

形状と技法をあわせてⅠ類技法aをⅠ_a類と表記し分類する。Ⅰ_a～Ⅴ_a, Ⅱ_b・Ⅲ_b, Ⅱ_c～Ⅴ_c, Ⅴ_dに分類できる。遺構との関係を諸べると次の諸点が明らかになる(表5)

- i. SE12ではⅠ_aが主流である。
- ii. SE12ではⅡ_aがわずかに出現する。
- iii. SX22ではⅢ_a, Ⅴ_aが認められる。
- iv. SK100下層になりⅠ_a減少。Ⅱ_a, Ⅲ_aは残存する。
- v. Ⅱ_b, Ⅲ_bはSK100下層において認められ上層へ続く。
- vi. Ⅱ_c～Ⅴ_cはSK100下層から認められ、Ⅴ_cが主流となる傾向がある。
- vii. Ⅴ_dはSK100上層で認められる。

なお他の要素を検討してみる。胎土はⅠ_aが陶器質の胎土(陶胎)のものが多く、Ⅱ_a, Ⅲ_aは磁器質の胎土ではあるものの磁器の白色には程遠い暗青灰色である。技法b, cの碗はいずれも灰白色～白色を呈し、磁器製作の完成された焼成技術を読みとることができる。また装飾技法では、技法aは見込みに文様を描く。技法bでも見込みに摺絵を施すのが通例である。しかし技法c, dでは底裏に落款を施す例が多い。このことから技法a→技法b→技法c, dという変化を類推できる。

⑤皿の分類

皿は碗に次いで出土点数が多いので、碗と同様に検討する。特徴的な大型の皿(石皿, 馬の皿, 洋皿), 小型の皿(灯明皿とセットになると考えられる皿)はとりあえず除外して、口径9～16cmの皿の法量を調べたが、著しく集中するものは見られない(表6)。そこで碗同様に、技法a…筆絵, 技法b…摺絵, 技法c…銅板転写, 技法d…吹き絵, の4技法と口縁部～体部の形状をⅠ類…外反, Ⅱ類…内彎, Ⅲ類…直線的, の3分類を組み合わせて遺構ごとの数量を調べた(表7)。次に列挙する点が明らかである。

- i. SE12, SX22では筆絵皿のみ認められる。
- ii. SK100下層になり摺絵, 銅板転写登場。いみじくも碗と同じ結果になった。他には
- iii. 馬の目皿は石皿に先行する可能性がある。
- iv. 洋皿の出現, 上絵銅板⁽¹⁵⁾(赤絵, 多色を含む)の出現はSK100下層から。

⑥鉢の分類

ここで検討する鉢は器高指数33以上で、口径12～20cmのものに限定する。碗, 皿と同様に技法と口縁部～体部の形状を分類の基準とする。すなわち、技法a…筆絵, 技法b…摺絵, 技法c…銅板転写, 技法d…吹き絵, 技法e…文様なし。形状は、Ⅰ類…外反, Ⅱ類…波状口縁, Ⅲ類…体部が腰から内へ屈曲するもの(表8)。Ⅲ_a類が古く、SE12, SX22か

ら出土、I_a類はS X22以降出現。b, c, d類はS K100下層以後、出土している。

⑦灯火関連道具の分類（表9）

灯火具には灯明皿と乗燭があり、乗燭は体部が直線的に開くI類と台付のII類にわかれる。灯明皿はすべての遺構から出土。乗燭I・II類はS X22から出土。ただしもっと古くから存在したタイプ。ところで屋内配線等の低圧碍子はS K100下層期から認められる。したがって家庭での電灯がS K100下層期には普及し始め、灯明皿、乗燭共に減少することが容易に想像される。

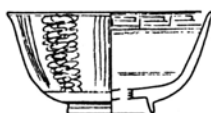
(4) 勝川遺跡59B区出土陶磁器の年代（表10）

勝川遺跡59B区出土陶磁器は、瀬戸・美濃における磁器生産の急激な技術革新の時代を反映していることが、以上の分析を通じて明らかとなった。磁器（新製焼）の考古学的資料の蓄積もなく実態が把握されていない状況ではあるものの、19世紀代の大きな技術革新の契機や画期は文献にその足跡をたどることができる。59B区出土陶磁器の年代を決めるポイントは、すなわち瀬戸・美濃における大きな変革の時期であり、まず第一に磁器生産の開始及び磁器焼成技術の完成の時期、第二に摺絵、銅板転写、吹き絵、上絵銅板転写等の装飾技術の完成時期である⁽¹⁶⁾。

第一の点について考える。特に碗I_aの色調・胎土・焼成を見ると必ずしも磁器といえるものばかりではない。淡黄白色で陶器質の焼成のものから、暗灰白色をへて白色・磁器質の焼成のもとへという変化を把握できる。有田焼によって販路を狭められた尾張藩が不況をのりきろうと自力で磁器焼成を試みたのが享和元年（1801）のことである。しかし有田の磁器には及ばず、加藤民吉による有田焼の技術導入（1804～1807年）を待たねばならなかった。その後、文化10年（1813）頃から文政末年（1829）までには瀬戸染付磁器の完成をみている。初期磁器製作段階、もしくはその影響を強く残す碗が碗I_aである。瀬戸奎兵衛窯の「文政七（1824年）申十一月日」銘の広東茶碗、美濃水神窯出土「天保九（1838年）」銘の広東茶碗等の紀年銘資料をもとに窯跡出土遺物は編年がなされており、捻り文と器壁が薄く緩く傾斜することからS E12の53の碗は藤澤編年の第2型式（1825～1850年）、他のI_aタイプの碗は第3型式（1850～1875年）と考えられる。

第二の点、装飾技術の年代についてまとめよう。下絵は既に桃山茶陶にその創始を求められる。摺絵はその一つで、桃山時代に小皿や^{びんだらい}盥の装飾として施された。摺絵にやや遅れて印版も出現したが、いずれも幕末期には全くすたれていた。ところが明治6年（1873）頃、肥前では摺絵が復活、美濃でも明治15年（1882）頃、伊勢の型紙業者に美濃で型紙製作をさせた。しかし型紙切りに熟練を要する割に消耗が早いのに対し、銅板の寿命が長い

S E12



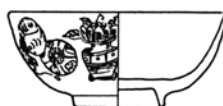
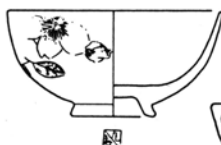
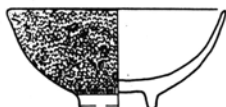
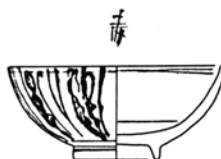
IV-1

S X22



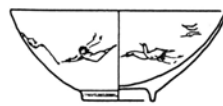
S K100上層

IV-2



IV-3 前

IV-3 前



S K100下層

IV-4 後

IV-4 後

表10 陶磁器の変遷

ので、明治30年代の前半には摺絵はほとんど廃絶した。

銅板転写は明治22年（1889）に完成した。

上絵は有田においては正保3年（1646）頃にはほぼ完成、色絵、赤絵といわれた。弘化～嘉永の頃（1844～1854）には美濃でも上絵が始まった。明治28年（1895）には上絵銅板転写技術が完成した。赤を主体としたため赤絵銅板とよばれたが、単色では変化に乏しいため、赤、青、緑などで色だみを施した。着物姿の女性に花や庭園などを配した「菊美人」「傘美人」図は輸出の二大図柄だった。

吹き絵は、多治見西浦円治父子の手によって明治年間に西浦焼として流行した。

(5) 勝川遺跡の59B区の遺構の年代（表11）

① S E 12（IV－1期）

先述のように53が第2型式、54～57が第2型式と第3型式の間。70は例外的に摺絵の急須である。体部の形状はまさに円筒形で、摺絵の型紙を貼りつけるのも容易、文様も単純、ゆえにごく初期の摺絵であろう。草花文が多い鬘盤の文様の方がはるかに複雑、優美であり、文様から見ても17、18世紀の摺絵の系統ではない。19世紀中頃のものか。61は赤色も施してあり、上絵の初期のものと考えられる。19世紀中頃。したがってS E 12の時期、IV－3期は1825年頃～1850年頃くらいになろうか。

② S X 22（IV－2期）

100の碗は見込みに「文化年制」という銘があること（101の「成化年制」は、中国明代の年号を模倣したもので、文様化している。製作年代は示さない）、104の碗の底裏に「明治年製」の銘が認められること、摺絵はわずかに存在し、銅板転写は認められないこと、S E 12より新しいこと、以上からS X 22、IV－2期は、1850年頃～1880年頃といえよう。

③ S K 100（IV－3期）

下層では摺絵と銅板転写が碗の数量においてほぼ等しいこと、傘美人図皿が認められること、これらから1880年頃から1895年頃であろう。上層では碗の数量においてもはや銅板が多いこと、237の摺絵の碗の文様は明らかに日清、日露戦争いずれかの戦勝記念を示すこと、それが市之倉で焼かれて飛ぶように売れたという日露戦争凱旋記念の杯にデザインが似ること、等からS K 100上層は1895年頃から1910年頃と考えられよう。

④ その他の主な遺構の年代

59A区の土坑S K 57の出土遺物を見ると、摺絵技法は認められるものの銅板転写は認められない。筆絵の碗II_aは59B区S K 100に共通するものが多い。19世紀中頃～1880年頃と考えられよう。

59B区のSK100を切っているSK99にはもはや摺絵碗が認められない。明治30年代後半以後であろう。

最も多量に陶磁器が出土した59A区の土坑SK61は、最も古いタイプの碗が329で19世紀中頃、遺物は明治時代に属するものが多いが、大正期に属す可能性のあるものもある。例えば422は底裏に「愛知病院」とあるが、愛知病院は名古屋大学医学部と附属病院の前身で、明治10年から大正11年の間にこの名称だった。ここには図示しなかったが、新しいものとしてプラスチック製品が出土した。

(6) まとめ

19世紀の一消費地における陶磁器の分析を試みたが、かえって新しい時代であるがために意外に参考文献がなく、詳細な検討を加えることができなかった。しかし今日、愛知県、岐阜県において瀬戸、美濃の窯業生産は主要産業であり、ファインセラミックスが喧伝され、将来は今以上に重要性を増すことと思われる。地場産業の歴史をたどり将来を見通すためにも、身近な時代ゆえにこそその調査研究を積極的に進めるべきであろう。

なお、考察は59B区を調査担当した赤塚次郎氏が作成した資料(財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部1984『Can. 1』および『Can. 6』)に基づいていることを断わっておく。

また整理作業を進めていく上で、愛知県教育委員会の赤羽一郎氏・遠藤才文氏、愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏に資料の提供と御教示を頂いた。記して謝意を表したい。

時 期	遺 構	年 代	元 号	事 項
IV-1	S E12	1 8 3 0	天 保 弘 化 嘉 永 安 政 明 治	明 治 維 新 日 清 戦 争 日 露 戦 争
IV-2	S X22	1 8 5 0		
		1 8 6 8		
IV-3	S K100 上 下	1 8 8 0		
		1 8 9 5		
		1 9 1 0	大 正	
		1 9 1 2		

表11 遺構の年代

V. ま と め

今回の発掘調査の成果を下に列挙する。

1. 弥生～古墳時代にかけての墓域が拡大すること、すなわち勝川Ⅰ・Ⅱ期の方形周溝墓が、59B区以北へも拡大する可能性が大きいこと。
2. 本来の位置を保ってはいないものの刻書埴輪が出土した。埴輪は胎土・焼成・製作技法等からみて当地で製作されたものであり、5世紀末～6世紀前半に年代づけられる。「この時期は尾張における古墳時代の大きな変革期にあたり、大型古墳の造営、新しい文物の受容を行い、それらに伴う独自の生産体制・新技術の導入、製作者の組織化が実施された。尾張にこの新しい文化的な波が伝播し、定着する段階で文字が伝わった」と考えられる。つまり埴輪に刻まれた文字は、新しい変革の波の伝播を象徴的に物語っているといえる。
3. かつてE区で検出した溝が北へ続き、寺域の西辺を区画する大溝であること、59B区で検出した東西方向の溝は、61A区で確認できなかったものの寺域の北辺を画する大溝であるらしいこと等が推定でき、したがって寺域の南北の規模が148mと推測できた。寺域内の溝の配置から東西規模は188mと推定された（62年度の発掘調査成果から東西規模は227mと判明）。
4. 上・下街道の分岐点（追分）に発達した勝川の宿場町が、下街道沿いに東へ拡大し、59B区付近において町屋が形成されたのは19世紀であること。

詳細は別の報告書を待たねばならないが、昭和62年度の苗田地区における発掘調査で旧地蔵川の付近から緑釉、灰釉陶器、墨書陶器、木製品（人形・木簡）が大量に出土した。これらは、奈良時代から平安時代にかけて文字を使う人々が住んでいたことを証拠立てるもので、おそらく役所がこの近くに存在したものと考えられる。古瓦散布地の範囲確認から始まった勝川遺跡の発掘調査も、近くには味鋤・味美・勝川という大規模な古墳がひかえること、それらの古墳群を形成した人々の子孫の氏寺として勝川廃寺が存在したであろうこと、さらに役所も存在した可能性が大きいこと等を考慮するならば、今一度勝川遺跡の持つ重要性を見直さねばならないのではないか。勝川廃寺寺域という特定の狭い範囲にとらわれずに、もっと広範囲での勝川遺跡に眼を向ける必要性があるのではないか。行政的な配慮を期待したい。

注

- (1) 愛知県教育委員会 1986 『愛知県遺跡分布図(1) 尾張地区』。
- (2) 愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏の御教示による。
- (3) (2)に同じ。
- (4) 大高焼は、現在の名古屋市緑区大高町で18世紀後半ないし19世紀前半に焼かれたものをいうが、仲野氏によれば、印は似るが胎土が異なるとのこと。
- (5) 碍子博物館（日本碍子超高圧研究所内）の御教示による。
- (6) 伊藤禎樹氏の御教示による。
- (7) 学生帽をかぶった少年が単葉機に搭乗した図柄で、簡略化された上絵銅版にダミを施す。飛行機は実戦用ではなく、明治末期に輸入された地上滑走用の練習機らしい。
- (8) 愛知病院とは、明治9年に設立された愛知県病院が、翌年には県立愛知病院と改名され、これを示すと思われる。名古屋市中区天王崎町に所在し、大正11年には愛知医科大学病院となった。したがって、愛知病院の関係者か入院患者が当地付近に居住した可能性を示すものと考えられる。愛知県医師会 1971 『愛知県医事風土記』。
- (9) 五島美術館 1984 『江戸のやきもの』。
- (10) 植崎彰一ほか 1984「瀬戸・美濃近世編年表」『江戸のやきもの』シンポジウム配布資料。
- (11) 愛知県陶磁資料館の紀要を中心に発表された仲野泰裕氏の一連の研究がある。
- (12) 藤澤良祐 1987「本業焼の変遷(1)」『研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館。
- (13) 渋紙に図柄を切り抜いた型紙を器面にあて、絵具を刷毛で摺り込む技法。桃山期の久尻元屋數窯には既に見られる。
- (14) 下絵銅版は瀬戸の陶工川本治兵衛が欧州製の銅版絵付の陶磁器をみて工夫したものに始まるが、呉須の材質等の問題により次第にすたれた。下絵銅版の技術の完成は、明治22年の太田能寿、加藤米次郎らによって達成された。
- (15) 吸水性のある素焼き面に銅版紙を貼りつける下絵銅版技術を、本焼きしてガラス質になった上絵付に転用はむづかしく、上絵銅版の完成は、明治28年になった。赤を主としたので一般に赤絵銅版といわれ、さらに黄・青・緑などで着色（色だみ）を施すようになった。
- (16) 瀬戸市史編纂委員会 1967 『瀬戸市史陶磁史篇3』、多治見市 1987 『多治見市史 通史編下』により、装飾技術の完成年代を求めた。特に後者によるところが大きい。このほかに、瑞浪陶磁資料館 1982 『大正・昭和の窯業』、1983 『美濃の輸出陶磁器』、愛知県陶磁資料館 1984 『瀬戸の染付磁器』を参考にした。

遺物計測値一覧

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
1	弥生土器 壺	7.4	10.3	11.0	3.0	不明	図9 SZ24	26	須恵器 壺	22.8				ナデ	図14 SD79
2	"	11.4	16.0	16.3	5.0	ハケか?	61B区出土"	27	" "			22.0	16.8	ケズリ	"
3	"	10.2	12.0	19.0		不明	"	28	" 蓋	14.8				ナデ	図14 SD33
4	"			23.0	5.4	"	61B区 "	29	" 高坏						"
5	"	15.2	27.0	23.8	4.0	外・不明 内ハケ	"	30	" 壺			12.4		ナデ	"
6	"				6.5	不明	"	31	円筒埴輪						図15
7	"	7.2	10.3	11.8	2.8	外・ヘラミガキ 口縁～ヨコナデ	図11 61B区SZ25	32	"						
8	"	9.0	15.0	17.2	3.0	外・ミガキ 内・ナデ	焼成後穿孔"	33	"						
9	台付盤	9.6	9.1	10.5	9.1	外・内 ヘラミガ キ	"	34	"						
10	壺	19.1	28.4	27.8	6.0	内・外 ハケ 口縁内 ヨコナ デ	61B区 "	35	"						
11	"	12.8	26.6	25.4	6.0	内・外 ハケ	61B区 "	36	"						
12	製塩土器	8.5				ナデ?	図12 SB46	37	"						
13	土師器甕				6.4	外 ハケ 内 板ナデ	"	38	"						
14	須恵器蓋	15.0	2.4			外 回転ヘラケ ズリ 内 "ヘラズ リのちナデ	"	39	"						
15	" 高坏	12.9	12.6	15.2	11.4	外 坏ヘラケズ リのちナデ 内 脚・坏上 ナ デ	図13 SK52	40	"						
16	" "	13.3	11.3	15.3	10.5	"	"	41	"						図16 文字刻印埴輪
17	" "	13.8			11.8	"	図上で 復元する。"	42	軒丸瓦						図17 ⑥
18	" "	13.9		15.6		"	脚欠損 "	43	"						
19	" 蓋	18.0	(2.9)			回転ナデ	図14 SD79	44	"						
20	" "	18.4				"	"	45	軒平瓦						三重弧文KDI
21	" 坏				11.0	"	"	46	"						四重弧文KDII
22	" "				12.7	"	"	47	"						" "
23	" "				13.0	"	"	48	"						偏行唐草文
24	" "	8.8	3.0		5.2	"	"	49	"						"
25	灰釉 壺					"	"	50	碗	6.6	4.9		3.0		図18 SE12

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
51	碗	7.3	5.8		3.6		図18 S E 12	77	紅皿	4.5	1.3		1.2		図19 S X 22
52	"	7.0	5.6		3.3			78	皿	7.5	1.8		4.5		
53	"	12.2						79	"	9.4	2.0		3.6		
54	"	10.8						80	"	9.6	1.3		5.3		
55	"	11.6						81	"	12.6	1.8		5.0		
56	"	10.6	6.3		4.6			82	"	11.0	2.0		5.1		
57	"	11.2	6.4		6.0			83	"	11.0	2.9		5.2		
58	"	10.8	5.4		4.6			84	"	9.6	2.5		6.2		
59	"	11.1	5.2		5.5			85	"	13.1	3.7		6.3		
60	"	11.7	8.4		5.9			86	"	12.5	3.0		5.9		
61	"	7.2	1.8		3.2			87	德利	2.4	11.0	7.0	4.5		
62	灯明皿	7.6	1.9		2.8			88	碗	6.2	3.1		3.4		
63	皿	10.0	1.8		3.8			89	"	4.9	5.5		3.5		
64	仏餉具	6.2	5.4		3.7			90	"	6.8	5.5		3.2		
65	"	6.6	6.0		4.0			91	"	8.8	4.6		3.5		
66	德利				5.8		鉄釉	92	"	7.0					
67	"	3.5					灰釉	93	"	7.9	6.1		3.5		
68	"	11.5	9.8		8.0		"	94	"	11.4	6.3		5.2		
69	蓋	9.5	2.0		つまみ 1.4			95	"	11.7	6.2		6.0		
70	土瓶	1.9	8.6	8.6	6.0			96	"	11.4	6.4		5.4		
71	皿	24.0					馬の目皿	97	"	12.9	7.0		5.8		
72	播鉢	37.8						98	"	11.2	5.8		4.4		
73	"	34.8	13.2		14.5			99	"	10.6	6.1		3.9		
74	灯明具	4.9	2.0		1.7		灰釉 図19 S X 22	100	"	10.0	4.9		3.8		
75	乗燭	5.2	4.3		4.0		鉄釉	101	"	10.9	6.0		4.1		
76	仏餉具	5.9	3.8		4.5			102	"	11.8	6.2		4.7		

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
103	碗	11.4	6.4		5.4		図19 S X 22	129	手あぶり?	12.7 × 10.1	15.6		23.2 × 20		図21 S X 22
104	"	10.1	5.6		3.6			130	蓋	1.2 ~16	4.0		8.6		トコナメ
105	"	11.5	5.3		4.4			131	大いぶし	16.0					
106	蓋	5.2	2.5		7.8		図20 S X 22	132	鐏鉢	32.0	16.0		16.0	外 ケズリ	図22 S X 22
107	"	9.2	2.3		1.6		灰釉	133	"	33.5	13.5		15.0	"	
108	"	9.6	2.0		6.0		鉄釉	134	"	37.0	14.5		16.0	"	
109	"	10.4 10.0	2.7		4.4			135	"	38.0	14.6		17.0	"	㊦印
110	"	15.5	3.2		5.9			136	"	38.0	15.6		15.8	"	㊦印
111	皿	27.0	5.3		11.3			137	碗	8.2	3.5		3.2		図23 S K 57
112	"	26.2	5.0		12.2			138	"	9.8	4.5		3.2		
113	鉢	14.6	8.8		7.4			139	"	10.6	4.8		4.0		
114	"	21.6	7.9		10.2			140	"	10.5	5.9		3.9		
115	甕	26.2						141	"	11.0	5.5		3.6		
116	碗	6.9	5.5		3.7		図21 S X 22	142	"	11.0	5.3		3.6		
117	"	12.0						143	"	10.6	5.6		4.4		
118	"	12.5 11.5	8.5		9.3		灰釉	144	"	11.2	5.2		3.8		
119	"	16.0	7.7		6.7			145	"	11.6	4.8		4.0		
120	合子	5.1	2.4	6.5	4.3		灰釉	146	"	12.0	5.3		4.1		
121	壺			9.0	6.2		鉄釉	147	皿	12.4	1.8		6.5		
122	戸車?		直径 5.0		厚さ 1.1			148	"	11.5	2.0		6.6		
123	"		" 5.8		" 0.9			149	"	9.8	2.3		5.3		型押し
124	水滴	6.4	2.2					150	"	6.6	1.9		2.7		鉄釉
125	蓋	17.0	3.6		6.0			151	"	11.0	2.5		5.6		
126	土鍋	17.8	7.0		7.0			152	深皿	16.8	5.3		9.0		すりえ
127	行平鍋	15.9	10.0		7.1			153	深皿	15.0	6.2		9.2		
128	蓋	12.2 × 9.8	2.0					154	蓋	9.5	2.5	12.8	5.3		

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備	考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備	考
155	蓋	10.8	2.8		3.8				図23 S X 57	181	碗	11.4	5.5		4.5				図24 S X 100 下層(1)
156	手あぶり				22.3 × 18.5					182	"	11.8	5.2		3.8				
157	碗	11.4	6.1		5.5				図24 S K 100 下層	183	"	11.4	4.7		3.9				
158	"	11.2	5.1		4.0					184	"	11.3	5.1		4.6				
159	"	11.2	5.0		4.2					185	"	11.4	4.9		4.7				
160	"	11.2	4.9		4.3					186	"	11.2	5.1		4.7				
161	"	10.8	5.0		4.2					187	"	11.7	5.2		5.0				
162	"	11.0	5.1		4.2					188	"	11.4	4.7		5.2				
163	"	11.2	5.6		4.2					189	"	10.4	4.2		3.2				
164	"	11.5	5.1		4.2					190	"	10.8	4.5		4.0				
165	"	11.4	5.9		3.7					191	"	10.5	4.6		3.5				
166	"	11.2	5.7		3.8					192	"	11.8	4.8		3.8				
167	"	9.8	5.0		4.0					193	"	11.9	5.0		3.9				
168	"	11.0	4.8		4.4					194	"	6.2	4.5		2.8				図25 S K 100 下層(1)
169	"	12.0	5.6		4.3					195	"	6.6	3.1		2.9				
170	"	10.8	5.0		3.9					196	"	7.8	5.8		3.8				
171	"	11.0	5.1		4.1					197	"	7.6	5.8		3.2				
172	"	10.4	5.1		3.8					198	"	7.2	5.7		4.2				
173	"	11.8	4.9		4.8					199	"	9.3	7.8		4.7				
174	"	11.5	5.1		4.1					200	"	11.5	5.1		4.0				下胴 面取り 図25 S K 100 下層(2)
175	"	11.2	4.9		4.1				図24 S X 100 下層(1)	201	"	9.5	4.6		3.2				
176	"	12.1	4.9		4.3					202	"	6.2	6.9		4.4				
177	"	11.2	5.4		4.1					203	灯明皿	7.0	1.3		3.2				
178	"	10.2	4.6		4.0					204	乗燭	6.0	4.2		4.0				
179	"	10.1	4.8		3.7					205	仏餉具	6.0	3.9		3.8				
180	"	11.8	5.6		4.2					206	"	5.4	5.7		4.1				

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
207	仏餉具	6.0	5.8		4.2		図25 S K100 下層(2)	233	德利				11.0		図25 S K100 下層(3)
208	皿	12.0	1.8		7.1			234	碗	11.8	5.9		3.8		図27 S K100 下層(1)
209	"	10.8	2.1		6.2			235	"	11.3	5.7		4.1		
210	"	9.2	1.5		5.4			236	"	11.0	5.1		4.1		
211	"	12.0	2.4		7.8			237	"	11.5	5.1		4.5		
212	"	14.0	2.3		8.5			238	"	11.0	4.9		4.0		
213	"	15.2	2.4		7.0		有段・白磁	239	"	10.8	5.3		3.8		
214	"	27.0	2.0		15.0		白磁	240	"	11.2	5.5		4.7		
215	鉢	16.8	6.2		6.8			241	"	12.5	5.8		5.7		
216	"				8.4			242	"	11.4	4.9		4.8		
217	"	16.5	5.8		10.0			243	"	11.2	5.2		4.4		
218	"	16.1	6.9		6.7			244	"	11.0	5.3		5.0		
219	"	18.6	5.8		9.6			245	"	11.7	5.2		4.9		
220	"	19.0	6.9		9.5		波状口縁	246	"	11.4	4.6		3.5		
221	"	21.0	6.7		10.5			247	"	11.4	5.2		4.0		
222	"	12.8	6.2		5.8		八角	248	"	10.6	4.8		3.5		
223	"	23.6	11.6		18.0		図26 アカモノ S K100 下層(3)	249	"	11.6	5.0		4.6		
224	深鉢	21.8	19.3		13.0			250	"	11.7	5.4		4.0		
225	深鉢	28.0	27.6		22.8		図25 S K100 下層(3)	251	"	11.0	5.3		3.9		
226	播鉢	35.2	16.5		15.6			252	"	9.8	4.8		3.7		
227	蓋	10.8	3.6		つまみ 4.4			253	"	11.4	4.7		3.9		
228	"	9.4	2.7		つまみ 3.6			254	"	11.2	5.0		3.9		
229	碁子	太2.0	内径	1.2				255	皿	10.5	1.8		7.0		
230	鉢	26.5	10.5		11.0			256	"	12.4	2.0		7.2		
231	土瓶	9.5	12.1	18.0	9.4		注口 欠損	257	"	c12.0	1.8		c8.0		
232	小型 急須	4.4	5.2		3.6			258	"	11.0	2.5		6.0		

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備 考
259	皿	14.3	2.2		8.8			図27 S K100 下層(1)	285	碗	6.2	7.2		4.0			八角形 図29 S K99(1)
260	"	16.0	1.6		8.2				286	"	10.8	5.1		4.3			
261	"	15.4	2.3		8.6				287	"	11.2	5.0		4.5			
262	"	9.5	1.9		5.5		型押し		288	"	12.8	5.4		5.2			
263	"	11.8	3.1		6.5			図28 S K100 上層(2)	289	"	14.8	5.0		7.4			輪花
264	"	11.8	2.3		6.0				290	皿		2.3					角皿 型押し
265	"	10.4	2.4		6.2				291	蓋	7.0	1.9		5.0			
266	灯明皿	6.4	1.0		2.8		鉄釉		292	"	9.4	2.5		3.5			
267	皿	6.6	1.7		2.4		"		293	"	11.6	3.1		4.7			
268	蓋	7.0	1.5		2.8				294	"	11.7	3.6		5.0			
269	"	10.0	1.6		6.0				295	碗	12.2	4.8		7.6			把手付
270	"	11.2	3.3		4.6		白磁		296	"	3.8	3.8		3.0			
271	合子	11.0	3.8		8.0				297	急須	8.8		11.4				
272	"	11.4	3.6		9.2				298	??	c15.0	12.2		15.0			
273	"	10.2	4.4		7.8				299	鉢				20.2			
274	鉢	16.2							300	徳利				6.8			
275	"	16.0	4.6		8.0				301	皿	27.0	5.9		12.0			馬の目皿
276	"	16.3	5.8		7.8				302	手水鉢	31.0	12.5		14.0			図30 S K99(2)
277	徳利	3.1							303	水甕	30.0	13.4		16.9			
278	"			7.2	5.4				304	火(?)鉢	20.1	19.6		14.4			
279	鉢	25.0	10.2		17.6		アカモノ		305	こね鉢	31.0	17.5		16.0			
280	灯明皿	6.4	1.1		2.8			図29 灰釉 S K99(1)	306	甕	35.0		20.4				
281	皿	7.2	1.6		3.3		"		307	碗	10.7	4.9		3.6			図31 S X21
282	碗	7.5	2.9		2.8				308	"	11.2	5.0		4.0			
283	小壺	3.5		6.8					309	"	12.2	5.4		4.0			
284	"	3.6	3.6	4.2	4.0				310	"	11.2	5.1		4.0			

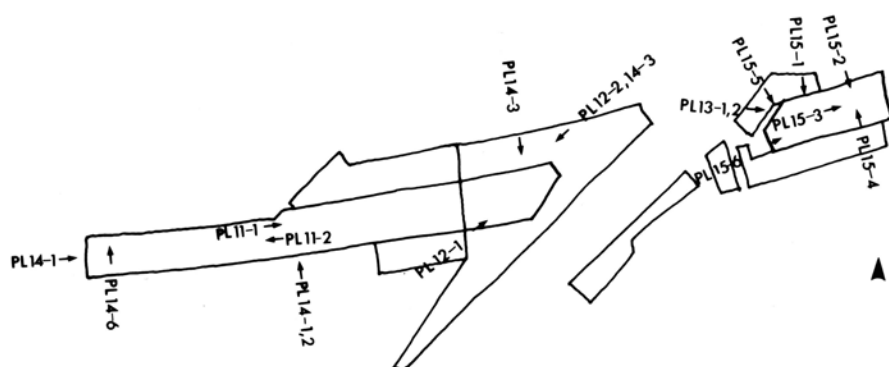
遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調	整	備 考
311	碗	11.8	5.0		4.2			図31 S K21	337	碗	12.0	5.2		4.0			図32 S K(1)
312	"	12.4	5.4		5.0				338	"	11.2	4.9		3.9			
313	"	11.8	4.9		5.1				339	"	10.8	5.1		3.9			
314	"	11.4	6.0		3.9				340	"	11.2	5.1		4.2			
315	"	5.8 -6.3	5.3		4.0				341	"	11.2	5.4		4.1			
316	"	7.3	9.5		6.8				342	"	11.1	5.1		3.9			
317	皿	9.5	2.1		4.9			輪花	343	"	11.2	5.3		3.9			
318	水滴	5.5 × 3.5	1.9						344	"	11.4	5.1		3.8			
319	皿	15.0	3.5		6.8			灰釉	345	"	10.8	5.1		4.0			
	"	21.0	7.5		12.2				346	"	10.7	5.2		3.8			
321	蓋	14.2	2.5		4.8				347	"	10.8	5.0		3.9			
322	"	17.4	3.0		6.4				348	"	11.2	5.0		4.1			
323	おろし皿					底	ヘラケズリ	鉄釉	349	"	11.0	4.8		3.8			
324	羽釜	23.0	16.4	30	17.0				350	"	11.0	5.2		3.7			図32 S K61(1)
325	水甕	30.0	15.5		19.0				351	"	11.3	5.2		4.3			
326	碗	10.4	5.9		3.8			図32 S K(1)	352	"	11.0	5.2		3.8			
327	"	11.8	5.6		4.2				353	"	11.0	5.3		4.1			
328	"	11.2	5.7		4.8				354	"	10.4	5.3		3.9			
329	"	10.9	5.0		3.8				355	"	11.4	5.2		4.5			
330	"	11.4	5.7		4.9				356	"	12.0	5.2		4.7			
331	"	11.4	5.7		5.1				357	"	11.6	5.8		4.8			
332	"	10.4	5.1		4.1				358	"	11.5	5.0		4.7			
333	"	12.0	5.1		4.1				359	"	12.4	4.9	4.8				
334	"	11.8	5.5		4.1				360	"	11.6	5.6		5.1			図33 S K61(2)
335	"	10.6	4.5		3.6				361	"	11.6	5.6		5.1			
336	"	11.8	5.5		4.1				362	"	11.5	5.4		4.8			

遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考	遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
363	碗	12.0	5.1		4.4		図33 S K 61(2)	389	蓋	10.5	2.8		4.8		図33 S K 61(2)
364	"	11.6	4.9		4.0			390	"	10.0	2.6		3.8		
365	"	11.7	4.8		4.0			391	"	12.2	3.8		5.0		
366	"	12.0	5.0		4.2			392	"	11.0	2.9		4.5		
367	"	10.6	4.2		3.7			393	"	9.0	2.3		3.5		
368	"	11.0	4.9		3.8			394	"	10.6	3.5		4.0		
369	"	11.0	5.2		4.6			395	"	10.4	3.1		4.5		
370	"	11.0	5.0		3.7			396	"	9.0	2.5		6.4		
371	小碗	9.5	4.3		3.0			397	"	9.4	3.5		6.4		
372	"	11.0	4.6		4.5			398	灯明皿	7.0	1.6		2.8		図34 灰釉 S K 61
373	"	6.1	3.8		3.6			399	"	7.1	1.5		3.1		"
374	"	8.6	4.8		3.7			400	乗燭	4.6	4.7		3.6		図34 S K 61(3)
375	"	8.4	5.1		2.8			401	皿	7.1	1.3		2.9		灰釉
376	"	7.4	4.6		2.4			402	"	7.7	1.8		3.0		灰釉
377	"	6.6	4.8		3.0			403	"	10.2	2.7		4.0		
378	"	7.0	5.3		4.0			404	"	13.4	1.8		8.7		
379	"	7.0	4.6		3.5			405	"	14.2	2.0		8.1		
380	"	6.8	5.5		3.9			406	"	16.2	2.2		9.4		
381	"	8.6						407	"	11.0	2.2		6.5		
382	"	8.0	3.7		3.2			408	"	13.0	2.2		7.0		
383	"	7.8	3.4		3.1			409	"	10.1	1.4		5.6		
384	"	8.0	4.9		3.7			410	"	12.2	2.5		5.9		
385	"	7.0	5.4		3.5			411	"	13.0	2.2		7.8		
386	"	10.0	4.2		3.5		みどり	412	"	13.4	1.8		8.7		
387	"	11.0	5.2		4.8		あお	413	"	13.2	2.4		7.4		
388	"	11.6	4.6		4.4			414	"	14.7	3.8		6.1		

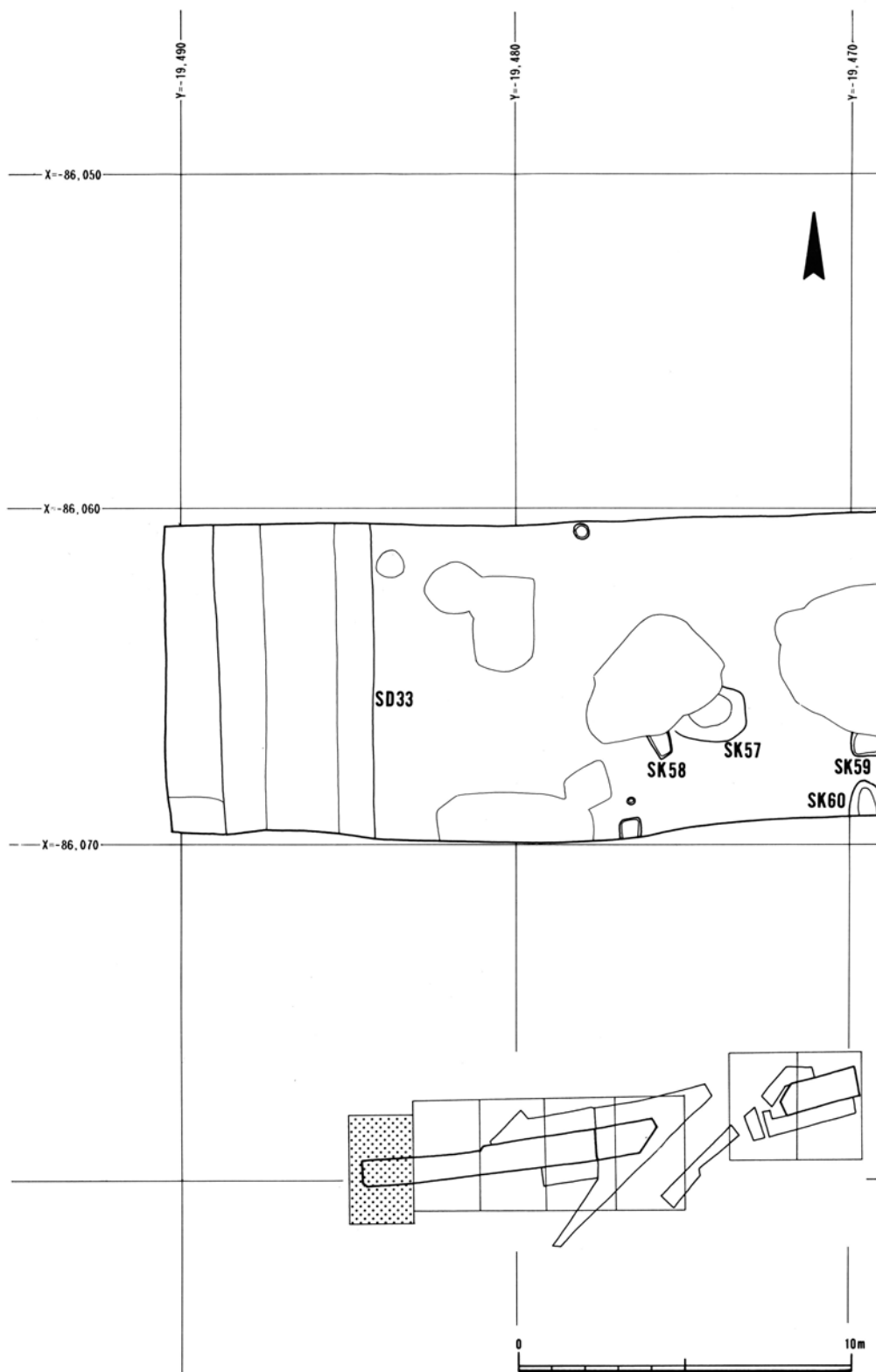
遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
415	皿	15.0	4.0		7.5		図34 S K 61(3)
416	"	14.0	3.4		6.3		
417	"	24.6	4.7		12.1		
418	"	22.4	4.2		9.8	有段	
419	"	17.4 × 9.1	2.7		10.4 × 7.0	舟形	
420	碗	15.2	7.2		6.4		図35 S K 61(4)
421	"	14.0	7.2		6.0		
422	"	15.0	6.8		6.0	白磁	
423	"	7.7	3.2		3.0	"	
424	"	11.0	4.9		3.8	"	
425	"	11.5	5.2		4.7	白磁	
426	"	16.4	6.9		7.0	"	
427	"	16.6	6.4		6.2		
428	鉢	17.6	8.6		2.5		
429	"	12.2	3.9		7.5		
430	"	19.2	3.2		11.0		
431	仏餉具	5.3	5.8		3.5		
432	"	5.6	5.1		4.4		
433	壺	2.2	5.3	8.2	4.5		
434	"	3.6	4.5		4.7		
435	德利	2.0	13.7		5.0		
436	"		c 15.0		4.8		
437	"			13.6	11.0		
438	"	3.1	25.8	12.0	11.0		
439	壺	7.7		12.9			
440	蓋	5.0	3.7		つまみ 0.8	白磁	
遺物 番号	種 類	口径	器高	体部径	底径	調 整	備 考
441	ティーポット			13.0	7.1		図35 白磁 S K 61(4)
442	壺			16.4			
443	角皿	11.8 × 9.1	5.7		6.8 × 5.2		
444	甕	21.0	20.5	23.6	15.8		図36 S K 61(5)
445	"	27.2	22.8		17.4		
446	土鍋	25.8					
447	くど	24.8 × 24.8	22.0		21.6 × 21.6		
448	深鉢	20.6	24.0		20.8		
449	くど	21.3	20.6		19.1		
450	砥石						図37
451	"						
452	"						
453	"	12.0×4.0	最大 厚2.4				
454	硯	12.8×5.8					

版 图

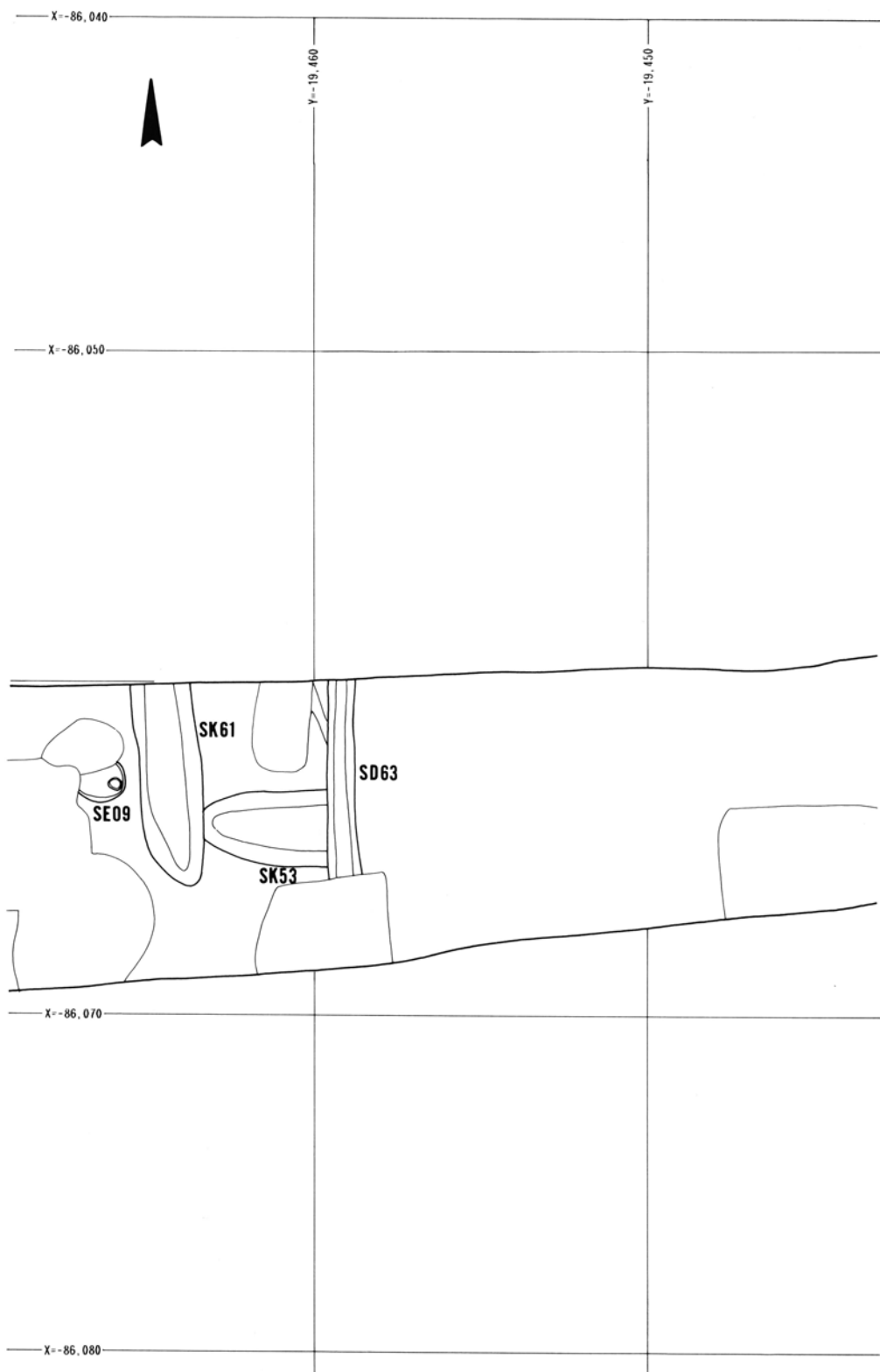
図版1 撮影方向



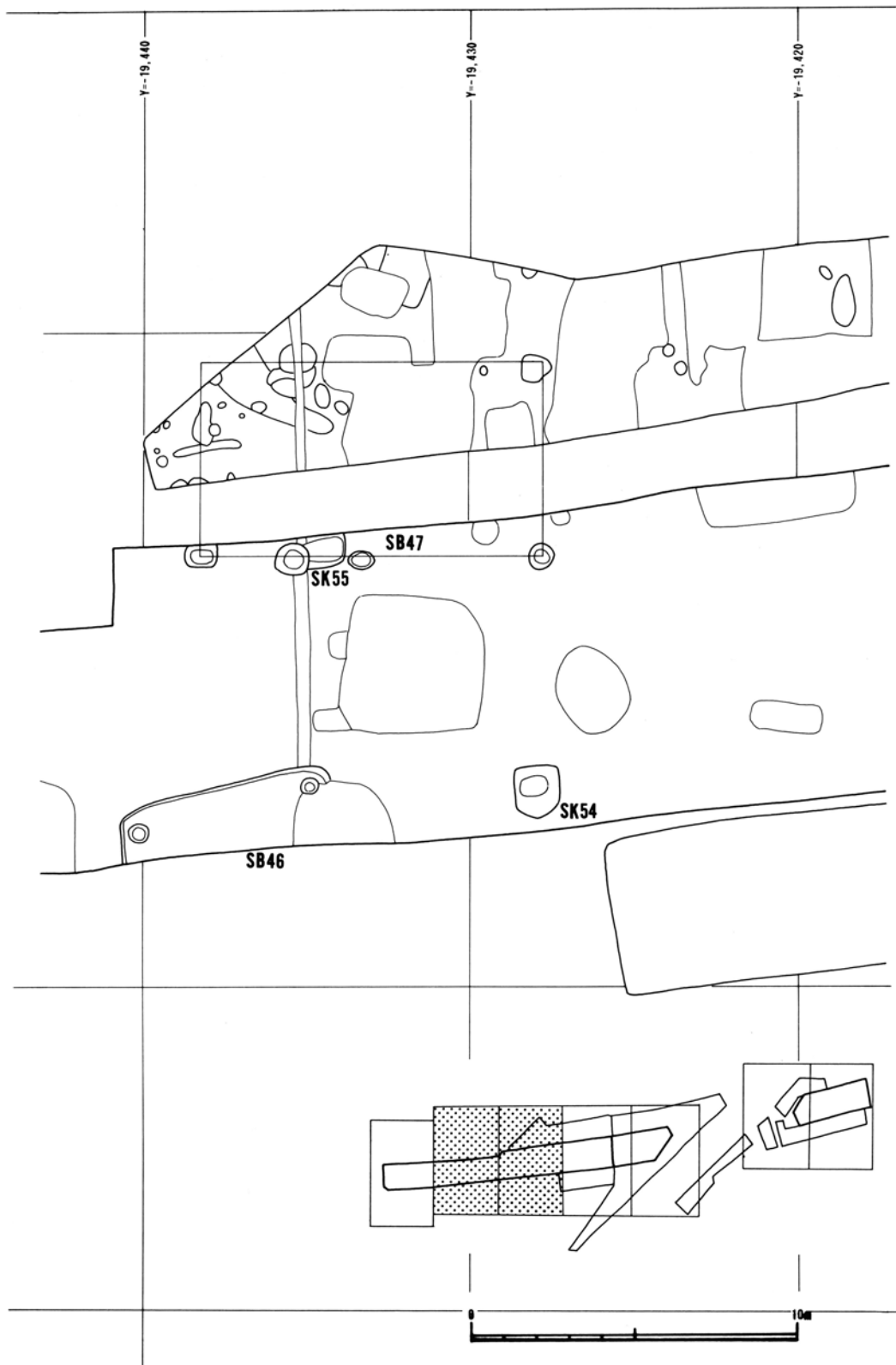
図版2 遺構図 (1)



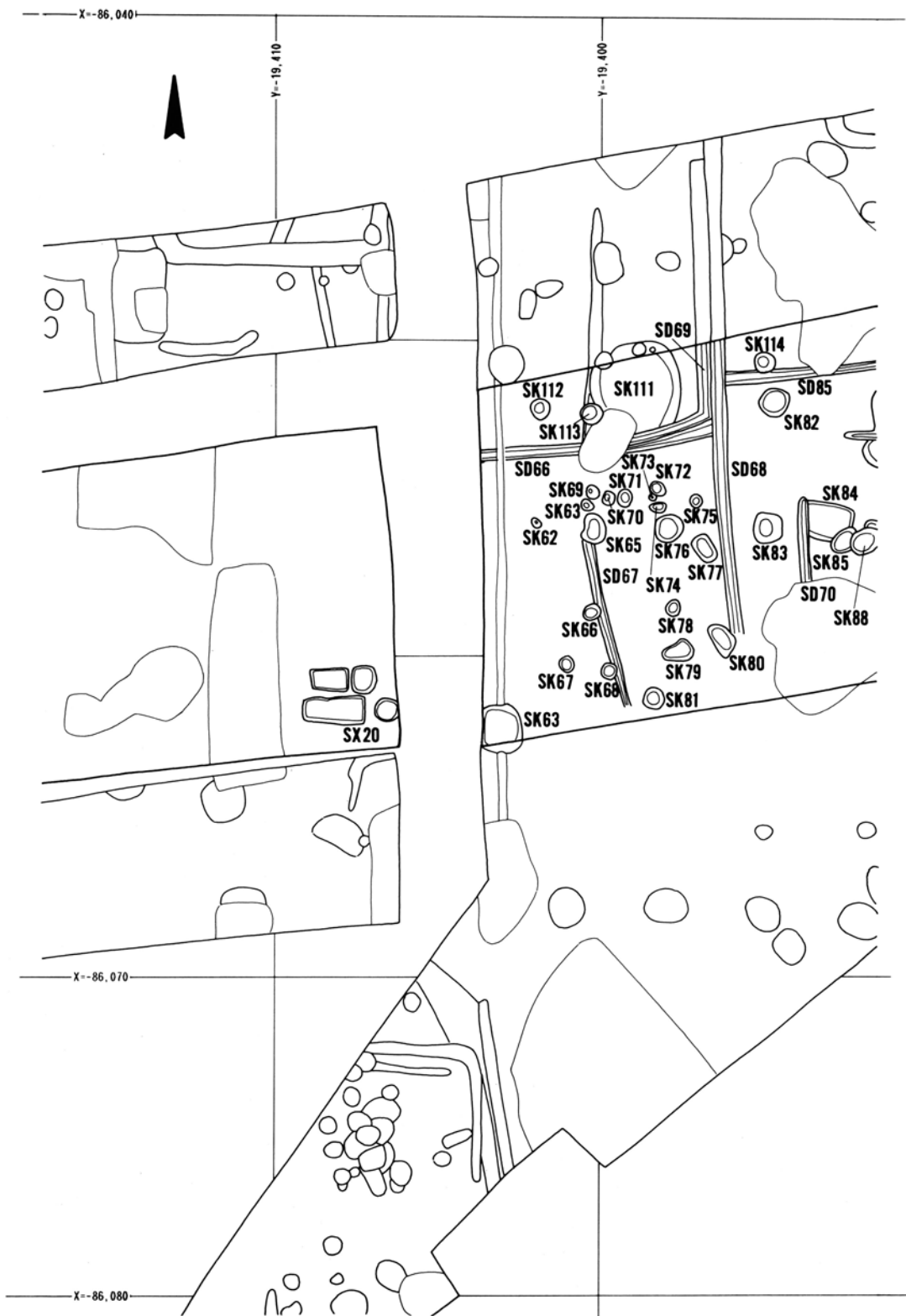
図版3 遺構図 (2)



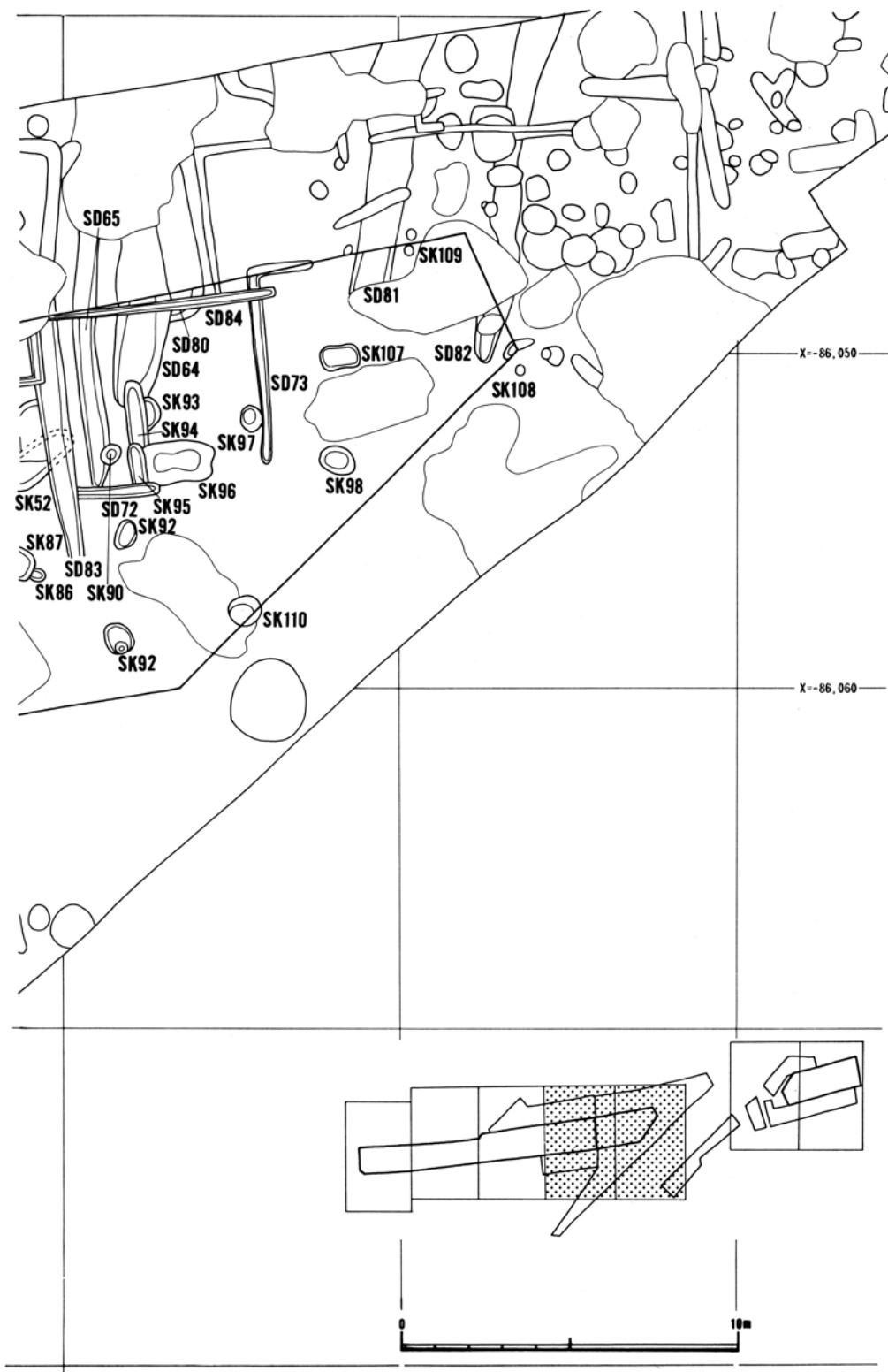
図版4 遺構図 (3)



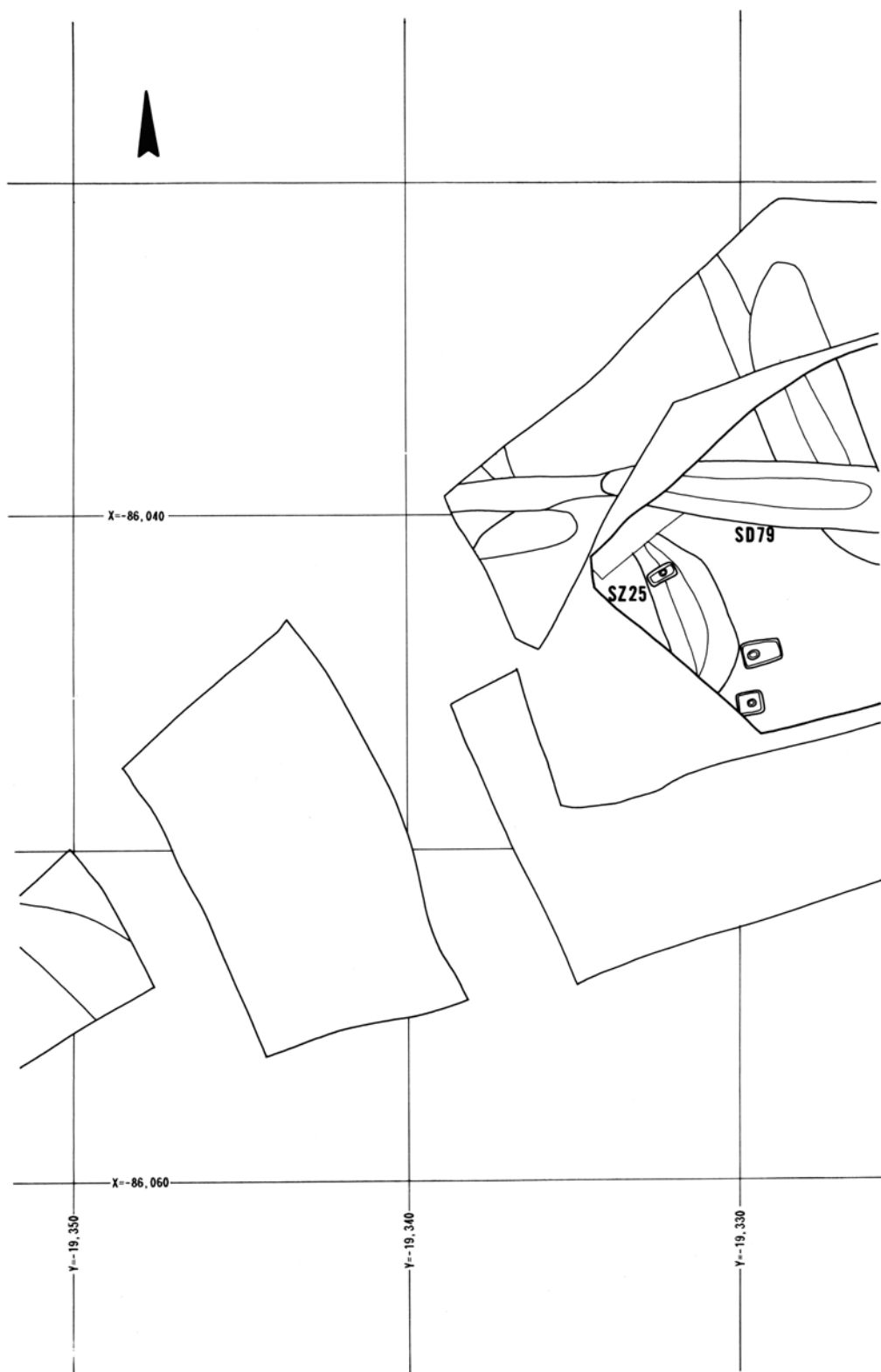
図版5 遺構図 (4)



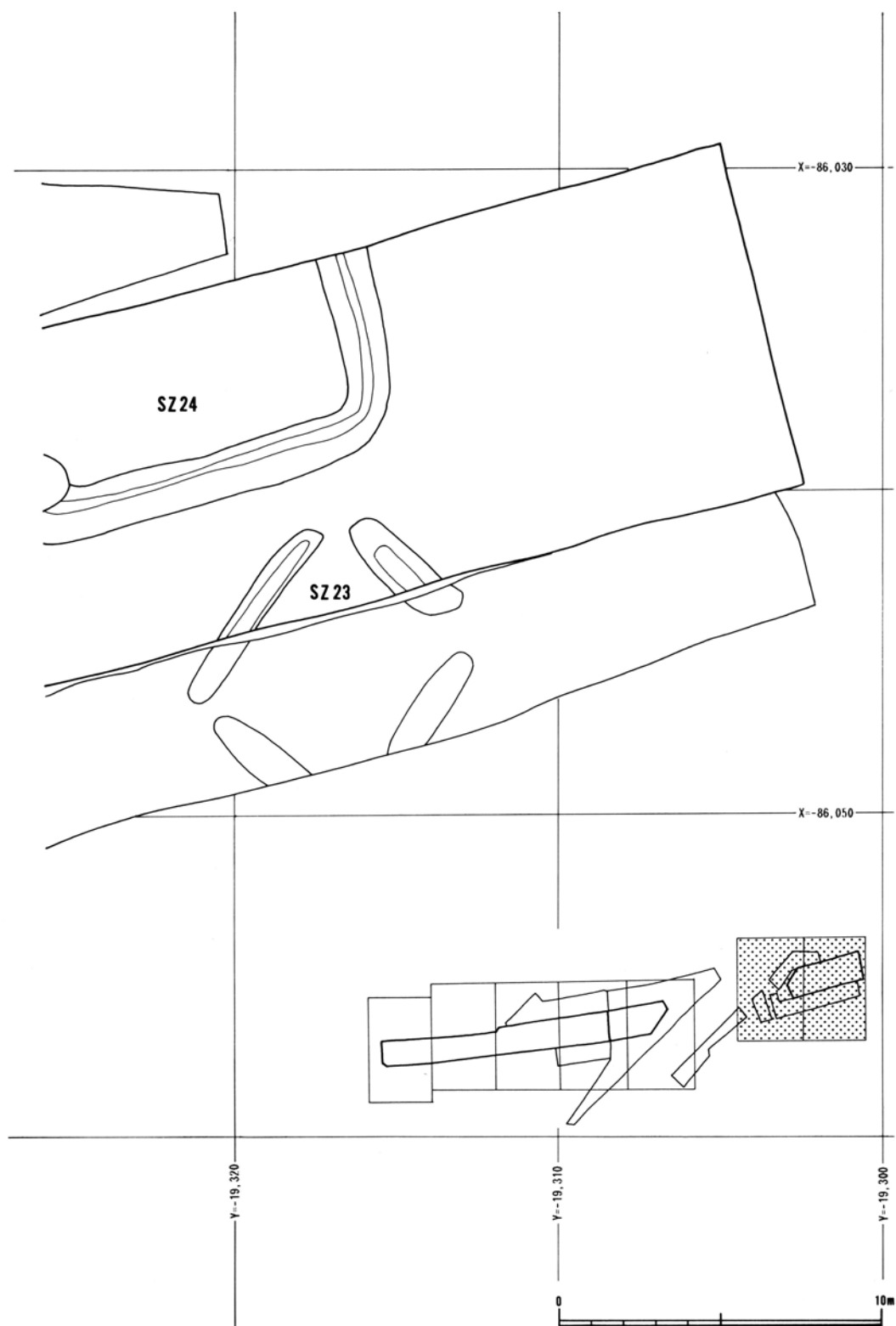
図版6 遺構図 (5)



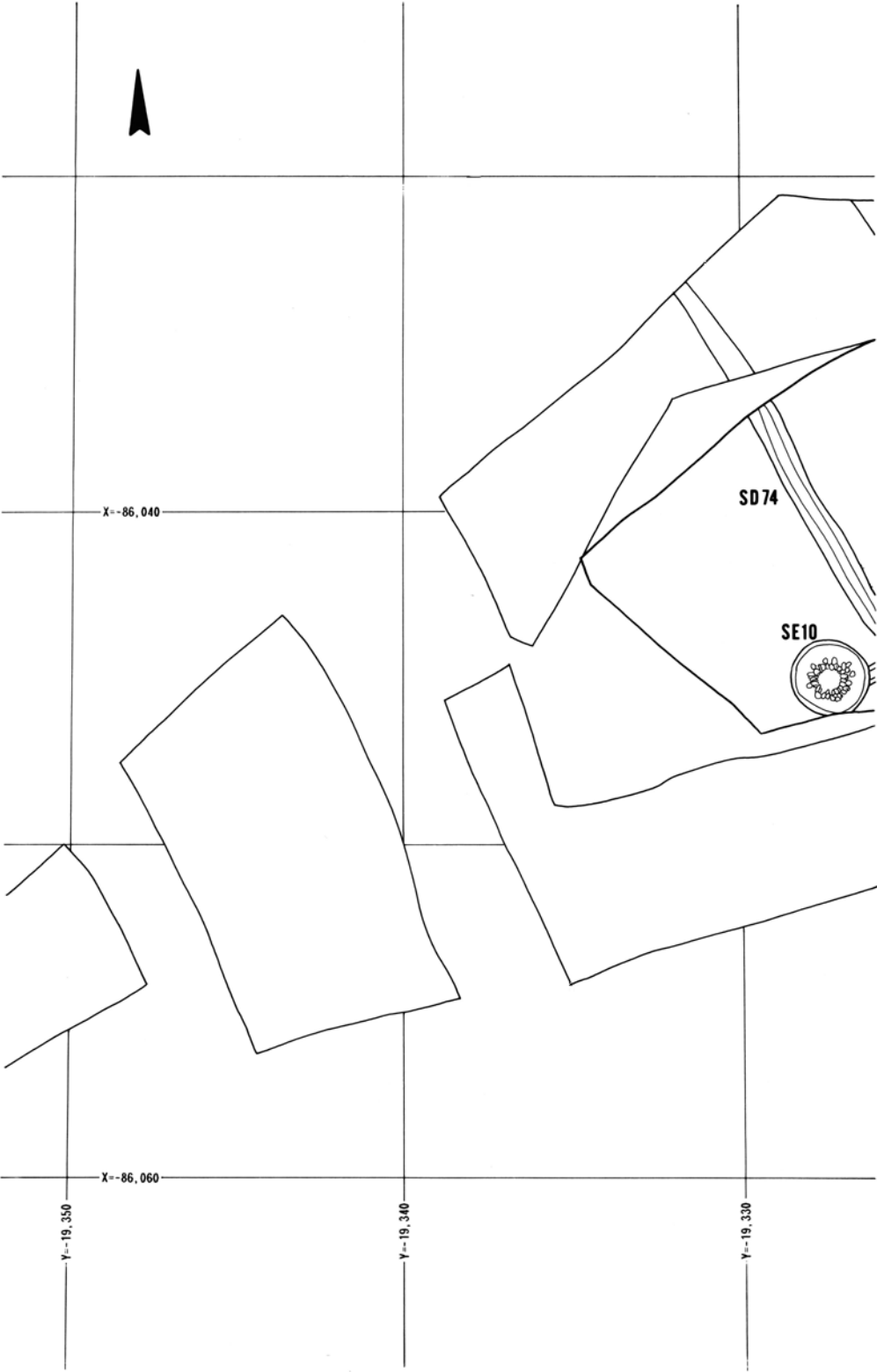
図版7 遺構図 (6)



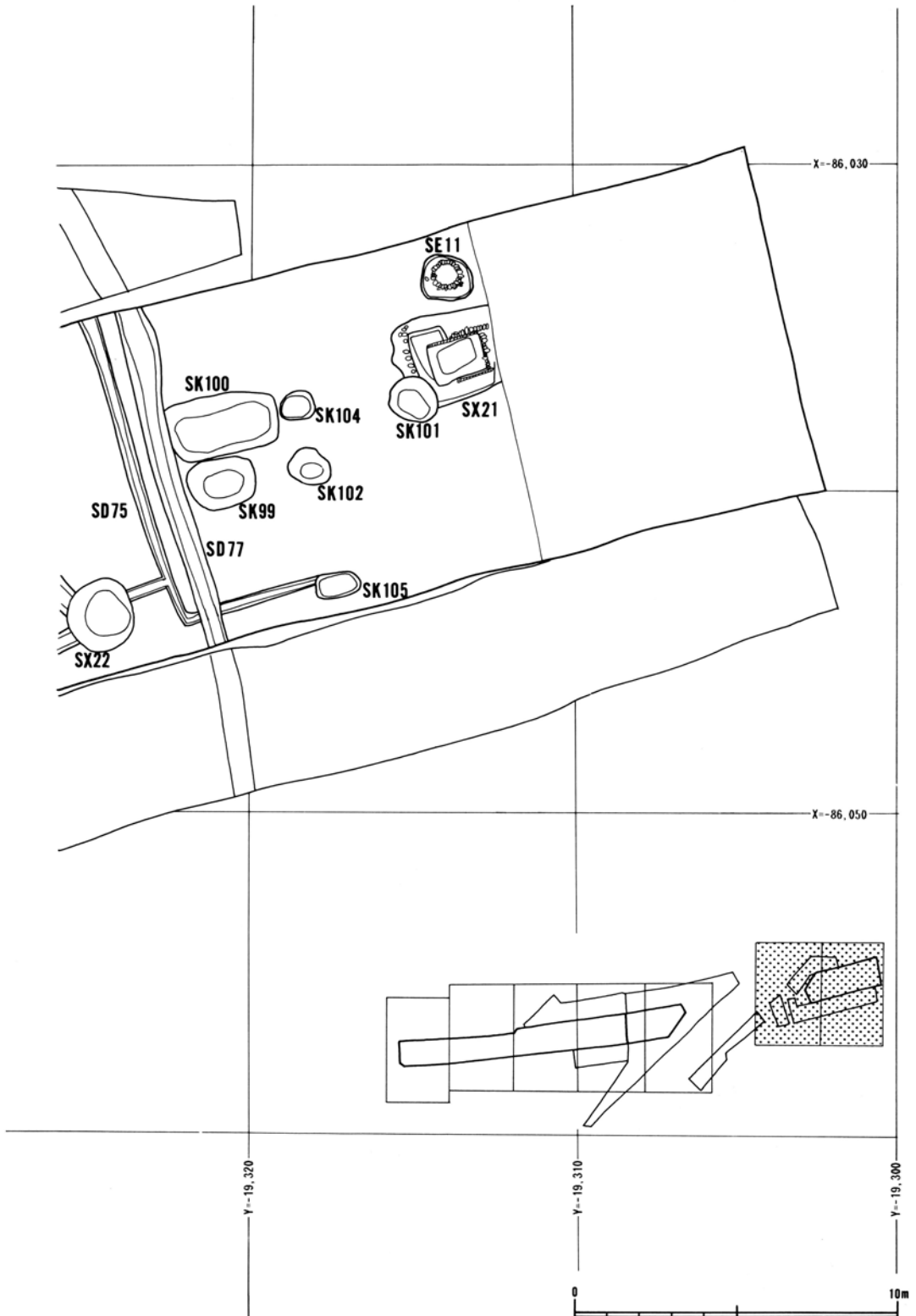
図版 8 遺 構 図 (7)



図版9 遺構図 (8)



図版10 遺構図 (9)



図版11 調査区全景 59A区



1 西から



2 東から



1 西から

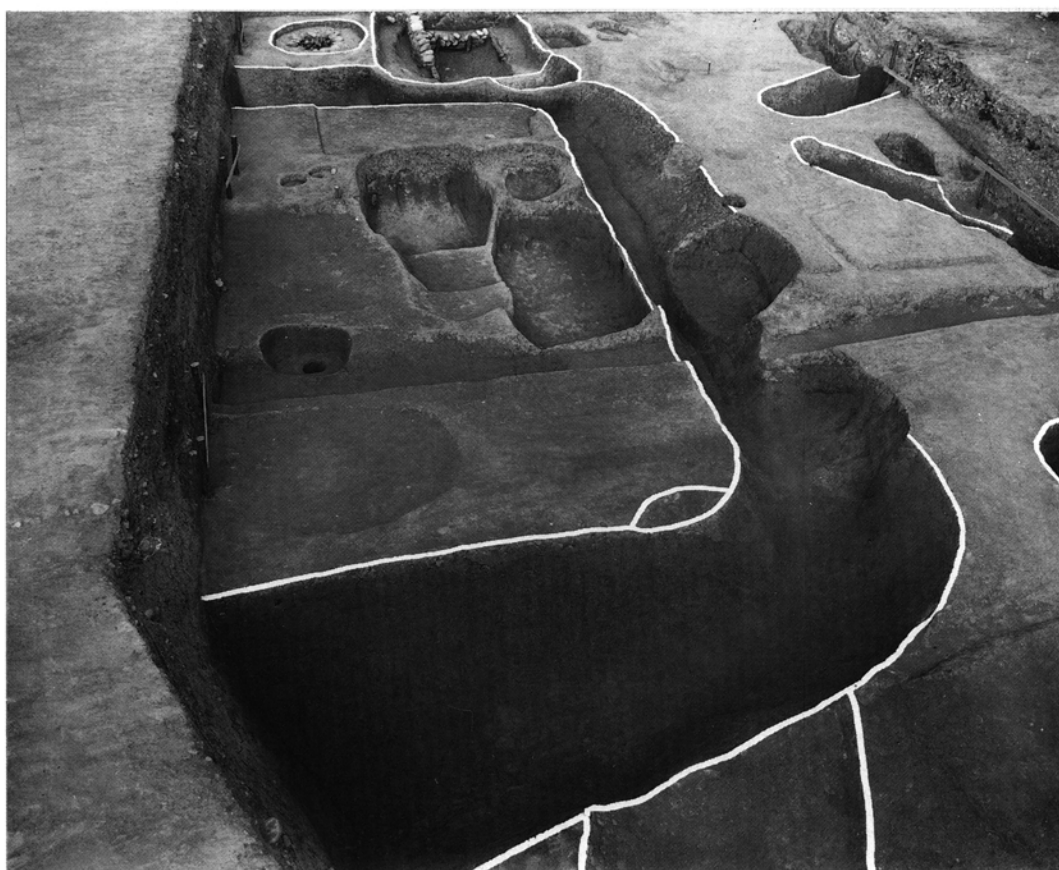


2 東から

図版13 調査区全景 59B区



1 西から 上面遺構

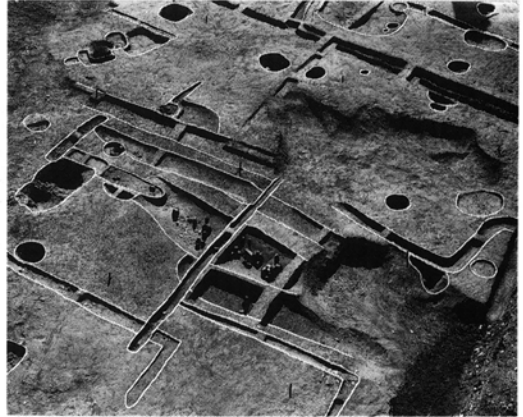


2 西から 下面遺構

図版14 遺構、遺物出土状況(1)



1 S B46 南から



3 S D64など 東から



2 S B46 ビット内遺物出土状況



4 S D64内 遺物出土状況



6 S D33 埋土 南から

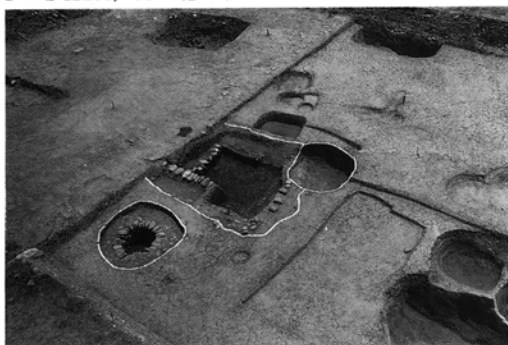


5 S D33 西から

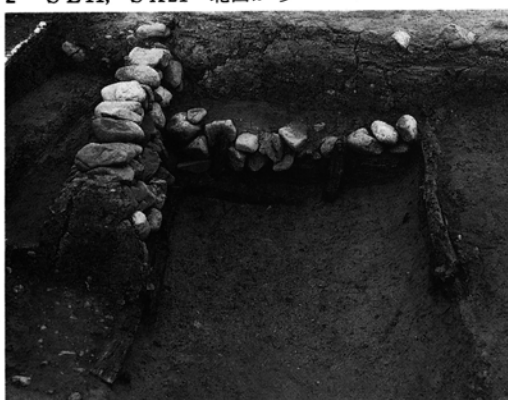
図版15 遺構，遺物出土状況(2)



1 SK100, 99 北から



2 SE11, SX21 北西から



3 SX21 西から



4 SX21 南から



5 SD74, SE10 北から



6 SX22 西から



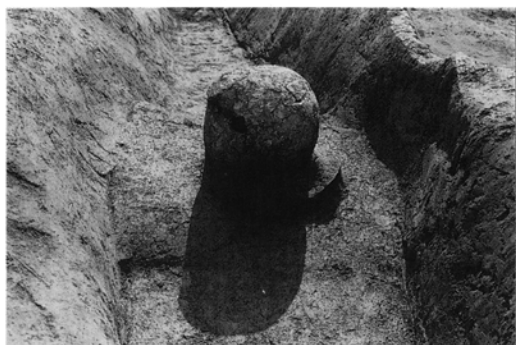
7 SX22 西から



1 S Z 24 西周溝 北から



1



2 S Z 24 南周溝



5



3 S Z 25 東周溝



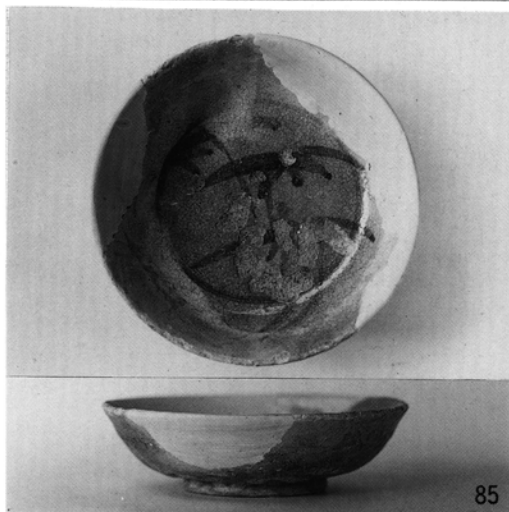
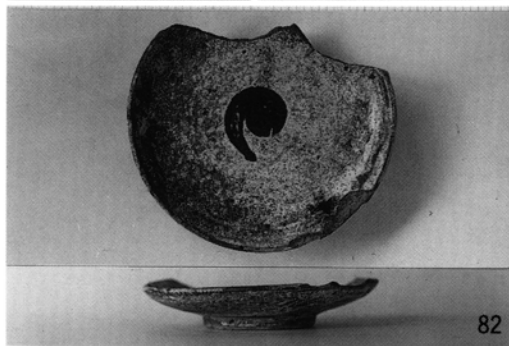
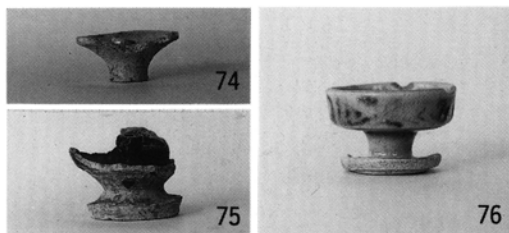
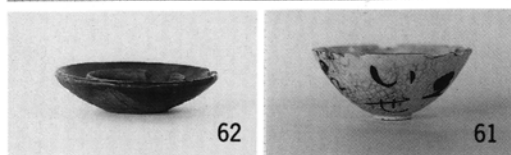
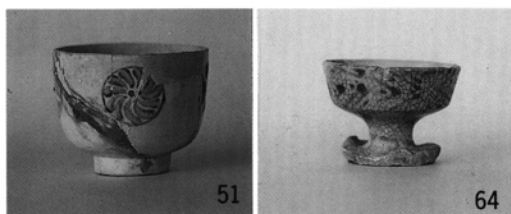
8

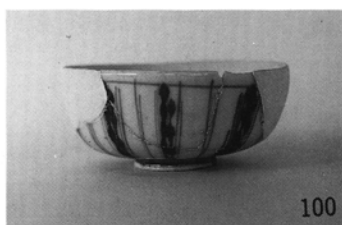
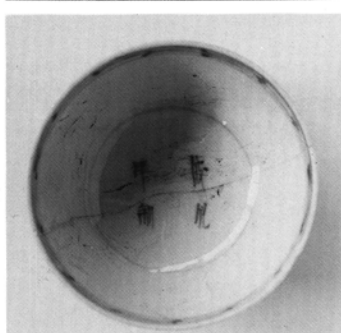
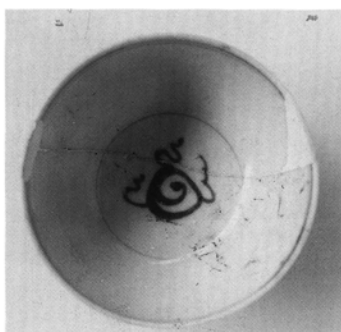
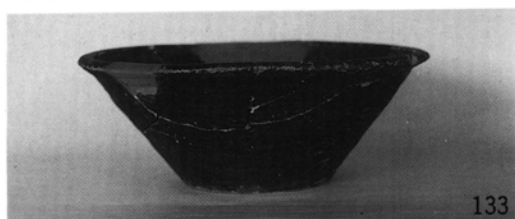
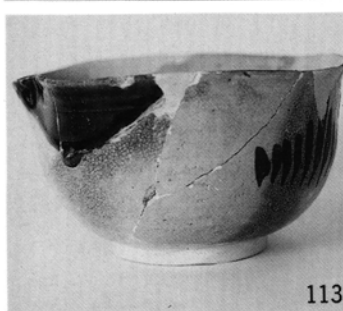
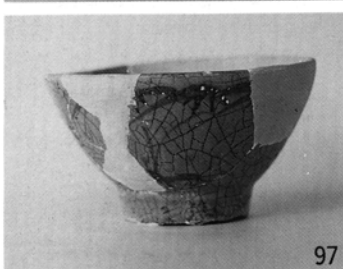


4 S Z 24, 25, S D 79 北から

图版17 遺 物 (1)

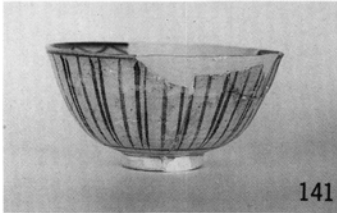








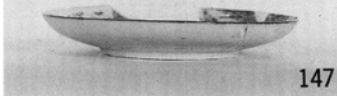
140



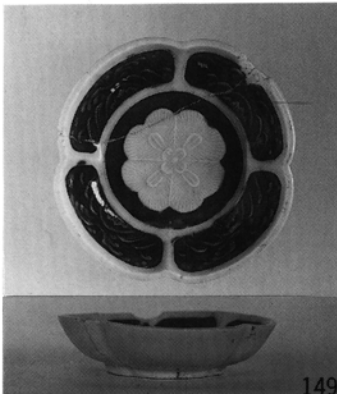
141



146



147



149

S K 57



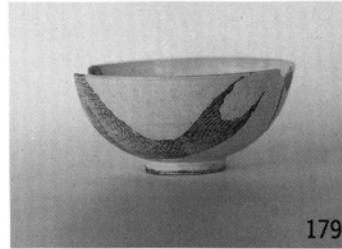
155



170



172



179



188

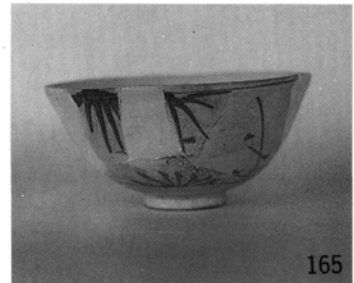
S K 100下層



157



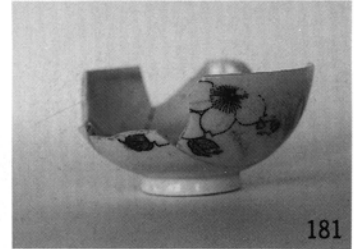
159



165



176



181



192

図版21 遺 物 (5)



204



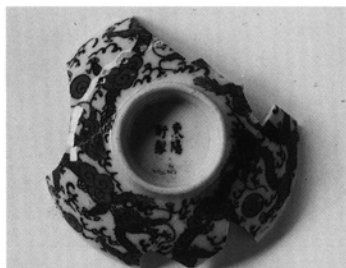
232



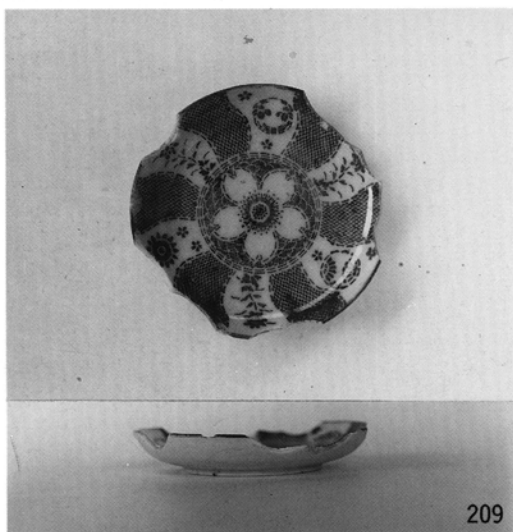
205



207



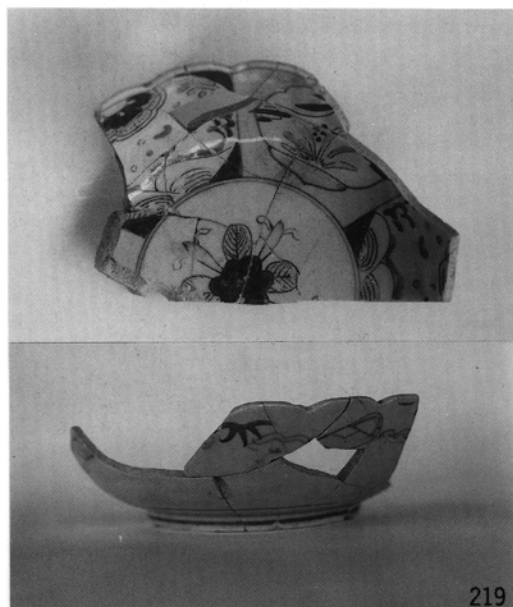
227



209



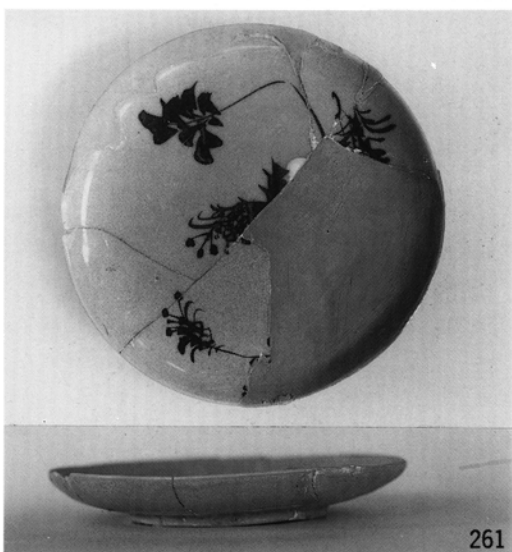
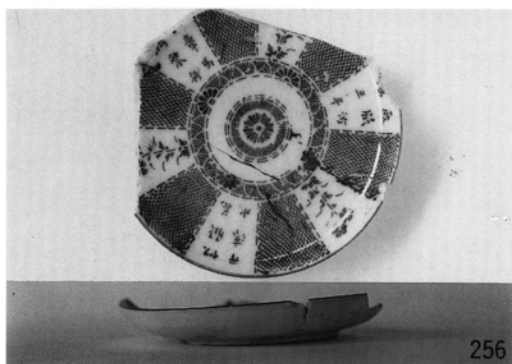
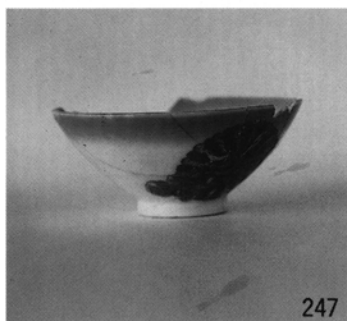
212

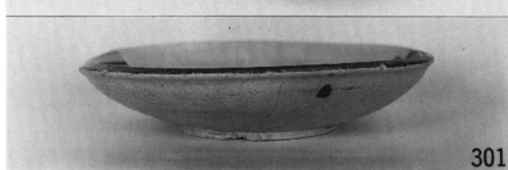
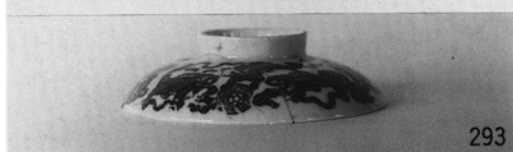
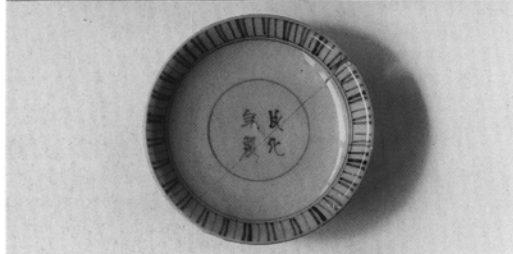
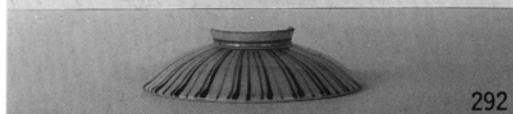
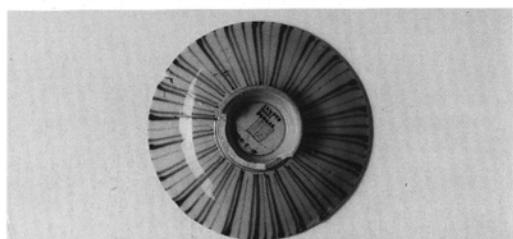


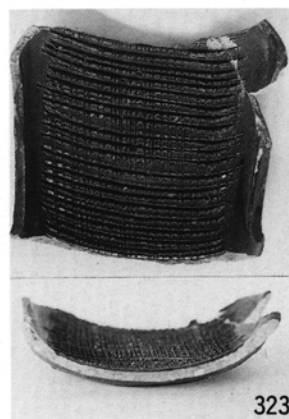
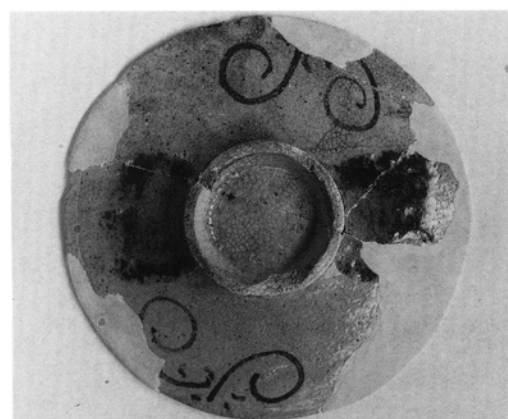
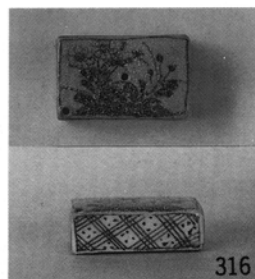
219

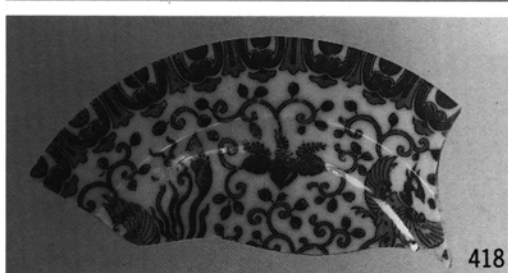
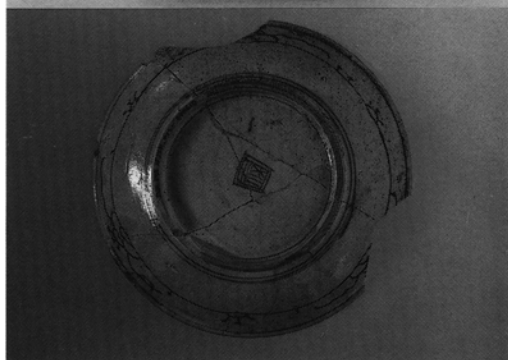
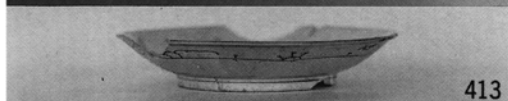
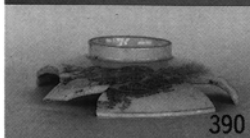
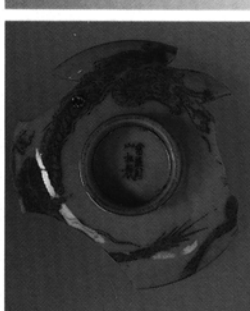
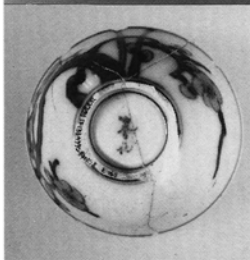
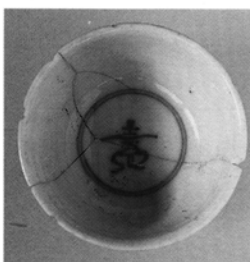
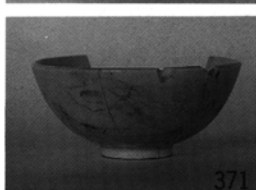
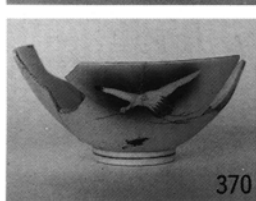
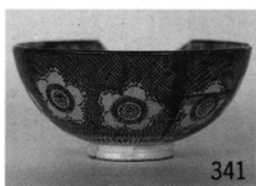


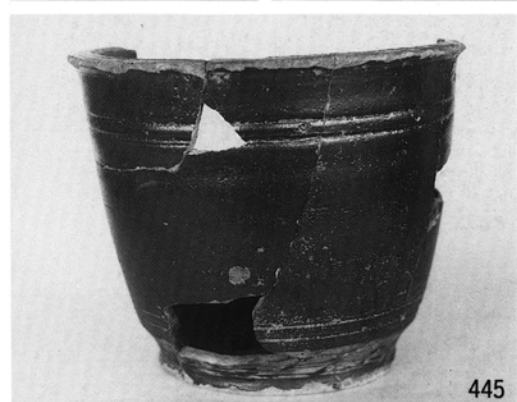
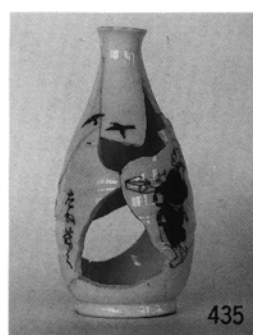
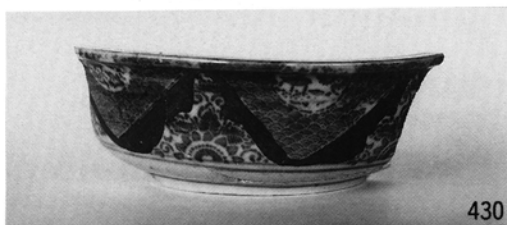
221











愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第3集

勝川遺跡

1988年3月31日

編集発行 財団法人
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社